

「いじめ対策・不登校支援事業等推進事業」  
の一環として、「学校以外の場における  
教育機会の確保等に関する調査研究」  
（「民間団体の自主的な取組の促進に関する調査研究」）  
調査研究報告書

東京学芸大学

平成31年3月

平成 30 年度文部科学省「いじめ対策・不登校支援事業等推進事業」の一環として、「学校以外の場における教育機会の確保等に関する調査研究」（「民間団体の自主的な取組の促進に関する調査研究」）調査研究報告書

## 目次

I. 調査結果総括報告	1
1. 研究の目的・位置づけ	2
1-1. 今年度研究のねらい	2
1-2. 研究の背景	2
2. 作業課題の設定と結果の概要	3
2-1. 自己評価シート（改訂版）の試作及び自己評価の試行	3
2-2. 相互評価（第三者評価）の試行	3
2-3. フリースクール等の民間団体、適応指導教室への自己評価、相互評価等についての調査	5
2-4. 適応指導教室への質問紙調査	7
2-5. 中間支援組織の評価機能等に関するヒアリング調査	7
3. 成果の普及に関する取組	8
4. 今後の課題	8
5. 研究実施概要	10
6. 研究体制	11
7. 連絡先	11
II. 調査研究結果報告	12
1. 自己評価シート（改訂版）の作成及び自己評価の試行	13
1-1. 自己評価シート（改訂版）の作成	13
1-2. 自己評価の試行	14
1-3. 自己評価の集約例	15
1-4. 自己評価試行についての小括	50
1-5. 自己評価試行の成果と課題	52
2. 第三者評価の実施について	54
2-1. 第三者評価の実施（試行）	54
2-2. 第三者評価の基準について	56
2-3. 第三者評価の結果（結果案を含む）について	57
2-4. 第三者評価等に関する中間支援組織の機能と役割に関する調査	75
3. フリースクール等の民間団体、適応指導教室への自己評価、相互評価・第三者評価等についての質問紙調査	79

3-1. フリースクール等への自己評価、第三者評価等に関する調査	79
3-2. 回答団体、回答者の属性等	79
3-3. フリースクール等における自己評価・第三者評価等の 取り組み等について	83
3-4. 適応指導教室・教育支援センターにおける自己評価・第三者評価等 の取り組みについて	88
4. 協力団体からのフィードバック	92

#### 巻末資料

資料1 自己評価シート（改訂版）

資料2 自己評価シート（記入例）

資料3 フリースクール等（学校以外の学習の場）の評価の取組に関するアンケート調査

資料4 適応指導教室・教育支援センター等の評価の取組に関する調査

# I . 調查結果總括報告

## I：調査結果総括報告

本調査研究は、平成 30 年度文部科学省「いじめ対策・不登校支援事業等推進事業」の一環として、「学校以外の場における教育機会の確保等に関する調査研究」（「民間団体の自主的な取組の促進に関する調査研究」）の受託を得て、実施したものである。ここでは、本調査研究の概要について報告する。

### 1. 研究の目的・位置づけ

#### 1-1. 今年度研究のねらい

文部科学省平成 29 年度「いじめ対策・不登校支援等推進事業」による受託研究「学校以外の場における教育機会の確保等に関する調査研究」（研究班代表、加瀬進・東京学芸大学教授）の調査の成果を踏まえながら、具体的な評価の試行、枠組みの検討を行うため、同 30 年度の同事業に基づく調査研究「民間団体の自主的な取組の促進に関する調査研究」（研究班代表、村山 拓・東京学芸大学准教授）を実施した。

#### 1-2. 研究の背景

「義務教育段階における普通教育に相当する教育の機会の確保に関する法律」の成立（平成 28 年 12 月 7 日）により、フリースクール等の多様な教育活動に注目と期待が寄せられている。その社会的背景と、これまでの各種調査研究等に基づいて、次のような課題を挙げることができる。

（1）フリースクール等がその自主性や特色を活かしつつ、広く社会の理解や賛同を得ながら質・量ともに拡充していく上では、一定の評価システムが必要といえる。

（2）フリースクール等は子どものニーズに応じた多様性・自主性を特徴とするため、評価システムの構築にあたっては、信頼性の高いフリースクール等による相互評価の方法を開発し、実用性を高める必要がある。

（3）課題として、評価そのものの必要性の認知をどのように高めるか。特徴的な実践を評価するための評価の枠組み、項目、方法はどのようにあるべきか、あり得るかの検討が必要である。

フリースクール等の在り方、またその評価指標の構成等についての研究は、まだ十分には行われておらず、例えばフリースクール等の多数がその運営形態をとっている、非営利組織（NPO）等の評価指標や枠組み等も参考にしながら、社会的認知を高めるための評価の試行と検証を進めることとした。

## 2. 作業課題の設定と結果の概要

前項で指摘した課題に取り組むため、本調査研究では以下を大きな作業の枠組みとし、作業課題を設定した。

①「義務教育段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律」等での活動や実践の意義が強調されている、「不登校児童生徒が学校以外の場において行う多様な適切な学習活動」の実施主体における相互評価のモデル的試行を通して、相互評価の有効性や実践的活用に向けた方策を示すこと。

②フリースクール等の組織間連携や実践的交流、ネットワーキングによる活動の質的向上を図るため、中間支援組織の活動内容や機能・役割を明確にすること。加えて、中間支援組織を中心としたネットワークの仕組みの構築とそれを活用した相互評価の枠組みを検討すること。

### 2-1. 自己評価シート（改訂版）の試作及び自己評価の試行

平成29年度の調査では、作成した自己評価シートに記載例をつけた調査票を、全国のフリースクール等に送付し、改訂意見を聴取した（全国約370のフリースクール等に協力を求め、回収件数118件、回収率32%）。

自己評価を実施することの意義については、概ね肯定的な回答であった。一方で、自己評価が各組織の運営や実践にどのようなメリットがあるのかが具体的にイメージしにくいという意見も見られた。また、評価項目の追加、表現の修正の意見は多数寄せられた。活動の実態が多様であるため、フリースクール等の独自の取組や、特徴的な実践を取り扱うには内容や評価項目の拡充が必要であることなどが示唆された。

本年度の調査研究では、それらの成果と課題を踏まえ、自己評価シート（改訂版）の作成を行い、具体的に8団体に試行を依頼した。具体的な団体名、評価試行の手続き等については、調査報告のセクションにて詳述する。

### 2-2. 相互評価（第三者評価）の試行

フリースクール等、計8団体にご協力いただき、3団体については直接訪問による評価の試行、5団体については、インターネット会議システム（Zoom）を利用して評価の試行を行った。

（評価試行の手順）

#### （1）事前プロセス

①評価会議の下に、対象団体ごと評価チームを編成する。

②団体から提出された自己評価シートを、該当するチームのメンバーに事前送付。

③評価チームのメンバーは、自己シートをもとに現地調査で確認する内容をまとめておく。

(2) 訪問調査所要 (1 時間半～2 程度)

- ①評価チームの自己紹介。
- ②第三者評価 (相互評価) の趣旨と評価基準を説明する。
- ③施設見学
- ④団体側から、自己評価シートの概要および補足説明。
- ⑤主担当から、あらかじめまとめた確認内容について質問。→団体側から回答
- ⑥メンバーから、追加の確認。
- ⑦主担当から、評価の基準にそって確認および質問。あわせて、お互いに意見交換。
- ⑧最後に、主担当から今後の進め方について説明。

(3) 事後プロセス

- ①訪問調査をもとに、評価基準に照らして第三者評価 (相互評価) の結果をまとめる。
- ②「評価結果 (案)」を、団体側に照会 (事実誤認や評価結果に対する修正意見など)。
- ③評価チームとしての「評価結果 (案)」を評価会議に提出。
- ④第三者評価 (相互評価) の評価結果を団体に伝えるとともに公表。

(評価基準)

1 理念・特長

- (1) 団体・スクールの理念・特長は、明確になっていますか
- (2) 理念・特長は、団体・スクールでどのように共有していますか

2 活動・取組

- (1) 理念・特長に応じた活動や取組がなされましたか
- (2) 子どもに関わる活動の内容や方法に関し、その活動や取組をより良いものにするため、最近において (この数年間で)、どのようなことを目指して、どのように変えてきましたか (活動実践における小さな工夫など)

- (3) 上記 (2) のように変えたことで、どのような効果がありましたか

(その効果は、どのような事実から効果があったと判断しますか)

- (4) その活動や取組をさらに良いものにするため、今後どのようにするつもりですか

※「活動や取組」は、複数の「活動や取組」を挙げることも可。

3 運営

以下の取組に関し、それぞれどのように機能していますか

- ①子どもの意見反映
- ②保護者・スタッフなどの意見反映
- ③地域などとの連携

2-3. フリースクール等の民間団体、適応指導教室への自己評価、相互評価等についての調査

フリースクール等における自己評価や相互評価・第三者評価に関する取り組み状況や意識等についての傾向、動向を探るため、全国の365カ所のフリースクール等へアンケート調査を行った。

- ・調査時期：2018年12月～2019年1月
- ・調査方法：学びリンク社刊『小中高・不登校生の居場所探し 2017-2018年版（全国フリースクールガイド）』に掲載の全団体（368団体）に調査票を郵送し、111団体より195件の回答を得た（団体ベースの回収率30.4%）。

・回答結果（抜粋）

表1 活動の実施や発展のために行っていること（N=187、単位：件）

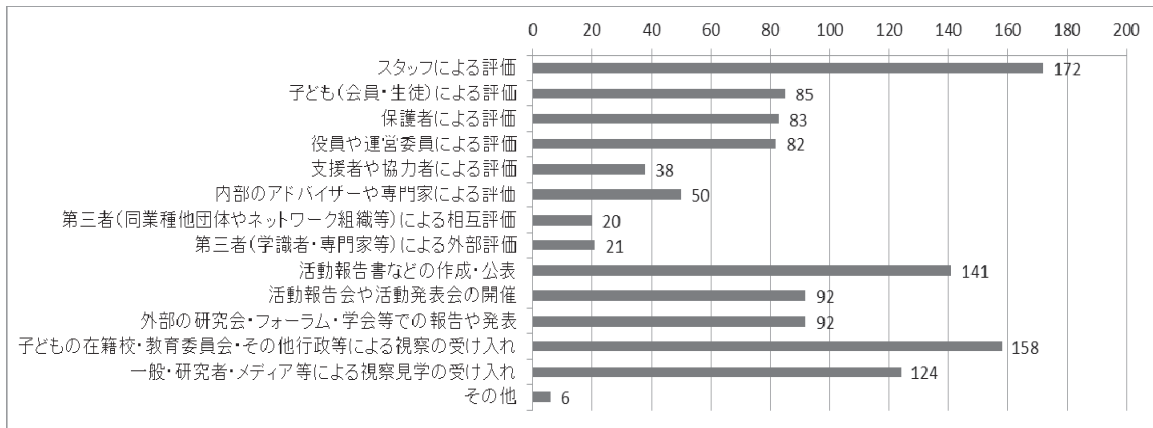


表2 評価の実施を促進する条件

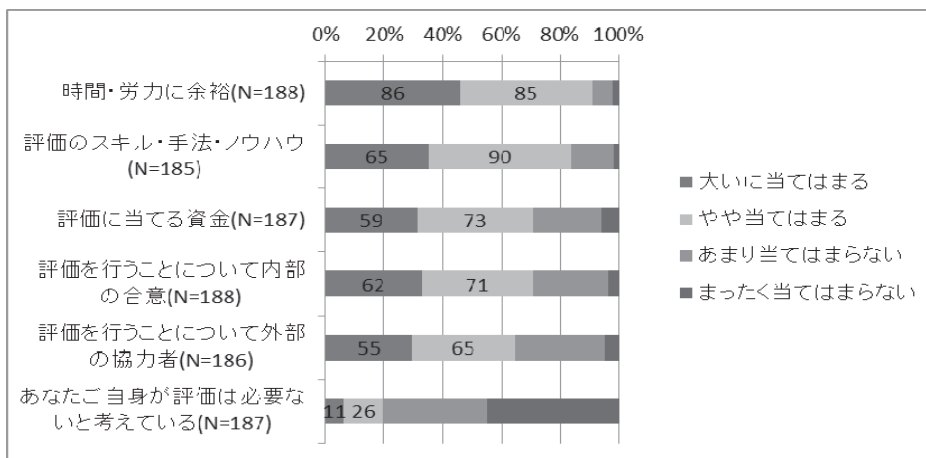


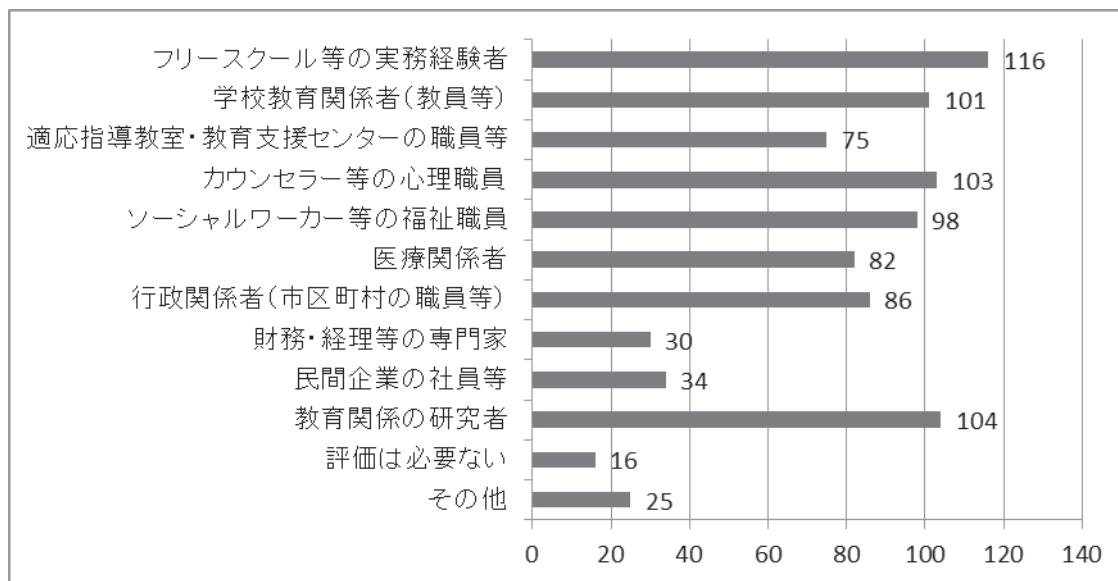
表1より、フリースクール等の各団体では、スタッフによる評価のような自己評価活動や



活動報告書、活動報告会といった外部への情報発信、学校や行政機関の受け入れ等による理解促進活動を進めている実態が明らかとなった。

表 2 からはフリースクール等が自己評価や第三者評価等を実施するにあたって、実務上の十分な時間やコストを確保できていないと考えられていることが確認できた。

表 3 第三者評価を実施する場合、どのような人が参加するのが望ましいか (N=187)



(その他の具体例)

保護者、卒業生、フリースクールに理解のある人、学生、社会人等。

表 3 では、フリースクール等が第三者評価を実施する際に、フリースクール等の実務経験者、教育、心理、社会福祉の専門家を主たる評価者として望ましいと考えていることが確認できた。

#### 2-4. 適応指導教室への質問紙調査

フリースクール等の各団体が外部機関と連携を行う際に、本事業の前提である不登校児童生徒への支援という点から適応指導教室で、自己評価や外部評価や関連する取り組みについて、質問紙調査を行った。全国 220 の適応指導教室・教育支援センターに質問紙を郵送し、135 件の回答を得た（回収率 61.4%）。

以下、結果の一部を抜粋する。

表 4 適応指導教室で第三者評価を実施する場合に期待される評価者(単位：件、複数回答)

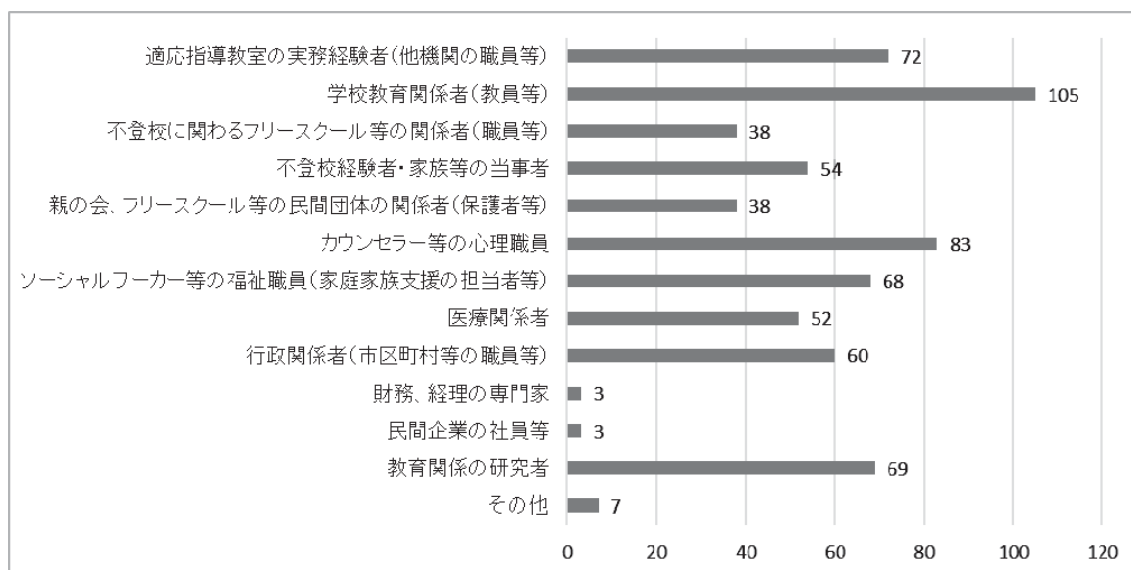


表 4 に示唆されるように、第三者評価を実施する場合、その評価者の役割は学校関係者や教育関連の研究者、カウンセラー等の心理職員が担当することが望ましいと考えていることが明らかとなった。また自己評価、相互評価・第三者評価に相当する取り組みを実施しているかを自由記述式でたずねたところ、多くの回答が寄せられたが、中でも共通する内容としては、学校や教育委員会教育相談室との合同のミーティングやカンファレンス、在籍児童生徒の基礎学力の定着率や学校復帰率などの数量的な指標に基づく検証などが挙げられた。

#### 2-5. 中間支援組織の評価機能等に関するヒアリング調査

フリースクール等の設置や運営、実践面での質の向上等を支援している中間支援組織の評価機能等に関して、全国 3 ヶ所の中間支援施設の代表者に対してヒアリング調査を実施した。ヒアリング概要は以下の通りである。

- ・ NPO と評価は切り離せないものである
- ・ 市民に公開して見せていくことが NPO の使命である

- ・評価は「情報発信」と同義と捉えるとよい
- ・評価の目と質を高めていくことが重要である
- ・活動面での評価ばかりでなく、子どもの権利条約の周知共有がなされているかなど重要な価値の共有状況を確認する必要がある
- ・活動の質の担保のために重要である
- ・評価を担う専門性や専門家が少なく、養成する必要がある
- ・中間支援組織には、評価によりコンサルティング支援していくことも重要である
- ・中間支援組織がオンブズマン機能を持つことも重要である

評価については積極的な理解が進んできていると確認できた。評価の方法や手法、評価を行っていく仕組みの開発、評価に携わる人材の養成などが課題として認識されていることを確認することができた。

### 3. 成果の普及に関する取組

平成 30 年 6 月 2 日(土)、東京学芸大学（東京都小金井市）で開催された日本教育支援協働学会創立大会ラウンドテーブルにて、本調査研究の経過等について報告を行った(ラウンドテーブル参加者約 40 名)。

平成 31 年 3 月 17 日(日)、福岡市市民福祉プラザ(福岡市中央区)で開催された、第 6 回多様な学び実践フォーラム in 九州にて調査研究の成果の報告を行った（参加者約 90 名）。

平成 31 年 3 月、成果報告書を作成し、全国のフリースクール等約 370 か所、適応指導教室・教育支援センター約 220 か所、全国各自治体の教育委員会等約 130 か所（合計約 720 か所）に配布する予定である。

今後、研究協議会代表者の所属講座・研究室のウェブサイト等に研究成果、知見等を公開する予定である。

### 4. 今後の課題

課題として、三点を挙げる。

第一に、自己評価等を実施するにあたって、フリースクール等を利用する児童生徒本人が評価する方法、枠組みの検討が十分ではなかったことである。自己評価の試行にあたり、自己評価シート(改訂版)が子どもには書きにくい(保護者にとっても一部書きにくい)との指摘は数件寄せられており、今後、学びの当事者である児童生徒にも参画してもらうことのできる評価方法を検討することが必要である。

第二に、評価者の機能や役割、またその専門性の検討や評価者の養成に関する課題を検討する必要がある。本年度の事業においては、評価者として期待される専門家として、教育関係者、心理職員、福祉職員などが多く挙げた。学びの特徴を踏まえたうえで適正な評価を実施するための要件や、その評価者像、さらに評価の実施を広く普及するための、力量のある評価者の養成をどのように進めていくかが課題である。

第三に、評価項目のさらなる検討である。昨年度の受託事業より、評価項目の検討、精査を進めてきたが、成果報告会等によるフィードバックでは、なお評価項目のハードルが高いとの指摘も挙げられた。それらの合理性、適切性の検討とあわせて、評価項目や評価方法の検討を進める必要がある。

これらの検討を踏まえて、フリースクール等の利用者、保護者のみならず、タックスペイヤーを前提とした社会的認知の向上に貢献する評価システムを構築していくことが引き続きの課題といえる。

## 5. 研究実施概要

研究調査実施の概要は以下の通りである。

時 期	内 容	備 考
平成 30 年		
5 月 1 日	・第 1 回連絡協議会開催（今年度研究実施計画等、教育協働支援学会ラウンドテーブルについて）	参加者 4 人
5 月 29 日	・第 2 回連絡協議会開催（自己評価シートの改訂、ノート型パソコンを用いた相互評価の試行について）	参加者 4 人
6 月 2 日	・日本教育支援協働学会創立大会ラウンドテーブルにて、調査研究の方針や計画、経過等について報告	参加者約 40 人
6 月 29 日	・第 3 回連絡協議会開催（昨年度の資料をもとに自己評価シート改訂の検討）	参加者 5 人
7 月 30 日	・第 4 回連絡協議会開催（今田克司さんを迎え学習会、自己評価シート改訂案等）	参加者 6 人
9 月 4 日	・第 5 回連絡協議会開催（自己評価シート改定版の実施状況について、相互評価ガイドライン等の検討）	参加者 4 人
9 月 27 日	・ヒアリング調査	参加者 1 人
10 月 19 日	・第 6 回連絡協議会開催（自己評価内容の検討、相互評価の実施形態、評価項目の検討）	参加者 4 人
11 月 6 日	・第 7 回連絡協議会開催（相互評価の実施形態、評価項目の検討）	参加者 5 人
11 月 19 日	・ヒアリング調査実施	参加者 9 人
12 月 4 日	・第 8 回連絡協議会開催	参加者 4 人
12 月 7 日	・ヒアリング調査実施	参加者 11 人
12 月 22 日	・第 9 回連絡協議会開催（第三者評価のフィードバック方法の確認等）	参加者 2 人
12 月 22 日	・ヒアリング調査実施（中間組織の評価機能について）	参加者 5 人
12 月 25 日	・Zoom によるヒアリング調査実施	参加者 29 人
平成 31 年		
1 月 22 日	・第 10 回連絡協議会開催（第三者評価の進捗状況の確認報告書構成案の検討・確認）	参加者 3 人
2 月 22 日	・適応指導教室についての意見聴取	参加者 1 人
3 月 5 日	・第 11 回連絡協議会開催（フォーラムでの報告内容等の検討）	参加者 3 人
3 月 17 日	・研究成果報告会	参加者（旅費支払い）21 名、 参加者計約 90 名

3月28日	・研究報告書発送	①フリースクール 365 か所 ②適応指導教室 220 か所③ 都道府県・政令 指定都市・東京 都区市町村教 育委員会 128 カ所④協力団 体 8 カ所
-------	----------	--

#### 6. 研究体制（順不同、敬称略）

村山 拓、加瀬 進（東京学芸大学）、奥地圭子、中村国生、朝倉景樹（東京シューレ）  
松島裕之（フリースクール全国ネットワーク）、亀田徹（LITALICO 研究所）

#### 7. 連絡先

東京学芸大学総合教育科学系 准教授 村山 拓  
（〒184-8501）東京都小金井市貫井北町4-1-1  
電話番号 042-329-7601  
E-mail アドレス soukei@u-gakugei.ac.jp

## II. 調查研究結果報告

## 1. 自己評価シート（改訂版）の作成及び自己評価の試行

### 1-1. 自己評価シート（改訂版）の作成

平成 29 年度の調査では、作成した自己評価シートに記載例をつけた調査票を、全国のフリースクール等に送付し、意見を聴取した（全国約 370 のフリースクール等に協力を求め、回収件数 118 件、回収率 32%）。その際の主なフィードバック項目は以下のようなものであった。

- ・自己評価を実施することの意義については概ね肯定的な回答であった。
- ・一方で、自己評価が各組織の運営や実践にどのようなメリットがあるのかが具体的にイメージしにくいという意見も見られた。
- ・評価項目の追加、表現の修正の意見は多数寄せられた。活動の実態が多様であるため、フリースクール等の独自の取組や、特徴的な実践を取り扱うには内容や評価項目の拡充が必要であることなどが示唆された。

それらのフィードバック等をふまえ、協議会内部で検討を進め、自己評価シートの目的、項目等を精査する形で、自己評価シート（改訂版）を作成した。自己評価シート（改訂版）及び記入例は巻末資料に付すが、主な評価項目としては、以下のようなものとなった

- ・団体の概要（フェイスシートに相当）
- ・活動の状況（開室日数、利用する児童生徒の属性等、安全面での配慮等）
- ・各フリースクール等の理念や活動・学びの特長等
- ・近年取り組んできた実践や方針、それらの方針の背景にある子どもの状況の変化、ニーズ等
- ・近年の取組みの中で、成果のあったと考えられる特徴的な実践等
- ・各フリースクール等の卒業生の進路状況
- ・子どもの学び・活動の向上、団体・組織の向上のために、取り組んでいること（研修・評価など）
- ・各フリースクール等の組織・運営について（どのようなしくみがあるか、反映した成果の実例等）
- ・学校・行政・地域・団体・NPO・企業等との連携について
- ・各フリースクール等の理念を実現し、特長を活かし、学び・活動をより発展させるために、課題となっていることと改善のための今後の方針について



## 1-2. 自己評価の試行

以下の概要で、フリースクール等に自己評価の試行を依頼し、協力を仰いだ。

### 【試行実施依頼団体・スクール】（順不同）

- フリースクール札幌自由が丘学園（NPO 法人、北海道札幌市）
- フリースペースつなぎ（一般社団法人、宮城県気仙沼市）
- フリースクール寺子屋方丈舎（NPO 法人、福島県会津若松市）
- フリースクールコスモ（NPO 法人、東京都三鷹市）
- フリースクールネモ（NPO 法人、千葉県習志野市）
- 横浜シュタイナー学園（NPO 法人、神奈川県横浜市）
- 箕面こどもの森学園（NPO 法人、大阪府箕面市）
- 箱崎自由学舎えすぺらんさ（NPO 法人、福岡県福岡市）

### 【自己評価の試行実施結果】

一団体につき、可能な限り、代表者や管理者以外からも自己評価シートの記入に協力をいただきたい旨の依頼をしたところ、各団体から計 24 件の自己評価シートの協力を受けた。

自己評価シート記入者の立場は以下の通りである。自己評価記入内容の一覧は巻末資料に付す。

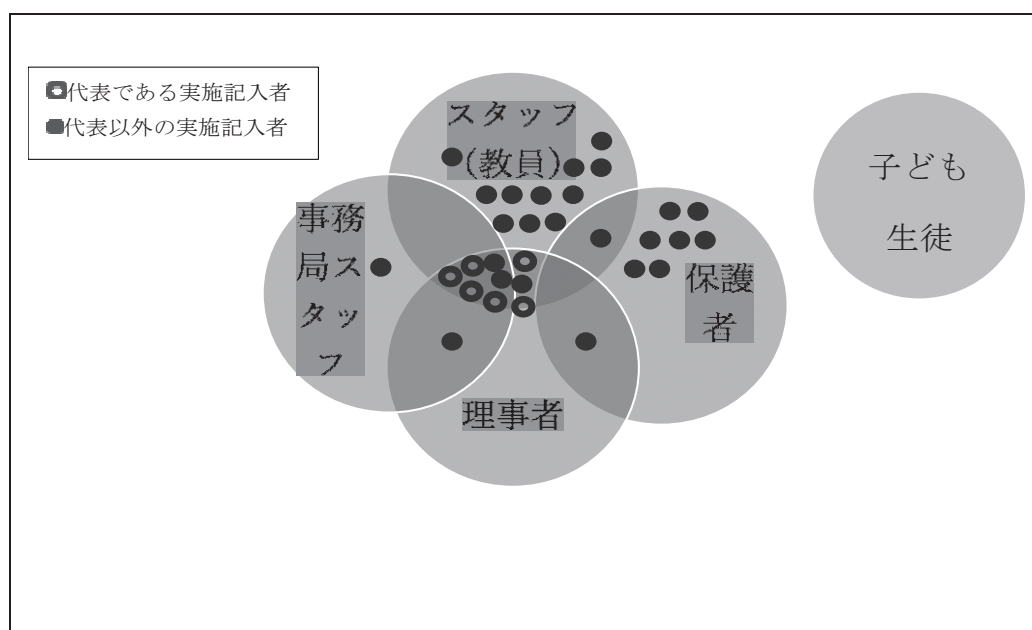


図1 自己評価シート記入者の立場（属性）

図1にみられるように、今回の自己評価の試行では、さまざまな立場の関係者から協力を受けることが出来た。しかしながら、フリースクール等を利用する子どもについては、複数の団体から自己評価が困難であるとの指摘を受け、今回の試行では子どもの記入シートを得ることはできなかった。

### 1-3. 自己評価の集約例

今回の調査では、前項に示したように、自己評価シートを団体の様々な立場の関係者に記入してもらった形が協力を得たが、各団体内でどのように集約するかについても検討が必要である。なお、研究協議会の内部で同一団体内での自己評価シートの集約をした例を示す。

#### 1-3-1. 箕面子どもの森学園 自己評価シートとりまとめ例

##### ■受入対象

受入対象年齢\_下限 6才

受入対象年齢\_上限 13才

在籍上限年齢 16才

##### ■受入の条件

本人が入学を希望すること。

他の子どもやスタッフとコミュニケーションがとれること。

保護者が学校の教育理念や方法に賛同していること。

##### ■運営形態

・通所型

週当たりの開所日数：5日

1日の開所時間：420分（7時間）

##### ■子どもの人数

就学前	
小学生	42
中学生	13
15~17歳	
18~19歳	
20歳以上	
合計	55

2017年度入会者数	14
2017年度退会者数	11
増減	+3

##### ■スタッフの概況

常勤有給 6人

常勤無給 0人

非常勤有給 9人

非常勤無給 0人  
 有償ボランティア 8人  
 無償ボランティア 0人

■HPで公開している情報

理念や特徴	1
入会案内・入会条件	1
代表・責任者名、役員	
在籍している子どもの概況	
スタッフの概況	
学習や活動の様子	1
入会金・会費（授業料）・その他費用	
団体・スクールの財務状況	1
問合せ先や方法	1

■活動内容

個別学習・個別対応	1
学習成果等発表会	1
授業形式による学習	1
居場所提供	
社会体験	1
相談・カウンセリング	1
自然体験	1
SST	1
調理体験	1
受験勉強	
芸術活動	1
就労訓練	
スポーツ活動	1
保護者会親の会	
宿泊体験	1
その他特色ある活動	1
子どもミーティング	1

保護者とスタッフの懇談会、フリーマーケット、  
 各種イベント

## ■安全面で実施配慮していることについて

災害時の避難訓練、スポーツ安全保険、建物賠償保険加入

## ■理念、学び・活動の特徴

箕面こどもの森学園は、子ども一人ひとりの個性を尊重し、民主的に生きる市民を育むことを目的としたオルタナティブスクール（小中学校）である。子どもの興味・関心を学習の中心にすえ、子ども自身の生活から学習を組み立てるフレネ教育やイエナプラン教育をベースに、ESD(持続可能な開発のための教育)を行っている。

子どもたちは、自由・平等・自己尊重・協働といった民主的な価値観を共有し、学校共同体の一員としてふるまうことが求められている。生活のルールや行事は子どもたちが中心になって企画から運営まで行っている。教育方法には、①3学年合同のマルチエイジ・クラスで学ぶ、②子ども自身が学習計画を立てる、③グループでの対話を活発に行う、④自分で決定し、その結果に責任を持つ、⑤学習方式には、基礎学習、テーマ学習、プロジェクト、選択プログラムの4つの方式がある、⑥学習形態には、個別学習と共同学習がある、などの特長がある。

## ■3年間で重点に取り組んできた方針とその背景にあったニーズ、状況等

### ①子どもの自己肯定感を高める

自己肯定感の高い子は、物事に積極的に取り組むことができるが、そうでない子は集中して物事に取り組むことができにくい。自己肯定感の低い子への特別な対応が必要である。例えば、その子のできることに注目し、それをほめたり、励ましたりすることが必要。

### ②子ども同士が対立した場合の解決法を考える

子ども同士でケンカや反目があった場合、両者の言い分をよく聞く必要がある。その上で、スタッフと子どもとで平和的な解決法を考えるようにしている。

### ③ESD（持続可能な開発のための教育）を実践する

SDGsの基盤となるESDを長年行ってきたが、その実践記録をまとめた小冊子を発行した。

### ④カリキュラムをブラッシュアップする

カリキュラムの大枠は変わらないが、内容や方法については、子どもたちの反応や状況によって、より効果的なものにするように、適宜、スタッフ間で話し合いを持っている。"

## ■三年間で成果のあった特徴的な事例

### □スタッフ1

1-1 イギリスで開発されたジオボード(幾何・図形教具)を学園で自作して子どもたち(3・4年生)に自由に使用してもらった。この活動を通して、図形の基本的な特徴を楽しみながら獲得することができた。

1-2 ボードを使えば、輪ゴムをクギにかけていくだけで、様々な図形が自由に得られる。本作業をカラーゴムで取り組みながら、子ども同士が観察し合う中で、単なる絵柄から図形への認識が深まっていった。自由な絵柄→秩序のある図形（対称性のある図形・閉じた図形）図形の特徴の把握

1-3 平行、直角、対称などのポイントとなるコトバを投げかければ、基本的な図形が次々と生まれてくる。

1-4 今回のジオボードでは、直線で囲まれた図形だけなので、円や曲線への新しい工夫が必要である。

1-5 ジオボードは、20 cm×20 cmくらいの大きさの板に、たて、よこ各 1.5 cm程度の等間隔にクギを碁盤の目のように打ちならべた板の教具

2-1 クギの格子点は、座標としても使えるので、直線(1次関数)のグラフを正確に手軽に扱うことが出来た。

2-2 直線の式から任意の2点PとQの座標を計算し、これら2点を結べば輪ゴムで直線が表示される、この直線状にクギの頭が並ぶことから、「直線=点の始まり」との認識を自然に獲得した。

2-4 ジオボードでは、曲線への対応が、そのままでは、無理である。

## □スタッフ2

1-1 2017年2学期に「平和」について学習した。戦争など過去のできごとだけでなく、これからどうやって平和を作っていけばいいかという「積極的平和の作り方」について学習した。その土台となる「自分の平和」「自分と周りの人との平和」について子どもたち一人ひとりが自分をふりかえりながら「平和のレシピ」を考えた。

1-2 「自分」を知ることからスタート。好きなこと、ものを「好き好きマップ」に描き、お互いに見せ合うことで、誰一人同じ人はいない「かけがえのない自分」を感じとっていた。どんな時自分が平和になるのかを発見し、絵を描いてレシピを作った。次に「自分と家族」「自分と友だち」の関係が平和になるためのレシピを考えた。自分が行動することで平和を作ることができるということを学び、学習発表会で人に伝えることができた。

1-3 こどもの森では日常的に「自分も人も大切に」とはどういうことかを子どもたちに問い続けている。この学習ではこどもの森の根幹となるこのテーマをより深めることが目的となった。子どもの存在そのものを認めることが大事で、子どもの好きなことをしれば大人の価値観と違っていても否定せず受けとめること、子どもの内側から湧き出るものを形にしていくことが基本的な関わり方となった。

1-4 完成した子どもたちのレシピを後日1冊の絵本にまとめ、発行し、子どもたちや関係者に配布した。また、その制作費用を寄付でまかなうことで、より多くの人たちに平和について発信し、共感を得ることができた。3年後にまた「平和」を扱う時が来るので、その時の参考資料にしたい。

1-5 「平和のレシピ～ささやかな授業」A4 サイズ、オールカラー、2018年9月発行、500円

2-1 子どもたちが書いた作文の中から、みんなで1つ選んだ作品を子どもたち同士で推敲する。個人の作品がクラス全体の共有の作品となる。書いた子どものことをよりよく知り、その子の思いがより表現されるようなものとなることで、子どもの自己肯定感も育まれ、文書力も身につく。

2-2 1文ずつ、これでいいか確認していく過程で、子どもたちの中から「○○の方がいいんじゃない？」「△△って書き方はどう？」とよりふさわしい表現方法を探し出そうとする意見が出てでくる。そこで対話しながら全員がそれがいいと思える表現方法におちついていく。1人では気付かなかったものが見えてくる瞬間がたくさんあった。

2-3 ファシリテーターに徹する。教えないで、問いかけ、子どもたちの中から出てくることばを大切にする。特に重要だと思われる部分については時間をかけて問いかけていく。

2-4 こうしてよりよくできあがった作文は、書いた本人が清書し、壁面に掲示する、これをお手本にして他の子どもが視写をしてもよい。子どもの作品が教材となる。

2-5 フレネ教育、自由作文

□スタッフ3

1-1 2017年1学期に「気候変動」について学習した。ESDを実践する学校としてこのテーマに取り組み、地球にやさしい生活、生き方とはどんな事かをみんなで考えた。地球温暖化や自然の変化、森林破壊など世界で起こっている異常な現象を知った後、自分との関わりを考え、発表し、自分たちにできる事を実行に移した。

1-2 ウータン・森と生活を考える会や箕面アジェンダ21の会などから講師を呼び、森林破壊や地球温暖化について学んだ。低学年は学んだ事を劇に作りあげ演じたり、あってほしい地球の姿をパノラマに創作した。高学年・中学部ではそれぞれの興味・関心に沿った内容を調べ考えた事を発表した。その後全校で会議を開き、地球のためにできる事を提案・協議した。節水・節電のためのシールを貼ったり、休憩時間にライトを消したり、日よけ用の緑のカーテンの植物を育てたり、子どもたち自ら行動に移した。

1-3 子どもたちがいま世界で起こっている事を知り、関心を持つために、初めに地球の環境破壊の映画を見たり、環境団体によるお話や体験学習を行った。低学年では地球のぬいぐるみを使って、身近な存在として認識できるようにした。高学年・中学部では一人ひとりが地球温暖化ストップのために何が必要かを問いかけ、それぞれの興味にそったテーマ発表をサポートした。

1-4 学習の最後に全校で会議を開き、自分たちでできる事を協議し、実行に移したが、月日が経つにつれ、その意識が薄れてきているように思う。エコウィークを作り継続して取り組むことを子どもたちで決めたので実行されるように促す。

1-5 地球環境保全団体の協力を得て、映像を使つての学習や体験学習が行え、子どもたちにもわかりやすかった。最後の全体会議にも参加していただき、地域や団体とのつながりが

できた。

#### □スタッフ4

1-1 高学年クラス（小4～小6：約20名）で、年に1回修学旅行に行きます。行先も行程も子どもたちで話し合って決め、修学旅行に必要な資金も子どもたちで集め、宿泊先の予約、当日の引率なども、子どもたちで行います。2017年度は城崎、2016年度は白浜、今年度は別府に行くことを計画しています。

1-2 毎年、6年生の人たちが行先を話し合って決めます。行きたいところについて調べてきて、それをプレゼンしその内容を協議して、行先を決定していきます。このことにより、子どもたちは、以下のことを学んでいます。①自分の思いを伝え、相手の思いを聴く。②話し合いにより、意見をまとめていく。白浜と京都で意見が対立し、なかなか決まりませんでしたでしたが、話し合いを続ける中で、修学旅行で白浜に行くけど、日帰り旅行で京都に行くことになりました。行先が決まると、4年生から6年生までの全員で資金集めについての話し合いが行われます。フリマを開催したり、地域のイベントに出店したりするほか、寄付を集めたり、自分たちでチャリティーのイベントを開催したりもします。修学旅行当日も、行程、宿泊先、見学先などの担当があり、それぞれの子どもたちが連携して引率を行っていきます。このことにより、子どもたちは、上記の①②に加え、③チームの一員として自分の役割を引き受ける。④一人ひとりの力が合わさることで、大きなことが実現できる。ということ学び、達成感を得て、仲間への信頼、一体感を感じていっています。

1-3 子どもたちを見守りながら、子どもたちの話し合いの交通整理をすることと、修学旅行までの準備の日数などを提示し、子どもたちにスケジュール管理を促すことです。子どもたちが準備を進めていくうえでも、一人ひとりの準備が決められた日程までに行われていくようサポートします。

1-4 この取り組み自体は、充実したものだと思いますが、資金も集めていくため、資金集めが苦しくなり楽しめないという声が出たり、2学期に実施するので、ほかの行事とも重なり、子どもたちが忙しくなっているところもあります。ほかの行事との兼ね合いや、資金集めの方法など、話し合っただけで負担を減らしてもいいかもしれません。

2-1 ユネスコスクールに認定されていて、その中でもESD重点校に選ばれている関係で、2017年1学期に気候変動について全校で取り組みました。日ごろ活動をされている方からお話を聞いたり、関係のある場所に見学に行ったりして学んでいきました。低学年クラス（1年生～3年生）は、「ちーきゅん（地球）を救え！」という内容で、「もったいない」という観点から、エコ活動をした後、子どもたちの希望により、理想の地球のパノラマを創るグループと、劇を作って発表するグループにわかれて学習しました。

高学年・中学生クラスは、自分の関心のあるテーマ「温暖化が起きる理由」「動物への影響」「植物への影響」などについてさらに深く調べていき、それぞれが学んだことを学習発表会で発表しました。

全校で取り組むエコ活動についてもみんなで考え、紙のリサイクルや電気をこまめに消す

ことなどが決まりました。

2-2 始めは、気候変動のことについて、あまり多くのことを知らなかった子どもたちですが、学習を進めるうちにいろんなことを知っていき、自分の生活と気候変動とのかかわりを意識し始め、自分にできることを考えるようになっていきました。

2-3 子どもたちが、興味・関心をもって、気候変動の学習が進められるように、なるべく具体的な映像を見せて説明をしたり、外部の専門家や活動家の方々とコンタクトをとり、子どもたちの学習のサポートをお願いしていきました。子どもたち一人ひとりの声をよく聞き、それぞれの興味・関心に沿った資料を提供したり、子どもたちとの対話を積み重ね、子どもたちの学びが深まるようサポートしてきました。

2-4 子どもたちの気づきや学び、自分の生活とのつながりがさらに深まり、学んだ結果が自分の生活に変化を与えたり、学んだ成果が地域住民のみなさんの意識をも変えていけるような取り組みに発展できるよう、地域住民の方々を巻き込んだ学習を展開していければと思います。

## ■子どもの進路について

### □学園長

自分の好きなこと、将来やりたいこと、成りたい職業などを考えて、進学先を決めている子が多い。進学先は、私立高校、通信制高校、インターナショナルスクール、海外の学校などである。高校卒業後は大学に進学する子が多いが、音楽学校を卒業してプロ歌手になった人や、ピースボートに乗って海外旅行をし、帰国後ピースボートのスタッフになった人もいる。

### □スタッフ2

オルタナティブスクール、インターナショナルスクール、私立中学、私立高校、通信制高校、私立大学、公立大学など。社会課題に関心を持ち、世界に出ていく人や、自分の好きなことに取り組む道を選択する人が目立つ。

### □スタッフ3

卒業後はそれぞれが自分に合った学びができる学校を見つけ、主体的に学校生活を送っている。きのくにこどもの村学園、コリア国際学園、箕面自由学園、歳暮被昇天学園、関西学院千里国際などに進み、自分の興味、関心をさらに広げ、深めている。OB,OGのなかには、公開し、助産師、工学研究者、音楽アーティスト、獣医師を目指す人や世界一周の船旅に出る人など自分の進路をしっかりと見つめ一步一步進めている。

### □スタッフ4

自分の意思をはっきりもって、自分のやりたいことをやろうとしたり、社会に貢献しようとする人が多いです。大学を1年間休学して、東北の被災地で子ども支援のインターンをしたり、ピースボートに乗って世界を回った後、環境問題に関心が高まりフィリピンでインターンをしている人、途上国で助産師になることを目指しガーナでインターンをしてい



る人、歌手を目指して音楽活動をしている人、アーティスト（作家）活動をしている人などがいます。

■子どもの学び、活動、団体の向上のために取り組んでいること

□学園長

効果的な学習指導法やソーシャルスキル・トレーニングなどをテーマに、月に1回スタッフ研修会を開いて研鑽している。また、組織の事業計画や運営について毎月1回、運営委員会を開いて、話し合っている。

□スタッフ1

さんすう・数学担当者相互の毎週の実践研究会と次回に向けての打合。また、教務協研究会への参加と発表。

□スタッフ2

週1回のスタッフ会議、月1回のスタッフ研修、ユネスコスクール関係の海外・園内研修など。

□スタッフ3

子どもたちは、一年の目標、学期の目標、月の学習計画、一週間の学習計画を自分で立て、実行し、スタッフはそれをサポートしている。また、週、月、学期、一年の振り返りをする中で、自分の学びに主体的に取り組んでいる。週末、学期末の振り返り用紙には子どもたち自身だけではなく、スタッフからの子どもに対してコメントを記入し、それぞれ持ち帰り、家庭からもコメントをお願いしている。スタッフ会議で子どもの様子の報告、協議を重ね、スタッフ研修も行っている。

□スタッフ4

子どもたちの学び・活動を向上させるために、毎週スタッフ会議を開催しています。ここでは、子どもたち一人ひとりのサポート、学習支援について話合われます。月に1回、スタッフ研修も開催し、力量向上に努めています。団体・組織の向上のためには、月に1回、運営委員会を開催し、組織の運営について話し合っています。それ以外に、ビジョンミーティングを2か月に1回程度行い、自分たちの組織が進みたい方向に向かっているかを話し合うとともに、また次に向かっていく先を話し合っていて決めています。

これに加え、2か月に1度コンサルさんとのミーティングがあり、できたこと、できていないこと、今度のチャレンジについて報告、確認して、進めています。"

■団体、組織、運営への意見反映の仕組み

□学園長

子ども 子ども意見の反映する場としては、クラス集会、小学部集会、中学部集会、全校集会などがあり、そこでは子どもとスタッフが対等な立場で、学校生活に関わる問題について話し合い、問題を解決している。例えば、学校のルール、イベントの開催、子ど

もの問題行動に対する対応などがテーマとしてあげられる。個人の意見が尊重されるので、子どもたちの参加意欲や満足度は高い。

スタッフ スタッフの意見を反映する場としては、週に1回開かれるスタッフ会議があり、そこでは子どもたちの状態の共有、学習内容について検討、子ども同士のトラブルの解決法などについて話し合っている。会議ではスタッフ同士がフランクに話し合い、意思決定を行っている。これらのことによって、スタッフ間の問題意識の共有と連帯感が高まっている。

保護者 保護者の意見を反映する場としては、「保護者懇談」、「おとなの会」などがある。保護者懇談は1学期に1回、全保護者に対して行っているが、このほかに保護者から申し入れがあれば、随時相談に応じている。おとなの会では、スタッフと保護者が月に一回学校に集まって、学校の近況報告、クラス毎の懇談会、子どもの教育に関する勉強会などを行っている。そのほか、学校の緊急の仕事をやってもらうために、保護者のボランティアとして来てもらっている。このように保護者が少しでも学校の仕事に関わることによって、学校への理解と参加意識がたかまっている。

#### □スタッフ2

子ども 月1回のクラス集会、週1回の全体集会(小学部集会、中学部集会、全校集会)学校全体のルールを全員一致で決める。今の課題は生徒数が多くなったため、本音が出にくくなっていること。ていねいな意見交換ができるしくみがある。

スタッフ スタッフ会議では全員が対等に意見を言い合う文化がある。学園長、校長の提案事項も出席者全員でもまれ、全員が納得する形で決定する。時には却下されることもある。

保護者 日々の送迎時に気軽に話せる空気がある。月1回保護者とスタッフの集まり(おとなの会)がある。必要に応じて保護者の方に学習の講師になってもらうこともある。NPOの運営委員となり、団体の運営にも積極的に関わってもらっている。

#### □スタッフ3

子ども 子どもたちは低学年集会、高学年集会、中学部集会、全体集会で自分が困っていることや他の人の良いところ、自分がやりたい事、学校のルールに関する事、行事などを話し合います。司会や記録、ボードなどを子どもたち自身が行い、多数決ではなく、話し合いにより決定される。決定された事は全員の了解の元、実行することになる。低学年から話し合いに主体的に参加し、その内容を自分の事として考え、発言することで、自分も他人も大切にしながら子どもたちによる学校づくりが進められている。

スタッフ 毎週スタッフ会議があり、月に一度スタッフ研修を行っている。どのスタッフも議題を挙げることができ、話し合いに主体的に参加している。年齢、性別やこれまでのスタッフ歴などに関係なく、自由に発言できる雰囲気である。そうすることで多様根意見を受けとめ、自分も他人も尊重され、こどもの森学園の学校づくり全体に反映されていると考える。

保護者 月に一度「大人の会」があり、スタッフと保護者でクラスや学校で起こっている事、子どもたちの様子などを共有している、この会は保護者が積極的に全体で話し合いたいことややりたい事を提案し、実現ができる場である。入学後に湧いた疑問について意見を聞いたり、卒業生の保護者の話を聞くなど、保護者がこの学校を理解し、信頼関係を作っていける場になっている。

#### □スタッフ4

子ども 全校集会というミーティングがあり、だれでも意見を提案することができ、学校運営に参画することができます。また、学校行事は、子どもたちによる実行委員会で企画されます。この実行委員会にも、だれでも参加できます。子どもたちは一人ひとり、自分にあった学習計画を作成する権利があり、その学習計画に沿って学習が進みます。

こうした取り組みによって、子どもたちは、自分が一人の人間として尊重されていることを学び、自分をのびのびと表現するだけでなく、他者に対する思いやりも芽生え、自立した人に育っていきます。

スタッフ 毎週開催されるスタッフ会議には、スタッフであればだれでも参加でき、どんな意見でも発言することができます。発言された意見は、会議で協議され、必要なものは全体に反映されていきます。

保護者 スタッフと保護者でつくる「おとなの会」という会があります。ここでは、スタッフと保護者であれば、だれでも参加することができ、自分の意見を言ったり、企画したいことを企画していくことができます。また、スタッフ・保護者・一般市民も入ることができる「運営委員会」があります。ここでは、組織全体のことを話し合うのですが、保護者だけでなく、正会員であれば、一般市民も参加することができ、自分の意見を言ったり、役割を担ったりしながら、組織運営に参加することができます。

### ■連携について

#### □学園長

##### 【学校・行政】

子どもたちの在籍校には、各学期末に出席日数と学習した内容を報告している。また、在籍校のクラス担任や校長先生が私たちの学校を視察に来られることもある。学校によって、出席日数カウントや自習用定期券の証明書を発行してくれるところと、そうでないところがある。いくつかの教育委員会に私たちの学校のことを説明しに行ったことがあるが、学校復帰を促すように言われるところがあった。

##### 【地域・団体・NPO・企業】

同じ地域のNPO団体と連携して、交流会やフリーマーケットを開いている。このことを通して、地域での私たちの認知度が高くなった。また、他のフリースクールやオルタナティブ・スクールと連携して、年1回、子育て・教育についてのフォーラムを開いているが、一般の人にも多数参加してもらい、多様な学び場についての理解と普及を図っている。

#### □スタッフ2

##### 【学校・行政】

在籍校には学期ごと(要望があれば毎月ごと)に出席日数や学習内容の報告をしている、在籍校の出席日数としてカウントする場合とそうでない場合がある。通学定期も課題。不登校支援のスクールでないため、保障法の枠外となっている。

##### 【地域・団体・NPO・企業】

いろんな団体、企業とのつながりが増えてきて、物品の寄付や、融資などの支援をいただいている。今後は ESG 投資先として選ばれる働きかけをしていくことが重要だと考えている。

#### □スタッフ3

##### 【学校・行政】

箕面こどもの森学園の理念やこれまでの歩み、現状を市の教育担当者や市会議員の方に説明し、学校の理解を求めている。他市での学校づくり、町づくりという将来構想に向けて協力をしていただきつつある。

##### 【地域・団体・NPO・企業】

地域や NPO 団体のイベント出店を通して学校の紹介、PR をさせていただいている。また子どもの学習の講師として地域団体や企業の方に来ていただいている。校外学習先として見学や体験の場をいただいたこともある。課題としては、子どもの学習にかかわった経験が無い人が講師として一定期間来られた場合に、その人のやり方や力量により学習が進みづらいことがある。個人の経験や学習方法を事前に把握し、フィードバックをしながら進めていくことが大切だと考える。

#### □スタッフ4

##### 【学校・行政】

在籍校には、学期に 1 一度、学習と生活の様子と出席日数を報告しています。出席日数が出席として認められる学校もあれば、認められない学校もあります。

行政との連携はあまりとれていませんが、この夏は、教育機会確保法が通ったこともあり、在籍者の多い行政を訪問し、懇談をしました。

##### 【地域・団体・NPO・企業】

さまざまな NPO や団体、地域みなさんに、外部講師として子どもたちの学習に携わっていただいています。読み聞かせや、回文、三味線やジャンベのワークショップ、ハイキングのサポートや科学実験など、さまざまなサポートを受けています。

企業からは、物品の寄付をいただいたり、協働イベントの開催や広報の支援などを協力を得ています。

大阪教育大学大学院とも連携し、実習先をして認定されています。"

#### ■課題と改善のための今後の方針

#### □学園長

最近、入学を希望している人が増えてきているが、建物の収容力に限界があり、これ以上子どもを受け入れることができない。他の場所に分校を設けることを検討中である。無認可の学校であるため、進学や通学定期券の購入のときに、子どもが不利益を被っているのを解消したいと思っている。教育機会確保法の見直しで、それらを解消したいと思っている。また、スタッフの給与水準が低いので、普通の生活ができるくらいの給与が払えるくらいの財源を獲得したい。例えば、寄付金、助成金、講座や講演の礼金、委託事業収入などを増やす努力が必要。

#### □スタッフ2

ユネスコスクールの中のサステイナブルスクールとして全国24校に選ばれるほどの質の高い教育を実践しているにも関わらず、その運営基盤が弱いのが私たちの課題である。存在をより広く発信し、支援者を増やしていくこと、より充実した環境・施設のある自治体と連携していくことを考えている。

#### □スタッフ3

教材費や設備費、スタッフの研修費などの不足、新しいスタッフの確保と育成、行政からの経済的支援、地域との連携などの課題がある。経済的基盤の確立のために新事業を考へることや学校法人になることが考えられる。企業、個人からの経済的支援を受けるためのつながりを増やすことも大切である。将来構想に向けて、学校の理念を理解し、実行できる新しいスタッフの早朝の育成のためインターンを募集する必要がある。学校を含めた町づくりの実現のため、地域との連携、人々の理解を進める必要がある。

#### □スタッフ4

現在の校舎が手狭になってきているため、2校目を設立することを模索しています。そのための、資金集め、人材確保、行政や企業との連携などが今後の課題です。ユネスコスクールでもあり、持続可能な未来をめざしているので、2校目の設立の際は、ESDの学校が設立されることにより、SDGsのまちづくりができるような取り組みを目指しています。"

### 1-3-2. フリースクール ネモ 自己評価シートとりまとめ例

#### ■受入対象

受入対象年齢\_下限 なし

受入対象年齢\_上限 なし

在籍上限年齢 なし

#### ■受入の条件

- ・本人が入会したいという意思を持っていること

■運営形態

・通所型

週当たりの開所日数：5日

1日の開所時間：420分（7時間）

■子どもの人数

就学前	0
小学生	3
中学生	6
15~17歳	1
18~19歳	1
20歳以上	9
合計	20

2017年度入会者数	
2017年度退会者数	
増減	

■スタッフの概況

常勤有給 2人

常勤無給 0人

非常勤有給 2人

非常勤無給 0人

有償ボランティア 0人

無償ボランティア 0人

■HPで公開している情報

理念や特徴	1
入会案内・入会条件	1
代表・責任者名、役員	1
在籍している子どもの概況	
スタッフの概況	
学習や活動の様子	1
入会金・会費（授業料）・その他費用	
団体・スクールの財務状況	1
問合せ先や方法	1

■活動内容

個別学習・個別対応	1
-----------	---

学習成果等発表会	1
授業形式による学習	
居場所提供	1
社会体験	1
相談・カウンセリング	1
自然体験	1
SST	
調理体験	1
受験勉強	
芸術活動	1
就労訓練	
スポーツ活動	1
保護者会親の会	1
宿泊体験	1
その他特色ある活動	1
子どもミーティング	1

子どもたちの企画による様々な活動

■安全面で実施配慮していることについて

T 年に2回の防災訓練（火事、地震、暴漢）、衛生面においては衛生管理責任者を置いている、また事故対応等は任意ではあるが入会時に保険の加入を勧めている。

K 年2回以上、防災訓練を実施。会員の保険加入(強制ではない)。外部、知り合いなどへの会員情報の守秘義務。

M 年に2回の防災訓練（火事、地震、暴漢）、衛生面においては衛生管理責任者を置いている、また事故対応等は任意ではあるが入会時に保険の加入を進めている。

保護者 インターネット上には個人が特定されるような情報は公開しない（写真等については本人と保護者に確認の上、公開）。安全のためフリースクール外での活動のための移動には公共機関または専門業者を利用。活動保険に加入、避難はしごの設置、トイレはペーパータオル使用。小学生までの子どもは帰宅時の安全を考慮して16:00活動終了

■理念、学び・活動の特徴

T 重要な活動理念として以下の点が挙げられる。

1. 安心できる居場所を提供すること。（方法:学校復帰を目指さない）
2. 子どもたちが主役。何かを強制しない。（方法:カリキュラムは用意しない。やりたいことを支援する。）
3. 評価しない。そのままのありかたを肯定するということ。（方法:到達目標等を定めない。）

学校に行かない、行けない状況にある子どもたちは周囲の人間や本人の内面化された社会規範により、今の状況は悪いことである、学校に戻るべきだ、というとても強い有形無形のプレッシャーにさらされる。

このような状態が持続すると子どもたちが追い詰められていくのは明白で、長年の経験・観察・実体験により、まず本人がプレッシャーから十分解放され安心できる居場所を確保することが大事であると考えます。そのため、フリースクールネモは学校復帰を目標としない立場を取る。さらに、安心できる居場所を提供し本人の自己肯定感を回復させるために、本人のありのままの形を受け入れる姿勢を重視する。何かの基準を設けて評価したり、スタッフが到達目標を定めて何かの活動を強制することはない。そのため、フリースクールネモは「何もしなくていい」ということを掲げ、カリキュラムなどを用意することはない。一方で安心できる居場所で自己肯定感と主体性を取り戻していった子どもたちがそれぞれ何かを「したい」と思ったときは、スタッフがそれを上手く拾い上げて実現に向けてサポートする。そのために唯一、子どもたちによるミーティングの場は用意しておき、フリースクールでどのように過ごすか、どのようなことをやってみたいかなどの意見を交換できるようにしている。その場で出たやってみたいことはスタッフが実現を支援し、日々の活動に繋がっていく。

団体の特徴の一つとして、代表をはじめ不登校ひきこもり経験者の若者を中心とした若者チームと当事者の親を中心とした親チームがともに協力して団体の運営に当たっていることがある。

K 何かする、させる居場所では無く、何もしなくてもいい居場所。子どもの状態を受け入れ今、あるがまま生きる事を認め安心できる居場所の提供。

M 1. 子どもが中心であること

フリースクール ネモは、子どもが中心の居場所です。こどもミーティングで自分たちの日々の過ごし方を決め、スタッフはその子の「育ち」を応援します。スタッフは子どもの意志を大事にして、子どもたちと一緒に過ごすことを一番大切にします。

2. 『居場所の力』を信じること

フリースクールは、一見すると何もしていないように感じます。特にプログラムを優先しないフリースクールは毎日ごろごろするだけで、子どもに対して意味のない場所と思うかもしれません。

そして、フリースクール ネモはプログラム優先のフリースクールではありません。では『居場所の力』とはなんのでしょうか？ それは居場所に集まる人たちが、安心して過ごせる場所から生まれます。特別何をするわけでもなく、居場所が存在することで子どもたちは自分自身の力で本来の生命力を取り戻していきます。これが『居場所の力』だと確信しています。

この居場所の力を発揮するために、フリースクール ネモでは安心できる場所を作ることを約束します。



### 3. ありのままを受け止めること

「学校に行っているから良い」「勉強が出来るから良い」「フリースクールに行ってるから良い」などで子どもを評価する「大人のものさし」があります。フリースクール ネモではそのような「ものさし」で子どもたちを測ることはしません。また不登校というのは、子どもの一つの状態像です。子どもの持っている一つの側面が不登校の状態ならば、それだけで子どもを評価することが出来るわけではありません。「何かが出来るとか」「何かが出来ないから駄目」などの無理な競争を強いるわけではなく、自分のペースで育つことがとても重要と考えています。安心していっぱい失敗できて、やりたいことがあれば色々なことにチャレンジできるフリースクールにしていきます。"

#### 保護者 1. 子どもが中心であること

フリースクール ネモは、子どもが中心の居場所です。こどもミーティングで自分たちの日々の過ごし方を決め、スタッフはその子の「育ち」を応援します。スタッフは子どもの意志を大事にして、子どもたちと一緒に過ごすことを一番大切にします。

#### 2. 『居場所の力』を信じること

フリースクールは、一見すると何もしていないように感じます。特にプログラムを優先しないフリースクールは毎日ごろごろするだけで、子どもに対して意味のない場所と思うかもしれません。

そして、フリースクール ネモはプログラム優先のフリースクールではありません。では『居場所の力』とはなんのでしょうか？ それは居場所に集まる人たちが、安心して過ごせる場所から生まれます。特別何をするわけでもなく、居場所が存在することで子どもたちは自分自身の力で本来の生命力を取り戻していきます。これが『居場所の力』だと確信しています。

この居場所の力を発揮するために、フリースクール ネモでは安心できる場所を作ることを約束します。

### 3. ありのままを受け止めること

「学校に行っているから良い」「勉強が出来るから良い」「フリースクールに行ってるから良い」などで子どもを評価する「大人のものさし」があります。フリースクール ネモではそのような「ものさし」で子どもたちを測ることはしません。また不登校というのは、子どもの一つの状態像です。子どもの持っている一つの側面が不登校の状態ならば、それだけで子どもを評価することが出来るわけではありません。「何かが出来るとか」「何かが出来ないから駄目」などの無理な競争を強いるわけではなく、自分のペースで育つことがとても重要と考えています。安心していっぱい失敗できて、やりたいことがあれば色々なことにチャレンジできるフリースクールにしていきます。

## ■3年間で重点に取り組んできた方針とその背景にあったニーズ、状況等

T 課題として取り組んできたこととして「子どもたちのミーティング」の導入と定着が

ある。

背景：フリースクールネモはその前身であるフリースペースネモ時代から「なにもしなくていい」居場所を合言葉に掲げてきた。実際、当初は子どもたちのミーティングなど含め、カリキュラムなどスタッフが事前に用意する活動は一切なかった。これがネモの特徴であり、「安心できる居場所」そのものに子どもたちの健やかな成長を促す力があるという考えに基づいている。またその当時ネモに来る保護者の人たちは様々な経験を経てネモの理念の良さを理解しつつ辿り着いた人が多く、会員も少人数で家庭的な雰囲気も強かった。しかし昨今の不登校を取り巻く社会状況の変化は著しいものがある。特に、不登校の認知の一般化やフリースクールなどの存在の周知、不登校という状態への許容的な態度の広がり、社会的なサポートの必要性の周知や法的根拠の整備などがある。これらによって、会員数の増加と年齢層の多様化（特に低年齢の会員が増加した）、ライトな保護者の方（必ずしもネモの理念に対する理解に基づいてやってきたわけではない）の増加、スタッフ人員の確保の必要性、地域の行政や立法との連携の必要性などが生じた。その中で、会員数の急激な増加によってスタッフの個々の会員へのつきっきりの対応の物理的な限界や、「なにもしない」というネモの運営方針は対外的に説明して理解を求めるのにハードルが高いという弱点に対する対策として、子どもたちのミーティングを導入した。

実際に、子どもたちのミーティングによって、子どもたちの何かやりたいという思いをスタッフが逃さず汲み取りやすくなるという効果や子どもたち同士の意見交換が生まれるという効果がある。また、「なにもしなくていい」という説明に不安を感じる保護者や第三者に、ミーティングによって主体的な取り組みも促進されていると説明することで目に見えやすい形を示せるようになった。

K ミーティングの実施による子どもたちの興味関心の声を受け入、イベント、活動の創出。ネモは何もしなくても良い場所として運営しているが、対外的に何もしないと言うと伝わりづらいので、子どもたち主体のイベント活動を行い情報発信している。

M 既存のフリースクールに来られない子どもたちを受け入れられるように重点的に取り組んできた。

背景には、教育的な指導や学校が感じられる場所にはどうしてもいけない子どもたちが存在する。学校復帰や社会復帰などの目先の目標設定はせずに、まずは子どもたちにとって家以外に行ける場所を用意することの必要性があった。

①あえて不登校の理由を子どもからは聞かない

②目標設定をしない

③困難を抱えていても3年待ってみる

保護者 1. さまざまな個性や背景を持つ子どもたちを受け入れる姿勢

フリースクールに通ってくる子どもの中には、学校でのいじめなどの経験から人に対する不信や自信のなさが際立つ、不登校に対する家族の理解が得られていない、発達障害がある、など何らかの困難な事情を抱えている子どもも多い。そういう子どもたちがフリース

クールの中で少しずつ、他人に対して心を開き、自信を取り戻すために、スタッフは何かを強制したりすることなく、自分のペースで他者と交わるよう、ゆっくりと見守る姿勢を心がけてきた。また、家族にも子どもの変化を伝えて、不登校に対する理解を得られるよう努めてきた。

2. 社会に対して「学校以外でも学び成長することができる」という理解を求める活動  
学校的な教科学習のカリキュラムは持っていないフリースクール ネモで過ごしてきた子どもたちは、個人の意思が尊重される環境で対人関係、自分で何かを企画し、実行する力、自分の意見をきちんと表明する力などをきちんと身につけている。そういう姿を理解してもらうために、Facebook などの SNS での情報発信やイベント参加などをしてきた。

3. 自治体や企業に対して経済的協力を求める活動  
ごく一部を除いて、フリースクールには税金が使われておらず、「学校に来ないから」という理由で公的支援がほとんどされていない状況にある。フリースクールネモは「千葉県フリースクール等ネットワーク」の立ち上げの中心となり、県に支援の仕組みを作る働きかけをしたり、企業等にも助成の申請を継続的にしている。

#### ■三年間で成果のあった特徴的な事例

##### □T

###### 1-1 子どもミーティングの導入

1-2 子どもたちが主体的に自分たちが普段どのように過ごしたいのかや、何かやりたいことの提案をする機会として週一回子どもたちによるミーティングの時間を設けた。

1-3 ネモに居場所として安心感を感じ始めると、生き生きとしてミーティングでも積極的になる様子が見受けられる。具体的にミーティングを通して子どもたちが行った活動としては、他のフリースクールの会員とのスポーツ交流会やバーベキュー、遊園地へのお出かけ、自分たちの意見をシンポジウムなどで発信したこと、フリースクールフェスタに音楽バンドで出演したり手芸・食べ物の出店をしたりするなど、多数ある。

1-4 意見が言いやすい雰囲気を作ることを心がける。またくだけた雰囲気になるようにお菓子を出すなどの工夫も行った。また子どもたち中心の活動になるよう心がけ、個別の企画には実行委員会を立ち上げて子ども達で企画を進める形をとっている。ただし、子どもたちがやりたいことを実現できるようスタッフが十分サポートするようにも気をつけている。

1-5 フリースクールネモにおいてミーティングが唯一最初からやることになっている活動でもあるので、スタッフが上手に雰囲気を作らないと「やらされている」感、子ども中心ではないという感覚が生まれてしまう危険性が常にあるので、そこに留意する必要がある。

##### □K

###### 1-1 活動と経験サポート

1-2 ミーティングによって出た子どもたちのやりたいこと、気になったことへの活動、実現のサポート。

1-3 様々な活動、イベントからフリースクールで出来る経験を積む事で自分の興味あるもへの活動、発言のハードルが下がり、より居場所での主体性を持てる。例えば、体育館の活動を通じ体育館の無い日でもキャッチボールなど外の活動の提案やフリースクールフェスティバルでの音楽発表から楽器、音楽活動など。

1-4 本人の意思に沿って活動、イベントを計画サポート。他の子どもたちへの声掛け、チラシ作成等のイベント情報周知。また当日の天候、参加者不足、本人の状態などでの中止への臨機応変な対応。(その日に必ずやらなければいけないわけじゃない。日を改めてやれる時、本人の出来る時にやればいい)

1-5 参加者の多い外出イベントでのスタッフの人員。街などそれぞれの目的で分かれての活動でスタッフ手が足りない場合、安全を守るため年少者には保護者同伴が必要。

□M

1-1 個別活動応援プログラム

1-2 会員のやりたいことをスタッフと1対1で作るオーダーメイドのプログラム。従来のFSネモでは、ミーティングを通して仲間を3名集めてから実施をするというルールがあったが、会員の入れ替わりの時期から会員から具体的にやりたいことを実行することが少なくなってきた。親しくない関係から3名集めて実行するといつことが障害になっていた。フリースクール内で共同での活動を作っていくためにまずは、自らのしたいことやりたいことをフリースクールで実行できる体験を作っている活動。

1-3 まずは自分の好きなことをスタッフと共有することでスタッフとの信頼関係を作っていくことが出来る。結果的には1対1でのプログラムで終わることは少なく、自分の好きなこと(得意なこと)で他の会員と接続していく。また小さな成功体験を積み重ねることで、この場所では自分のしたいことを実現できることが体感でき、次第に個別のプログラムではなくグループでの活動に移行していく。

1-4 個々の自分の好きなことをしっかり聞く。そして個別活動応援プログラムではスタッフが具体的な提案をすることが多い。まだフリースクール的な自分でプログラムを作ることに慣れていないという事で、スタッフがある程度リードしながら事務的なところや計画などのサポートに回る。

1-5 個別活動なので手間と時間がとてもかかる。今はすべて1対1の関係で最後まで進めているが、話を聴く人と活動を作る事務的な役回り的人、実行するときの引率などを別にすることでもう少し効率的に進められると思う。活動のきっかけを作るために人員的な時間の確保の必要性を感じる。

□保護者

1-1 普段のフリースクール内でゆっくりと過ごす活動以外の、「何かを一緒に作る」「何かを一緒にやる」「どこかに出かける」「何かのイベントに参加する」等の特別な活動は、以前からスタッフ発信ではなく子ども発信で実現させることを心がけてきたが、以前は「やりたい子どもがたくさんいる活動」を優先させてきた。結果、ひとりだけがやりたいと思っ

ている活動などはできないことが多く、モチベーションが下がる子もいた。そこで、ひとりでもやりたい子がいたら応援する、そこに希望者が参加する、スタッフと本人だけということになって実現しようという取り組みを始めた。

1-2 実現させていく企画は月1回のミーティングで決めているが、今まであまり積極的に発言しなかった子どもも「〇〇がやりたい」「〇〇に行きたい」と言えるようになった。ほかの子どもに周知したり参加者を募集したりするための企画書を提案者が作るようになっていくが、かかる料金や必要なものなど、インターネットなどを利用して調べ、どの子どもも自力で作れるようになってきた。

1-3 スタッフが主導権を握ったり誘導したりすることのないように気をつけ、実現するための助言や、協力を求められたときの手助けは適切に行えるよう心がけていた。

1-4 財政的な問題などからスタッフ不足が常にあり、フリースクール外での活動とフリースクールに残る子どもを担当することの両立が難しく、活動を延期せざるを得ないこともある。また、子どもの希望する活動にかかる費用は基本、自己負担となるため、費用のかさむ企画はあまりたくさんはできない。その面からも国や自治体、企業からの経済的支援をさらに求めている。

1-5 フリースクール内でゆっくり過ごすことを望む子どもももちろんいるので、「企画を出す方が好ましい」というような雰囲気にならないようにスタッフには心がけてほしい。

2-1 木工、手芸、理髪、運送業を手がけるボランティアの協力が得られることになり、フリースクールに欲しい家具の制作をする「木工部」の活動、子どもたちが作りたい洋服、カバン、毎年のフリースクールで販売する小物を制作する「手芸部」の活動、月1回の理髪ボランティア、移動の際の運送ボランティアの実施が始まっている。

2-2 プロから手ほどきを受ける活動はとても魅力的で、作りたいと思ったものが思った通りにできていく喜びを味わっているようだ。理髪ボランティアの存在は会員にとっては経済的にも助かるが、学校に行っていないことから、理髪店での会話などがハードルが高い子どもにも、話しやすい雰囲気でも自分の希望の髪型にしてもらうのがとても喜ばれている。電車が苦手な子、乗り物酔いしやすい子などの移動には、いろいろ希望を聞いてもらえる運送ボランティアも助かっている。

2-3 子供とのやりとりなどは基本はボランティアにお任せし、場所や道具の提供など、活動しやすい環境づくりに協力している。ボランティアの方には不登校に対する理解をきちんとしてもらおうようにしている。

2-4 助成金が活用できたこともあるが、基本はボランティアの善意で無料で行っていただいている。やはりこういう活動にも経済的助成があるとありがたい。また、こういう活動に対する理解を広げることで、より多くの方に関わっていただく努力も続けていきたい。

2-5 いずれの活動もあくまで希望者のみの参加としている。

## ■子どもの進路について

T 中学校、高校への進学、通信制とフリースクールネモの併用、高卒認定の取得、アルバイトなどがある。

ただフリースクールネモは年齢制限による卒業や退会ではなく、成人後も一つの居場所として長く関わりたいという会員も多い。

K ほとんどの子どもが高校進学年齢で高校に行き始め退会する傾向がある。中学生の進路はほぼすべて高校に進学する。数か月ネモと高校に在籍したのち高校だけにするというケースが多い

M 高校からは進学する子どもが多いが、通信制高校とフリースクールの両方に在籍する子どももいる。また義務教育終了後も進学はせず、フリースクールに通いながら、専門的知識を身に付けて就職につなげようとする子ども、働きながらフリースクールも居場所として利用している人もいる。

保護者 ・卒業生の中には、就労体験を経て、老人ホーム等就職が決まった若者もいる。

- ・通信教育（高校、大学）に進んだ若者
- ・学校復帰

#### ■子どもの学び、活動、団体の向上のために取り組んでいること

T 業務の一環としてのスタッフの定期的な外部研修への参加や、自主的な研修等への参加時の交通費・参加費の支給制度がある。子どもの学び・活動向上のために、子どもを評価しないということに取り組んでいる。

M フリースクール全国ネットワークに加盟しスタッフには研修として JDEC やスタッフ養成講座など各種講座に研修として参加させている。また法人全体での相談内容（電話相談、個人相談、フリースクール）を精査するケース会議をしており、スタッフ等の関りを法人全体で評価をしている。

保護者 「フリースクール全国ネットワーク」に加盟しており、そこが行うイベントや講座、またそれ以外の団体が行う講座などにも、スタッフが研修のために積極的に参加している。他のフリースクールとの交流も積極的に行い、その活動を参考にしている。

#### ■団体、組織、運営への意見反映の仕組み

□T

子ども そもそもスタッフがカリキュラムや活動内容などを用意しない。よって自然に子ども主体の活動にならざるを得ない。また子どもミーティングによって意見を拾い上げるようにもしている。（成果として重要なのはただ生き生きとその子らしく居場所で過ごせるようになり、結果的に本人が自分の「生きる」ということについて主体的に取り組む力を身につけることであり、様々な書類で要求されがちな社会的にわかりやすい目に見える形として結果を残すことは必ずしも重要ではないと考える。）

スタッフ スタッフミーティングの実施、理事会や事務局会議への参加と報告がある。

保護者 保護者会や必要に応じて個別面談を実施している。子どもの様子などの情報共有や、不安点や難しい点などのヒアリングができています。またフェス等を含むいくつかのイベントは保護者や他の団体関係者も一緒に参加したり手伝ったりできるようになっています。

フリースクールと同時に親の会も併設しているので、そちらで親同士の相談を受け付ける体制もある。しかし近年の会員の保護者の傾向として、あまり親の会への参加は積極的でないという難点もある。

□K

子ども ①全体ミーティング月一回（第三木曜日 14時から15時）

全体ミーティングすべての会員に参加をお願いしている。自分がやりたいことがなかったとして、その他の子ども達が何に興味関心があるのかなど話を聴くための時間としても設定している。

②お茶会（毎週木曜日 14時から14時30分）お菓子を広げながらの雑談形式で1週間の予定の確認。

③各種委員会（適宜）

全体ミーティングの参加は基本的に子どもたち全員だが、子どもの気分、状態によって強制するものではない。

スタッフ ①スタッフミーティング（週1回火曜日）

スタッフ同士の意思疎通や会員の状態把握やイベント、活動の計画相談のために定期的にミーティングの時間を持っている。

②理事会・部局制（月1回）

理事会では方針や活動の正当性を議論し決定をするが、基本的には各部局の方針を支持をするスタイルになっている。スタッフ等で話し合われた内容を追認するようなシステム。

保護者 ①保護者会（年6回）

運営の話をする事は少ないが、会則の変更や会費などの直接かかわる事は理事会で変更はできるが、一方的に変更することはなく保護者会にて話し合われる。

②親の会

何かを解決するための指導を目的にするのではなく基本的に会員の子の親たちから家での近況等、親が話したい事を話した他の親の話を聞く場。こちらからはフリースクールでの子どもの様子、経験談などの提供。

③親サロン（毎月 第2日曜日 13時～16時）

講師や不登校経験者を招いての講演会。相談会、座談会を開催。

□M

子ども ①全体ミーティング月一回（第三木曜日 14時から15時）

全体ミーティングすべての会員に参加をお願いしている。自分がやりたいことがなかったとして、その他の子ども達が何に興味関心があるのかなど話を聴くための時間としても設

定している。

②お茶会（毎週木曜日 14時から 14時 30分）お菓子を広げながらの雑談形式で1週間の予定の確認。

③各種委員会（適宜）

全体ミーティングの参加は基本的に子どもたち全員だが、子どもの気分、状態によって強制するものではない。

スタッフ ①スタッフミーティング（週1回火曜日）

スタッフ同士の意思疎通や会員の状態把握やイベント、活動の計画相談のために定期的にミーティングの時間を持っている。

②理事会-部局制（月1回）

理事会では方針や活動の正当性を議論し決定をするが、基本的には各部局の方針を支持をするスタイルになっている。スタッフ等で話し合われた内容を追認するようなシステム。

保護者 ①保護者会（年6回）

運営の話をする事は少ないが、会則の変更や会費などの直接かかわる事は理事会で変更はできるが、一方的に変更することはなく保護者会にて話し合われる。

②親の会

何かを解決するための指導を目的にするのではなく基本的に会員の子の親たちから家での近況等、親が話したい事を話した他の親の話を聞く場。こちらからはフリースクールでの子どもの様子、経験談などの提供。

③親サロン(毎月 第2日曜日 13時～16時)

講師や不登校経験者を招いての講演会。相談会、座談会を開催。

□保護者

子ども 毎週1回、「お茶会」と称して、スタッフと参加希望者がお菓子を食べながら話しやすい雰囲気の中で、子ども達それぞれが興味を持っていることなどについて話し、それによってお互いを知り、フリースクールとしてどんな活動ができるかを模索している。

月に1回、スタッフと子どもたち全員でミーティングをして、フリースクールでやりたいことを出し合い、話し合いによって今後の予定を決めていく。話を遮らない、否定しない、ということ約束事にして、なるべく誰もが発言しやすい雰囲気を心掛けている。

ひとりでも「これがやりたい」という子どもがいたら、それをなるべく実現するようにしたことで、遠慮せずに自分の希望を言える子どもが増えたと感じている。

スタッフ スタッフの悩み事、意見などはスタッフ間で常に共有するようにし、また月に1度の理事会でもその運営のあり方や子どもの様子などについて、他理事と共有や意見交換をしている。

保護者 2ヶ月に1回、保護者会を実施。スタッフと保護者がフリースクールでの子どもの様子、家庭での様子を報告し合って共有し、保護者の心配や悩み事については、スタッフや他の保護者がアドバイスをしたりしている。保護者にとっては、フリースクールで



のわが子の様子や変化を知り、家庭での悩みを相談できる貴重な場になっていると思う。

#### ■連携について

□T

##### 【学校・行政】

会員の在籍する学校の担任と定期的に連絡を取り、状況説明を行っている（学校側が応じた場合）。

当事者やその家族ではなくフリースクールスタッフが教員に説明を行うことにより、本人や親への学校からのプレッシャーが減ることや、また学校側も状況把握できることによるメリットがあると思われる。

市の担当課と連携することにより、体育館の利用などに関して優遇措置を適用してもらうなどの支援を頂いている。また民間助成金申請時の推薦を引き受けてくれるなど、行政の担当者との密な関係はとても有益なものとなっている。

##### 【地域・団体・NPO・企業】

民間団体や個人からの寄付の受付や、地域の広報でのイベントの告知依頼、地域の方による木工指導などのボランティアなどがある。

また企業による助成金を活用したイベントの開催を定期的に行っている。

公・民間問わず、地域の団体との連携が増えるとより活動の幅が広がり面白いだろう。

□K

##### 【学校・行政】

学校 保護者からの反対がなければ基本的に連携を取る。月ごとに出席の回数と子どもの様子を伝える報告書の提出、フリースクール見学の受け入れ。基本的には出席扱いと、実習用定期を発行する手続きをして頂いている。

##### 【地域・団体・NPO・企業】

NPO NPO 法人フリースクール全国ネットワークや千葉県フリースクール等ネットワークに加入し、顔の見えるネットワークや必要な情報を得ている。ネットワークの各イベント、懇談会に参加、参加してもらいより密な関係を作っている。"

□M

##### 【学校・行政】

学校 保護者からの反対がなければ基本的に連携を取る。月ごとに出席の回数と子どもの様子を伝える報告書を出している。基本的には出席扱いと、実習用定期を発行する手続きをして頂いている。

行政 フリースクール等の地域ネットワーク（千葉県フリースクール等ネットワーク）に加入し千葉県指導課との懇談を行っている。

##### 【地域・団体・NPO・企業】

地域 地域のNPOセンターに登録をしている。NPO 同士の繋がりや、ボランティアの募

集などの支援を受けている。

NPO NPO 法人フリースクール全国ネットワークや千葉県フリースクール等ネットワークに加入し、顔の見えるネットワークや必要な情報を得ている。

□保護者

【学校・行政】

・小・中学生の会員（希望者）の在籍校に、毎月、報告書（通所日数と活動の様子）を提出。会員の在籍校の校長・副校長・担任教諭などとも密に連絡を取り合い、会員の様子を伝えて、フリースクールでの学びに理解を求めている

・行政の視察や研修も積極的に受け入れている

・地元の習志野市に協力を求め、体育館の無料貸出をしていただき、助成金もいただいている

・習志野市、近隣の四街道市での講演依頼などにも応じて、フリースクール・不登校への理解を求めている

【地域・団体・NPO・企業】

・コープみらい、麒麟福祉財団、ちばの WA 地域づくり基金などから助成金をいただいている。

・「フリースクール全国ネットワーク」を通じて全国の他のフリースクールやフリースペースと、「フリースクール等千葉県ネットワーク」を通じて県内のフリースクール、フリースペースと連携している

・年に1度の「フリースクールフェスティバル」にも毎年参加している。

■課題と改善のための今後の方針

T フリースクールスタッフの待遇の低さが最も大きな課題である。これを単純に自己努力で改善するには会員の金銭負担の増加という選択につながり、多くの人がフリースクールを必要としても利用できなくなるという結果になりかねない。立法による社会状況の変化もあるので、行政からの支援を引き出すために粘り強く取り組むしかない。また一般からの寄付収入の増加も一つの目標となる。

K 学校、家庭等で力尽き傷ついた子どもたちの安心できる居場所(生きていい場所)を目指している。しかし、不登校は親や家庭などの根本的部分の影響が強いので親の会等の不登校への理解、知る機会に繋がってほしい（親が変われば良くも悪くも子どもは絶対変わる）が、現状、会員の半分ほどは不参加。親だけでも来てほしい。より世間、社会に認知されるように SNS の活用は必須。知ってもらふ機会を増やしたい。

M 学びとは何かの技術を習得するものではなく、「学び=生きる力」と捉えてその子のペースに沿ってフリースクールを続けている。ですが周りから見ると何もしていないように見えることが多く非常に誤解を受ける。子どもたちの内面は毎日ダイナミックに変化をしている。そのことをフリースクールやスタッフが思いを言葉に変換して、不登校等の学校

に行かない子どもたちの理解を進めていく必要がある。地道な活動も大切だが限界もあるので政策提言を積極的に関与し不登校等の学校以外で育つ子ども達へのまなざしを変える活動を進めていく。

保護者 フリースクール ネモの特長は、学校的な教科学習のカリキュラムを持たない自由な学び、学校復帰・社会復帰を目標とするのではなく、その人がその人らしく生きる手助けをするというところにあるが、その良さはなかなか社会には理解されにくい。

インターネットやイベントによる発信を通じて、フリースクールネモに通う子どもたちが、学校に行かなくても学び、成長していることに対する理解を広げ、国や県による財政支援にも結びつけていきたい。

### 1-3-3. フリースペース つなぎ 自己評価シートとりまとめ例

#### ■受入対象

受入対象年齢\_下限 6才

受入対象年齢\_上限 無回答

在籍上限年齢 無回答

備考：フリースクールは6歳から18歳、ただし、ユースの部にそのまま在籍も可能（20代後半まで）

#### ■受入の条件

- ・本人がフリースペースに入会したい意志があること

#### ■運営形態

- ・通所型

週当たりの開所日数：5日

1日の開所時間：420分（7時間）

#### ■子どもの人数

就学前	0
小学生	2
中学生	2
15~17歳	1
18~19歳	1
20歳以上	4
合計	10

2017年度入会者数	3
2017年度退会者数	1
増減	+2

■スタッフの概況

常勤有給	1人
常勤無給	0人
非常勤有給	5人
非常勤無給	0人
有償ボランティア	0人
無償ボランティア	0人

■HPで公開している情報

理念や特徴	1
入会案内・入会条件	
代表・責任者名、役員	
在籍している子どもの概況	
スタッフの概況	
学習や活動の様子	1
入会金・会費（授業料）・その他費用	
団体・スクールの財務状況	
問合せ先や方法	1

■活動内容

個別学習・個別対応	1
学習成果等発表会	1
授業形式による学習	1
居場所提供	1
社会体験	1
相談・カウンセリング	1
自然体験	1
SST	
調理体験	1
受験勉強	
芸術活動	1
就労訓練	1
スポーツ活動	
保護者会親の会	1
宿泊体験	1

その他特色ある活動	
子どもミーティング	1

■安全面で実施配慮していることについて

□代表

- ・昼食作り等調理での食中毒等の予防（手洗い等）
- ・震災（地震等）の訓練
- ・個別面談（本人・親）の実施

■理念、学び・活動の特徴

□代表

・気仙沼を中心とする地域において、不登校、引きこもりの子ども若者が安心できる居場所を目指してオープンしました。東日本大震災でしんどさが二重三重に重なる中、同じような悩みを持つ子どもたち、若者、親がつながり合い、支え合う中で、元気になることを目指しています。

・フリースペースでは自分のやりたいことを中心に自己選択、自己決定の原則で自分のペースで活動できます。また、週一回のミーティングの機会に自分のやりたいことを提案したり、企画したりすることができます。居場所であるような「つなぎハウス」のみに限らず、自宅、図書館、在籍校などなど、自由に自分の学びたい場所、内容が選択でき、スタッフは1人1人の意思を尊重しながらサポートしていきます。

・季節の行事、スポーツ、遠足など、ミーティングで話し合ったことをもとに、子ども・親・若者が合同で活動します。親同士の交流の場にもなっています。

・地域の人を講師として招いて、あみもの、パソコン、おかし作り、天体観測などの講座を行い、地域の人とふれあいながら、多様な学び、生き方を育んでいきます。

□保護者

- ・みんなで一緒にという点。
- ・つながりを大切にしている点。
- ・話し合いだけでなく、研修等で学びを深めている点。
- ・若者就労体験が充実している点。

■3年間で重点に取り組んできた方針とその背景にあったニーズ、状況等

□代表

・「フリースペースつなぎ」は親の会がもととなって作られた団体です。月1回不登校や引きこもりで悩む家族の方を対象に相談会、懇談会を行っています。同じような体験をした保護者同士が一番に辛さを共感し、悩みを分かち合うことができると考えます。気持ちが軽くなり、子育てをゆっくりと見つめ返すことのできる場として「親の会」を大切に考え

ています。

・特に震災後は経済的。精神的な困難を抱えた家庭も多くあり、子ども・若者へのサポートも大切でしたが、それを取り巻く親へのサポートも大変重要でした。

・震災当時はなかなか居場所が見つからず、代表の自宅を中心に月1～2回から、週2～3回へと回数を増やして開所してきました。さらに、開所の時間を伸ばしたいという要望も多く、昨年秋にようやく居場所が見つかり、改修工事を経て、今年（2018年8月）夏から週5日の時間に伸ばすことができるようになり、常設の安心できる、いつでも行ける居場所づくりができるようになってきました。"

## ■三年間で成果のあった特徴的な事例

### □代表

#### 1-1（1）体験的な学びや活動

- ・子ども自身の要求から企画、計画し、多様な活動を行ってきた。
- ・美術館への水彩画等の作品の出品
- ・地域食堂への参加
- ・宿泊活動（バーベキュー、畑の作業等）
- ・パソコン講座
- ・水晶掘り、温泉
- ・野球観戦
- ・田代島（ネコの島）への遠足

1-2 ・自分のやりたいことを提案、計画し、実行することで、明るく笑顔が増えてきた子どもが多い。話し合い、講座等の中で、コミュニケーションの力が伸びている。

・人前で自分の不登校の体験を話したり、手記にしたりすることで、過去を振り返り、周囲に認められ、自信につながっている。

1-3 ・子どもたちのやりたいことに対し、否定せず、尊重し、どのようにしたらそれが実現できるのか共に考えるようにしてきた。また、積極的にともに活動を楽しむことで、集団での喜びを感じられるようにした。

1-4 ・さらに多様なニーズ、活動を展開していくために、地域の人材、NPO等の団体との連携が必要と思われる。

・特に多様な活動するに当たっては移動手段、交通費等経済的な課題も大きく、今後考えていかなければならない。

#### 2-1（2）就労体験

・不登校経験を経て、そのまま成人年齢になった若者も多く、就労への関心も高いため、就労体験の活動を取り入れた。

- ・地域食堂 ・テープ起こし ・地元会社の手伝い（乾物の箱詰め）
- ・手作り品の販売、マルシェへの参加

- ・お世話になった方の家の草刈り ・チラシ配り ・チラシ作り
- ・託児

2-2 ・地域の中で人の役に立つ経験をする中で、自信をもって活動できた。地域食堂では一人暮らしのおじいちゃんとふれ合い、感謝され、うれしそうにしている若者の姿があった。アルバイト料をもらうことも多く、働く喜びを得られた。自分の得意、不得意を知る機会となった。

- 2-3 ・若者のやりたい気持ちを尊重し、それぞれの得意、不得意を大切にした。
- ・やりたい仕事のマッチングができるように努めた

2-4 ・地域の人々の理解が大きく、協力・支援体制が必要である。

□スタッフ

1-1 (1) 個性や特徴に応じた学びや活動 (小中学生部門)

・小中学生部門はユース部門と比べ、人数も少なく、興味や趣味、活動のスタイルなどの違いや、コミュニケーションの取り方などケアしていく面に多様性がある。その中で、個々の特性などに対応し、フリースペースならではの他者との共同での活動体験を行うために、随時スタッフと子どもで話し合い、活動を実施した。

1-2 ・自分の好きな絵をしっかりと描く時間を確保できた子、同年代の子と会話などで関わりを持つ事が出来るようになった子、得意なパソコンの知識・技術を高める事が出来た子などがおり、自己肯定感を高めながら活動することが可能となった。

・個人の個性、対人間の距離などにも配慮しつつ、子ども達の関わりの場を増やしたり、やりたい事をするなどして小中学生部門としての活動作りを行って行くことができた。

・チラシ、見学会等で、入会希望の方は増加している。その中で、送迎、日々の活動などに当てる人員を充実させ、細かい対応を行うためにも、常勤スタッフ、ボランティア等の体制づくりが必要となる。

□スタッフ

1-1 (1) スポーツを通じた協調性を育む活動

・現在、週に1回程度市内の総合体育館を利用し、子ども、若者たちが体を動かすことのできる環境を整備している。主に、バドミントンや卓球、バスケットボールなど、子ども、若者たちの希望によってその日に行う種目を決めている。

1-2 ・子どもたちの中には、人とコミュニケーションをとることが苦手な子もいる。しかし、スポーツを一緒に行うことで、自然と仲間とコミュニケーションをとったり、協力したりする姿も見られている。未経験の子に対して経験者の子が教え、どんな子でも楽しんでいる様子が伺えている。

1-3 ・スタッフは、その日に参加するメンバーによって対応を変えている。コミュニケーションが苦手な子同士で同じ種目を行っている場合には一緒に入り、お互いが楽しめるような雰囲気を作っている。また、子どもたちのみで楽しめている際には、見守りながら、輪に入っていけない子とともに活動を行うなど、臨機応変に対応している。

## 2-1 (2) 昼食作りを通した生活力の向上

・つなぎでは基本的に子どもたちが昼食を作り、みんなで食べることを大切にしている。個々人の好き嫌いを考慮しつつ、その日に食べたいメニューをみんなで考え、必要な食材を買いに行く。そして、協力しながら調理し、みんなでテーブルを囲んで食事をしている。孤食が多くなってきているからこそ、大勢で食べる食事の時間を楽しみにしている。

2-2 ・子どもの中には、普段家で好きな時に1人で食事をする子もいる。つなぎに通いはじめた当初は、食事の時に一緒に食べることができなかった子でも、今はみんなと一緒に同じメニューで食べることができるようになってきている様子も伺える。

2-3 ・スタッフは、買い出しの送迎や調理において、子どもたちの意思を尊重しながらサポートしている。なかなかメニューが決まらない時は、決める方法の提案をしたり、調理では、スムーズに子どもたちが調理できるようにサポートしている。

・食事中は一緒にテーブルを囲み、同じ料理をシェアして一緒に食べながら食育を行っている。

2-4 ・つなぎには少し離れたところに大きな畑がある、今年はジャガイモとさつまいもを植えたが、来年度以降はもっと様々な野菜を育てることで、作物を育てる大変さを学び、1回毎の食事の大切さを学ぶことができると考える。

## □保護者

### 1-1 (1) 家が好きな子どもに対する家庭訪問による活動

・家が好きな子どもに対して、家庭にスタッフが出向いてくれて、一緒にゲームやお話をするを続けてもらった。

1-2 ・引きこもってばかりだと、社会の接点がなくなるが、家庭に来てもらえることで、子どもは安心していつものペースで楽しむことができた。ゲームばかりだとリアルな人間関係が築けないが、異年齢なスタッフさんたちと交流することにより、安心感や連帯感を感じることができた。

1-3 ・常に共感的に接していただき感謝しています。

1-4 ・継続していくということでしょうか...

### 2-1 (2) 子どもミーティングの取り組み

・フリースペースでは、子どもの学びたいという自主性を尊重してくれるため、「フリースペースで何をしたいか」というアイデア出しをしてもらった。

2-2 ・自分のしたいことをしたいと言っていいということが嬉しかったようだし、周りのお姉さん（スタッフも含む）たちと一緒に活動していきたいと意欲を持たた。自分の意見を言うことが今まで苦手そうだったが、本当の思いを口にしていいんだと自信がついたように思う。

2-3 ・いつも共感的でありがたいです。

2-4 ・定期的なミーティングや達成したことのふりかえりなど。

### 3-1 (3) ジャガイモサツマイモ等の栽培活動



・季節の農業体験を体験すること。

3-2 ・自然を感じながら、体を動かしてみんなで協同することを体験できて、よい活動に  
だと思ふ。

3-3 ・いつも「一緒にやろう」と言ってくれて、一緒にやってもやらなくてもいいよとい  
うスタンスにいつも助けられています。

#### ■子どもの進路について

##### □代表

- ・卒業生の中には、就労体験を経て、老人ホーム等就職が決まった若者もいる。
- ・通信教育（高校、大学）に進んだ若者
- ・学校復帰

##### □スタッフ

- ・通信教育（大学）等

##### □保護者

- ・フリースペースの様々な体験で自信をつけて就職につながったOGさんがいます。

#### ■子どもの学び、活動、団体の向上のために取り組んでいること

##### □代表

- ・当事者の気持ちを理解するための当事者シンポジウム、講演会など、親の会と同時に行  
っている（年に3～4回）
- ・子どもの権利を学ぶための学習会

##### □スタッフ

- ・当事者理解のための当事者シンポジウム、講演会等の開催
- ・子どもの権利に関する研修（スタッフ研修）

##### □スタッフ

・スタッフは週に1回のミーティングに加え、不定期で市内の子どもに対しての有識者の方から「子どもの権利条約」について学ぶ機会を設けている。また個々人で様々な外部研修に参加し、スキルアップを行っている。

##### □保護者

- ・たくさんの研修会！！

#### ■団体、組織、運営への意見反映の仕組み

##### □代表

子ども ・週1回の子どもミーティング→単発、連続のプログラムを作って取り組んで  
いる。

- ・個別面談（子ども・親）を実施し、それぞれのニーズ、悩みをくみとり、全体へと反映

させたり、生かしている。

スタッフ ・スタッフミーティングを週1回行い、計画立てをしている。

- ・一日の振り返りの時間を設け、気づいたことなどを話し合っている。
- ・自分たちの意思の合意形成、子どもたちへの働きかけへとつなげている。

保護者 ・月1回の親の会

- ・保護者会
- ・個別の面談
- ・保護者の意見・ニーズを活動に反映させ、きめ細かな対応を行う。"

スタッフ

子ども ・週1回程度の子どもミーティング…個人や全体からの意見を反映した活動が可能となり、個々の活動への意欲等の向上につながる

スタッフ ・週1回程度のスタッフミーティング…その後の計画立てを行い、反映する。

・常務後の振り返り、共有…問題や細かい部分まで目を向ける事で、今後の子どもたちへの働きかけ等につながる。

保護者 ・月1回の親の会や、保護者会、個別面談などを行う。

スタッフ

子ども ・子どもの意見を反映する仕組みとしては、週に1回程度子どもミーティングを行っていることが挙げられる。小学生から若者まで、つなぎを利用する子どもたちのみで話し合いをし、やりたい講座や行ってみたい場所、または日頃のつなぎハウスの利用の約束決め等を行っている。子どもたち自身で決めていることにより、約束ごとなどは守ろうという意識が日頃から感じられるようになった。

スタッフ ・スタッフの意見を反映する仕組みは、スタッフミーティングが大きな役割を果たしていると考えます。また、ミーティング以外でも、スタッフ同士で意見を言いやすい環境や雰囲気がある。

保護者 ・保護者やその他の関係者の意見を反映する仕組みとしては、まず意見を聞く1つの方法として月に1度、親の会を行ったり、不定期で関係する人に来ていただいたり、出向いたりするなどの機会を設けている。そこでの意見を反映するためのスタッフによる話し合いも充実しているように思われる。

保護者

子ども ・子どもミーティング

保護者 ・親の会 いつもこうだといーなーということが反映されている。

## ■連携について

代表

【学校・行政】

- ・市の教育委員会と連携し、共催で文科省の講演会を企画できた。

- ・市内全部の小中学生の家庭にフリースペースの見学会、親の会のチラシを配布。
- ・今後出席としてフリースペースへの参加を認めてもらうなど、理解を深めてもらう必要がある。

**【地域・団体・NPO・企業】**

- ・学校一子どもの状況について共有する会議を行い、連携して社会的自立を考えている。
- ・子育て団体一学習会、研修会など情報の共有
- ・信用金庫一助成金の交付、無料相談ブースの活用
- ・NPO一経営についての研修会への参加

スタッフ

**【学校・行政】**

- ・教育委員会との連携し、共催で文科省の講演会を開催する。連携の課題として、問題意識を持って参加していた人が少ないように感じる、

**【地域・団体・NPO・企業】**

- ・ひありんく気仙沼と共催で地域食堂の開催。課題として訪れる人がなかなか増えず、同じ方が多いため、新規の集客を目指す。

スタッフ

**【学校・行政】**

- ・学校とは在籍校に対しての情報提供を主にしながら、ケース会議への参加なども行っている。また、教育委員会と連携した講演会の実施や全学校に対してのチラシの配布なども行うなどで連携をしている。

- ・行政とは、ケース会議に呼んでもらったり、日頃から連絡をとるなどしながら、良好な関係を保っている。

課題としては、理解が得にくい場合での連携をどう行っていくかというところにあると思う。

**【地域・団体・NPO・企業】**

- ・地域の団体やNPOなどとは、地域食堂でお手伝いをしたり、お互いのイベント時に手伝いをしたりなど、イベント事を中心に交流を深めている。また、若者に対して就労体験の機会を提供してくれたり、就労支援を行ってくれることもあり、連携しながら行っている。

保護者

**【学校・行政】**

- ・教育長とも意見交換会。
- ・学校の先生方との一緒に講演会を聞く etc

すごくたくさんやっています。"

**【地域・団体・NPO・企業】**

- ・就労関係の団体との連携がたくさんあり、若者たちはよい機会に恵まれていると思う。

■課題と改善のための今後の方針

□代表

・経済的な安定と組織の持続性が大きな課題である。行政、地域の理解が必要であり、周知を図っていく。

・多様な学びを支えるスタッフの資質の向上、人材の確保。

□スタッフ

・課題として、まだ周知不足な点が挙げられるため、インターネットやチラシ等、地道な周知活動を継続して行う。

□スタッフ

・地方という地域性もあり、不登校に対する偏見がまだ多くある。そのため、少しずつでも広報をしながら、不登校は問題行動ではないことを広め、学校だけが全てではないということを伝えていくことが重要であると考えます。

□保護者

・団体の周知、体験会をこれからもしていきと思いますし、どんどん発展していきと思っています！

#### 1-4. 自己評価試行についての小括

図1 (I-2, p.14に掲載) に示した通り、各団体・スクール等が自己評価者として選定した関係者は、代表、スタッフ、保護者の3つの立場が多いことが分かる。代表、スタッフ、理事者、事務局スタッフを兼務する者も少なくないが、これはNPO法人等で運営されるフリースクール等の場合の組織上の特徴を反映していると考えられる。また、実施記入者に子ども・生徒を含めた団体・スクールはなかった。

これらの結果から、代表、スタッフ、保護者の三者が自己評価のプロセスに関与しピア・レビューする仕組みとすることは有効かつ現実的であると考えられる。今回、自己評価シートにおいて、実施記入者にその立場についての明確な回答を求めなかったため、この点のシート改良の必要性がある。

##### 1-4-1. 自己評価シートの項目と実施記入者

自己評価シートの記入項目は10項目を設定しているが、各団体・スクール等が選定した実施記入者の立場によっては、評価記入が難しかったり適格でないという意見も寄せられた。まず、「1. 団体概要 (フェイスシート)」、「2. 活動等の状況①~⑩」、「6. 子どもの進路」の外形的な状況、「3. 理念、学び・活動の特長」の定型的な部分については、代表者がまとめて記入することがふさわしい。これら以外の項目については、概ねスタッフの立場からは評価記入が可能な項目であるが、団体・スクールによっては保護者の立場からは評価記入が困難、あるいは保護者によって評価が違ってくるため個人差が大きいという意見もいただいた。

##### 1-4-2. 自己評価シートの目的や活用

本研究では、自己評価シートを自己開示の基準となる情報であり、評価のための基礎基本となるもの、第三者評価 (相互評価) の材料となるものと位置づけている。今回の試行では、自己評価を行うプロセスにおいて、関係者複数によるピア・レビューとして記入を依頼しそのまま提出を求めた。よってピア・レビューを踏まえての統合的な自己評価の作成を求めている。しかし、自己開示の基準となる情報として自己評価シートを作成し、情報公開も目的として活用するとするならば、ピア・レビュー用の作業用自己評価シートと開示・情報公開用の統合自己評価シートの2種類のシートが必要となる。あるいは、統合自己評価シートの作成を第一のゴールとするならば、それを作成するプロセスにおいてピア・レビューを反映させる仕組みの開発が必要と考えられる。

##### 1-4-3. 団体・スクール等のダイナミズムが表現され得るか

本研究で開発した自己評価シートは、①子どもの状況やニーズ、団体・スクールの状況をどのように把握し②何を重点として方針を設定し【記入項目4】、③どのような特徴的な取

組を実施し④どのような成果を得てきたか【記入項目 5】、⑤さらに発展するために課題をどう認識し⑥どう改善の方策を考えているか【記入項目 5、7、10】、これら一連のサイクルにおいて、⑦子ども、保護者、スタッフ、その他の関係者がどのように参加・参画し共に取り組んでいるか【記入項目 8、9】といった学びや活動のダイナミズムを描き出し、自己認識・自己評価して向上していくことを企図している。

自己評価の試行によって、学びや活動の取組の例示は、それぞれが大変ユニークで発展的に描かれていると評価できる。しかし、それぞれの項目の関連性が意識されず記入されている部分も見受けられるため、フリースクール等が自己評価の目的や意義についての認識を深めていくこと、実践や実際のようなすを豊かに表現していけるようにすること等が進むよう、具体的な実施手引きを作成する必要がある。

## 1-5. 自己評価試行の成果と課題

自己評価の試行により得られた成果として、主として三点を挙げることができる。

第一に、各フリースクール等が、自分たちの取り組みを言語化、可視化することにつながったと考えるなど、自己評価そのものの実施にはおおむね肯定的な認識をしていることが確認できたことである。第二に、協力団体から得られたフィードバックとして、同一団体内であっても、それぞれの立場によって、評価の視点等が異なることが確認できたことにより、団体内での特徴的な実践をより客観化することにつながる、とするものである。各フリースクール等での役割分担、業務分担等の違いや、管理者、実践者、保護者といった立場からの多様な見方、評価の視点等が共有されることにより、それぞれの立場でのパートナーシップの構築、維持、強化につながるものと考えられる。

第三に、今回改訂した自己評価シートを、近隣のフリースクール等のネットワークで導入、活用したいという申し出があったことに端的に現れるように、少数ではあるが、本調査研究で作成した自己評価シートの具体的な活用への端緒が開けたことである。今回協力していただいた複数の団体・機関からそのような申し出を受け、具体的な自己評価につながれたことは重要な成果といえる。

一方で課題として以下の点が挙げられる。

自己評価シートの記入について、代表者、理事、スタッフ、保護者等、それぞれの立場によって、評価の記入のしにくい項目があることも協力団体から指摘された。表5は協力団体の一つである横浜シュタイナー学園から得られたフィードバックの一部である。それぞれの立場やフリースクール等の団体との関係性により、自己評価しやすい項目とそうでない項目があることが示唆される。また同様に、フリースクール等との関係により、回答の個人差が大きいことも予想されている。個々のフリースクール等の実践的特徴を活かしつつ、自己評価等を進めるにあたり、それぞれの立場の関係者に何をどこまで評価してもらうかといった観点からの方法、内容等の改善が必要であると考えられる。

また、今回はフリースクール等の団体内で個別に自己評価を実施してもらった。他の団体からのフィードバック等の中で、例えば個々に記入してもらった自己評価シートを代表者が通覧したことで、同様の理念や実践的特徴についての理解を共有しながら、その捉え方に少しずつ違いが見られ、興味深かったとするコメントや、複数の自己評価シートを相互に参照して団体としての自己評価結果をまとめることの意義は認めつつも、実際にその作業をする時間やコストの確保が難しいとするコメントを得ることができた。

それらの課題を踏まえ、今後の自己評価の内容、方法、実施形態等をさらに検討することが重要であると考えられる。

表 5 自己評価シートの記入について（横浜シュタイナー学園作成。許可を得て転載。）

	教員	理事	事務局	保護者
1. 団体の概要（フェイスシート）	事務局を中心に共同で記			—
2. 活動等の状況	入			—
3. 私たちの団体・スクールの理念、学び・活動の特長	○	○	○	※1
4. おおむねこの3年間で、私たちが重点的に取り組んできた方針とその方針の背景にあった子どもの状況やニーズ、団体・スクールの状況等	○	○	○	※1
5. おおむねこの3年間で、学習や活動において、成果のあった特長的な取組事例（重点的な取組方針に沿った事例を記述。加えて、それ以外の特長的な事例があれば記述可。あわせて1～3事例まで）	○	※2	※2	※1
①取組の概要	○	※2	※2	※2
②子どもの習得・経験・成長のようす	○	※2	※2	※2
③スタッフの関わり方	○	※2	※2	※2
④さらに充実・発展させるため改善点や方策など	○	※2	※2	※2
⑤付記事項				
6. 子どもの進路について	基本的に教員会が記入			※1
7. 子どもの学び・活動の向上、団体・組織の向上のために、私たちが取り組んでいること（研修・評価など）	○	○	○	※3
8. 私たちの団体・スクールの組織・運営について（・どのようなしくみがあるか ・反映した成果の実例 ・今の課題は何かなどの観点で記載）	○	○	○	※3
9. 学校・行政・地域・団体・NPO・企業等との連携について	○	○	○	※3
10. 団体・スクールの理念を実現し、特長を活かし、学び・活動をより発展させるために、課題となっていることと改善のための今後の方針について	○	○	○	※3
※1 団体全体の状況を把握できる立場にないため、回答するのが困難と思われる。				
※2 教室内の状況を把握できる立場にないため、回答するのが困難と思われる。				
※3 その保護者の経験（学内での仕事を通じた）次第。回答の個人差が大きいことが予想される。				



## 2. 第三者評価の実施について

### 2-1. 第三者評価の実施（試行）

フリースクール等、計 8 団体にご協力いただき、3 団体については直接訪問による評価の試行、5 団体については、インターネット会議システム（Zoom）を利用して評価の試行を行った。自己評価との連動性を考慮して、今回は自己評価の試行を依頼した団体と同じ団体に協力を仰いだ。

相互評価・第三者評価のプロセスの流れは表 8 の通りである。なお、本調査研究では、評価の試行であるという位置づけ、また実際の評価方法の検討・検証や、課題の明確化をねらいとして、評価チームの役割は研究協議会メンバーが担当した。

評価の試行に参加してもらった各団体には、事前に表 6 のプロセスを示し、協力を仰いだ。インターネット会議システムを利用した相互評価・第三者評価についても同様のプロセスをとった。

以下の表 6・7 は、協力団体に事前に送付した評価当日のスケジュールの概略である。

表 6 第三者評価（相互評価）の Zoom ヒアリング 調査 の進め方

<ul style="list-style-type: none"><li>① 評価チーム および団体 の自己紹介。</li><li>② 第三者評価（相互評価）の趣旨および Zoom ヒアリング 調査の趣旨 の説明。 あわせて、評価基準 の説明。</li><li>③ 施設見学（ノート PC 等のカメラを利用）</li><li>④（各団体側）自己評価シートの概要および補足説明。</li><li>⑤ 評価基準にそって 確認 事項 について質問。</li><li>⑥ あわせて、意見交換。</li><li>⑦ 今後の進め方について説明。</li></ul>
---

表 7 第三者評価（相互評価）の訪問調査

<ul style="list-style-type: none"><li>① 評価チームおよび団体の自己紹介。</li><li>② 第三者評価（相互評価）の趣旨および訪問調査の趣旨の説明。評価基準の説明。</li><li>③ 施設見学（10 分程度）</li><li>④（団体側）自己評価シートの概要および補足説明。</li><li>⑤ 確認事項について質問。</li><li>⑥ 評価の基準にそって確認および質問。あわせて、意見交換。</li><li>⑦ 今後の進め方について説明。</li></ul>
---

表 8 第三者評価（相互評価）の流れ

研究チーム（＝協議会）	団体・スクール
対象団体・スクールの選定	実施依頼・承諾 自己評価シートの配布（ふりかえりの準備）
自己評価シート提出②	自己評価（ふりかえり）の実施・シート記入① （スタッフ・保護者・その他関係者による実施） ※子どもの声の反映
評価チームの編成・主担当決め③ 自己評価シートのとりまとめ④ （→評価チームメンバーに配付）	
現地調査の準備・調整⑤ （「基準」「訪問調査の流れ」「〔別紙〕主な 確認事項について」を事前送付）	現地調査の準備・調整⑤ （自己評価シート作成者間での日程等の調整）
現地調査⑥	現地調査⑥
（所要 1 時間半～2 時間程度） （ア）評価チーム、団体・スクールの自己紹介 （イ）評価チームから、第三者評価（相互評価）と訪問調査の趣旨、評価基準の説明 （ウ）施設見学（10 分程度） （エ）団体側から自己評価シート概要および補足説明 （オ）評価チームメンバーから「主な確認事項について」にそって質問 （カ）意見交換 （キ）評価チーム主担当から今後の進め方について説明	
（または） オンライン遠隔調査⑥ （個別調査） （複数合同調査）	（または） オンライン遠隔調査⑥ （個別調査） （複数合同調査）
確認（第三者評価）結果のまとめ⑦ 評価チームメンバー間で照会 「評価結果（案）」の送付・照会⑧	結果（案）について内容確認⑧
確認結果（案）を評価会議で確定⑨	結果のお知らせ⑨
公表⑩	

## 2-2. 第三者評価の基準について

第三者評価実施にあたり、評価基準を表9のように設定し、実際の評価場面ではこれらの内容に即したヒアリング等を行った。評価場面、あるいはそれに先立って、協力団体には同内容のものを事前に配付ないし送付した。

表9 第三者評価の評価基準

第三者評価（相互評価）は、各団体・スクールがそれぞれの理念を明確にするとともに、その理念に応じた活動を主体的に行い、子どもや保護者のニーズ、地域の状況を受けて、その活動や運営をよりよいものにするという努力を継続的に行うことに資することを目的としています。

このため、評価といっても、画一的な基準により各団体・スクール間の優劣を判定したり点数をつけたりするものではなく、各団体それぞれがその理念・特長にそって継続的に改善を進めていることを確認・評価することとしています。

さらに、評価活動を通じて、各団体・スクールどうしが互いの実践について学び合うことも目的としています。

### 1 理念・特長

- (1) 団体・スクールの理念・特長は、明確になっていますか
- (2) 理念・特長は、団体・スクールでどのように共有していますか

### 2 活動・取組

- (1) 理念・特長に応じた活動や取組がなされましたか
- (2) 子どもに関わる活動の内容や方法に関し、その活動や取組をより良いものにするため、最近において（この数年間で）、どのようなことを目指して、どのように変えてきましたか（活動実践における小さな工夫など）
- (3) 上記（2）のように変えたことで、どのような効果がありましたか（その効果は、どのような事実から効果があったと判断しますか）
- (4) その活動や取組をさらに良いものにするため、今後どのようにするつもりですか

※上記2（2）～（4）が評価の中心。「活動や取組」は、複数の「活動や取組」を挙げることも可とします。

### 3 運営

以下の取組に関し、それぞれどのように機能していますか

- ①子どもの意見反映
- ②保護者・スタッフなどの意見反映
- ③地域などとの連携

## 2-3. 第三者評価の結果（結果案を含む）について

前項までに示した各団体について、評価結果等を試行し、以下のような評価結果案を作成した。なお、本報告では紙幅の都合等により、3団体の第三者評価結果（案）を提示する。

### 2-3-1. フリースクール札幌自由が丘学園 評価結果案

#### 1 理念・特長

##### (1) 団体・スクールの理念・特長は、明確になっているか

・札幌自由が丘学園は「フリースクール」というかたちをとりながら、居場所としての機能だけでなく「もう一つの学校」としての意義をもち、豊かな個性・個となる成長の課題を持つ子ども同士が互いを認め合い、楽しく共存し、たとえトラブルがあったとしても、そこから多くを学び、成長できる場であることを目指している。

・こうした理念は「SJG コンセプト」、「今一步の挑戦 (STEP UP)」「互いに認め合う人間関係と協同 (JOIN HANDS)」「高い感性と知性 そして賢明な行動 (GOOD SENSE)」としてまとめられており、入会相談に訪れた人に渡すガイドブックに活動の特徴や実際のプログラムとともに掲載されている。

##### (2) 理念・特長は、団体・スクールでどのように共有しているか

・現在のスタッフは全員が NPO 法人札幌自由が丘学園の理事であり、理念や特徴を打ち出していく過程にスタッフ全員が参加する体制となっており。ボランティアや新規スタッフの採用に際しては前述のガイドブックを活用して理念・特徴をはかっている。

#### 2 活動・取組

##### (1) 理念・特長に応じた活動や取組がなされたか

・日常の学習活動では、学年（年齢）ではなく学習の進度に合わせたクラス編成を行い 10 名弱の集団授業を行っている。集団での授業であるため、他者に意見を伝える、他者の意見を受け入れるといった経験も多く持つことができるほか、ともに学ぶ仲間がいることによって苦手な学習にも挑戦する意欲がわくこと、お互いの得意分野はもちろんのこと、苦手な分野についても知り、それを笑ったりからかったりしない関係を築くことなどを通じて SJG コンセプトにそった学びに取り組んでいる。

・日常の活動のほか、自給自足で行う自然体験・宿泊活動なども行っている。マキワリや山菜採り、魚釣りなどに加えて鶏をさばく体験なども行い、その中では見学のみや、別の活動を行うことなども含めて関わり方を子ども自身が決め、そこで得た経験を子どもたち同士で交流、共有するなどしている。

(2) 子どもに関わる活動の内容や方法に関し、その活動や取組をより良いものにするため、最近において（この数年間で）、どのようなことを目指して、どのように変えてきたか

- ・日常の学習は、2クラスに分けたうえで、さらに個別の対応・学習等もサポートしており、そのためのボランティア募集もおこなっている。
- ・フリースクールを望むより多くの子どもたちを受け入れるため、奨学（減免）制度の運営やその維持のためのクラウドファンディングなどにも取り組んでいる。また、合わせて長期的な課題解決のための行政交渉や企業連携、寄付の仕組みづくりに取り組んでいる。

### (3) 卒業後の進路について

- ・小、中学生のみを対象としたフリースクールであるため、ほぼ100%の子どもが高校に進学している。兄弟校である札幌自由が丘学園三和高等学校はもちろん、公立、私立、全日制、通信制、単位制などその他さまざまな高校に進学している。

## 3 運営

以下の取組に関し、それぞれどのように機能しているか

### ①子どもの意見反映

- ・生活のルール作りを子どもたちによるミーティングで行うほか、日々の活動や行事もミーティングで出された意見を取り入れながら進めている。
- ・前述の宿泊体験活動にもあるように、スクールとしての活動に個々人がどのように関わるのかは最大限尊重されている。また、いったんその活動に参加しないことを選択した場合にも、ふり返り学習等の機会で活動の内容に触れることができるようになっている。

### ②保護者・スタッフなどの意見反映

- ・事業実施時には起案書を作成し、スタッフ全員で回覧し承認を得た後に実施を決定している。回覧の際には承認だけでなく他のスタッフが意見を出し、話し合いをもって改善も行っている。
- ・保護者に対しては二月に一度の保護者茶話会で意見を聞き、活動に反映していくほか、時には保護者が企画する行事なども行っている。しかし、働いている保護者などは参加が難しいとのことで、より多くの保護者が参加できる仕組みづくりは今後の課題と言える。

### ③地域などとの連携

- ・北海道フリースクール等ネットワークに加盟し、同ネットワークの事務局の中心を担い、子ども同士の交流イベントなどを実施している。また、合同の不登校相談会なども実施し、フリースクールのスタッフ同士はもちろん、不登校の親の会とも密接な関係を持っている。

・行事等に対し、地元企業からの資金や体験場の提供を受けるほか、2012年からは札幌市から継続して「フリースクール等事業費補助」を受けている。その過程で札幌市の担当部署とは話し合いを重ねているほか、札幌市教育委員会の不登校相談会や教員が参加する教育相談研究部会、北海道教育委員会の不登校講義会への出席など、学園スタッフが行政主催の催しに関わることも増えている。

## 総合結果

札幌自由が丘学園は緻密なカリキュラムをもち、単元末テストや通知表での評価を行うという点も他のフリースクールにはあまり見られない特徴と言える。しかし、それは単に通常の学校を模倣しているのではなく、そのカリキュラムに通ってくる子ども個人個人がどのように取り組んでいくのかを考え、またそれぞれに取り組んだ結果を自らがふり振り返りを前向きに評価することを手助けする仕組みになっているといえる。

また、子どもたちがミーティングを通じてつくる学園のルールも細かなところまで行き届いており、多様な個性や背景を持つ子どもたちが共に学んで行くための工夫と言えるだろう。

また、自己評価シートではスタッフの研修について北海道フリースクール等ネットワーク主催の研修のみに触れられているが、道内の様々な活動はもちろん、全国規模の研修会や実践交流にも積極的に参加し、学び続けていることも特徴と言える。

## 2-3-2. フリースペース つなぎ 評価結果

### 1 理念・特長

#### (1) 団体・スクールの理念・特長は、明確になっているか

・フリースペースつなぎは、「東北大震災のあと、気仙沼を中心とする地域において、不登校・ひきこもりの子ども、若者たちが安心できる居場所を目指して」2013年2月にオープンした。「震災で“しんどさが二重三重に重なる中”同じような悩みをもつ子どもたち、若者、親、関係する人たちがつながり合い、支え合う中で元気になることを目標にして」いる。

・フリースペースつなぎにおける学びは、「地球全部があなたの学び：遊びだってマンガだって、それは大きな学び、気仙沼には海も山もある。野菜を畑で育ててご飯を作って食べる。手を動かして体を動かして、ーそして、どこへだって行ける。パソコンだって世界中につながる。あなたの広い深い学びをあなただけの学びをつなぎは応援します」という考えからこの子どもに寄り添った学びを行っている。

#### (2) 理念・特長は、団体・スクールでどのように共有しているか

・スタッフ同士の理念の共有は、週に一度行われるスタッフミーティングによって行われている。そのミーティングでは、活動の計画を立てるだけでなく、自分たちの意思の合意形成、子どもの理解、理解に基づいた子どもへの働きかけについての話し合いの機会になっている。また、スタッフ間で毎日、一日の振り返りの時間を設け、スタッフ間の考え方、発見、経験の共有の時間になっている。

・親の会から始まった団体であり、保護者会での話し合いが重視されている。保護者会は月に1回開かれ、参加する保護者の近況から子どもについて学び合うことに加え、フリースクールの活動状況を話し合うことで様子だけでなく理念の共有の場にもなっている。

## 2 活動・取組

### (1) 理念・特長に応じた活動や取組がなされたか

・フリースペースつなぎでは、自分のやりたいことを中心に自己選択、自己決定の原則で、自分のペースで活動している。週1回の子どものミーティングで自分のやりたいことを提案したり、企画したりしている。活動場所もフリースペースつなぎだけでなく、自宅、図書館、在籍校など子どもが活動したい場所を選んで活動できるようにしている。その際、一人一人の子どもが必要とするサポートがあればスタッフが寄り添っている。

・子どものミーティングで話し合って企画する、季節の行事、スポーツ、遠足などには子ども・親・若者が合同で活動している。

・子どもから望んで始まった地域食堂への参加、美術館への水彩画などの作品の出品など、地域と繋がっている活動がいくつもある。

### (2) 子どもに関わる活動の内容や方法に関し、その活動や取組をより良いものにするため、最近において(この数年間で)、どのようなことを目指して、どのように変えてきたか

・震災直後は居場所となる場がなかなか見つからず、代表の自宅を中心につき1~2回からはじまり、週2~3回に増やしていった。更に回数を増やしてほしい、開所時間を延ばして欲しいという要望が多く、建物を見つけ2018年8月から週5日活動をするようになった。常設の安心できる、いつでも行ける居場所づくりを目指し、実現したことになる。

## 3 運営

以下の取組に関し、それぞれどのように機能しているか

### ① 子どもの意見反映

・週に一回のミーティングだけでなく、個別の面談を実施しており、面談を通して個々のニーズ、悩みをくみ取り、ミーティングなどを通して全体に反映させるなどして活かしている

る。

### ② 保護者・スタッフなどの意見反映

- ・スタッフは、週一回スタッフミーティングを実施している。また、毎日振り返りの時間を持っている。
- ・保護者は毎月一回の保護者会、親の会を実施、それに加え個別面談も行っている。

### ③ 地域などとの連携

- ・市の教育委員会と良好な関係を築いており、フリースクールの見学会、親の会のチラシを市内の小中学校全部の家庭に学校を通じて配布したり、教育委員会との共催で文科省の職員を講師とした講演会を企画したりした。また、子どもの在籍校と子どもの状況を共有する会議を行なっている。
- ・地域の子育て団体と学習会、研修会などをもち、情報を共有している。
- ・地域の人を講師に依頼し、編み物、パソコン、お菓子作り、天体観測などの講座を開いている。

### 総合結果

・フリースペースつなぎは、東日本大震災を経験した気仙沼市で唯一活動しているフリースクールである。震災を経験した地域では不登校の子どもが増えていることが知られている。フリースペースつなぎはこれらの不登校をしている子ども、若者の貴重な居場所・成長の基盤を提供している。また、不登校を経験した子ども・若者が育っていくには親の理解が重要であるが、親の学び合いにも力を入れてきている。フリースペースつなぎは不登校の子どもが安心して関わることのできる場であるだけでなく、若者が必要としている就労体験も行っている。小中学校年齢から 20 代までの幅の広い子ども・若者がそれぞれの多様な個性を尊重して活動のできる場になっている。また、親の会から始まっているという経緯から、親の活動への参加・サポートが手厚い。

## 2-3-3. フリースクール ネモ 評価結果

### 1 理念・特長

#### (1) 団体・スクールの理念・特長は、明確になっているか

- ・ 安心して自分らしくいられる居場所・フリースクールとして3つの理念「1 子どもが中心であること」「2 『居場所の力』を信じること」「3 ありのままを受け止めること」を掲げており、ホームページを中心に明確に示している。
- ・ 1 子どもが中心であること：子どもミーティングで過ごし方を決め、スタッフはそれを尊重し一緒に過ごすこととしている。



- ・ 2 『居場所の力』を信じること：プログラムを優先せず、「何もしない」ことも大事なこととし、安心して過ごせる場所をつくり、子どもたちが自分自身の力で本来の生命力を取り戻していくことを「居場所の力」と考え、それを確信しているとしている。
- ・ 3 ありのままを受け止めること：大人や学校の「ものさし」で子どもを測らず、自分のペースで育つことが重要で、安心していっぱい失敗でき、やりたいことがあればいろいろなことにチャレンジできるようにしている。

(2) 理念・特長は、団体・スクールでどのように共有しているか

- ・ スタッフ（3人）間では、週1回のスタッフミーティングで共有を図っている。
- ・ 子どもや保護者には、来所初回面談時に時間をとって伝えており、子ども・保護者にとってもアイデンティティとなるように心がけている。
- ・ ボランティアにも説明の機会を持っている。
- ・ フリースクールフェスティバルなどのイベントを通して、団体の理念を再確認し、スタッフ・子どもが発信する機会としている。
- ・ 地域や社会的に注目されるようになったため、より理念・特長の明示を意識して取り組んでいる。

2 活動・取組

(1) 理念・特長に応じた活動や取組がなされたか

- ・ 週1回の子どもミーティングを導入し定着させてきた。その結果、イベント開催、個別学習、ものづくり・木工、料理、スポーツ、合宿、フリースクールフェスティバルへの参加、など多様な活動が創出されている。

(2) 子どもに関わる活動の内容や方法に関し、その活動や取組をより良いものにするため、最近において(この数年間で)、どのようなことを目指して、どのように変えてきたか ・

- ・ 子どもミーティングが定着してきたが、会員数の増加（自己評価実施時20人からヒアリング時26人に増加）、小学生年齢の増加、「ミーティング」という言葉に抵抗感を示す子どももいることなどから、「お茶会」という名称に変え、雑談しながら1週間の予定を確認する内容を中心にした。
- ・ 「全体ミーティング」は月1回とし、提案、議論、決定を行う場として、自分はやりたいことはないという子どもにも、他の子どもの興味や関心を聞く時間として

参加を呼びかけるようにした。

- ・ 「個別活動応援プログラム」を開始し、スタッフと1対1でつくるオーダーメイドのプログラムとしている。スタッフは毎月1回5～15分の面談をしながら、日常の個別プログラムが進むようにする。木工、手芸、PC製作、進路相談、在籍学校への報告書作りなど多様な活動が生まれている。
- ・ 「木工部」ができ、地域のボランティアが講師となってフリースクールで使う家具を製作している。
- ・ 「手芸部」ができ、洋服、カバン、小物づくりをしてフリースクールフェスティバル等に出展販売した。
- ・ 地域・社会的な注目もあり、地域のボランティア人材を得て、交流活動や体験活動を広げている。
- ・ 地域ボランティアは、木工、手芸の他、理髪、運送などで活躍している。

(3) 上記(2)のように変えたことで、どのような効果があったか

- ・ ミーティングの形を変えたことにより、個々の子どもの意思ややりたいことをくみ上げやすくなった。それにより「個別活動応援プログラム」へと発展した。以前はあまり積極的に発言しなかった子どもも「〇〇がやりたい」「〇〇へ行きたい」というようになり、企画も子どもが自力で作れるようになってきた。
- ・ 「個別活動応援プログラム」によって、小さな成功体験が積み重ねられるようになった。また、スタッフと子どもの信頼関係がよくなり、スタッフからの提案もしやすくなって、活動に発展しやすくなった。個別活動からサークルやイベントに展開することにもなった。
- ・ 地域ボランティアの導入により、社会的な関係の広がり、活動の内容と質の高まりがあった。

(4) その活動や取組をさらに良いものにするため、今後どのようにするつもりか

- ・ 子どもたちが話し合っ取り組んでいくことに慣れてきているため、従来の週1回の子どもミーティングの形に戻していきたいと考えている。これによりより議論が活発になり活動が発展するよう期待している。
- ・ 個別活動応援プログラムも継続するが、時間と人員を必要とするため、スタッフ同士の連携でより効率的に応援できる体制を検討している。また、地域ボランティアなどの活用も充実させようと考えている。
- ・ スタッフの研修を外部・内部で定期的に行ったり、自主的な研修の費用の支給制度などの予算も確保するなどして、新しい情報の収集や活動の質の向上に積極的に

ある。

- ・ 活動が活発になり費用や人員がより必要になってきていることに対して、国や自治体、企業からの支援を求めていきたいと考えている。
- ・ 保護者は、ゆっくり過ごすことを望む子どももいるので「企画を出す方が好ましい」というような雰囲気にならないようにスタッフに心がけることも望んでいる。

### 3 運営

以下の取組に関し、それぞれどのように機能しているか

#### ① 子どもの意見反映

- ・ 週 1 回のお茶会（小規模のミーティング）と月 1 回の全体ミーティングというしくみがある。フリースクールでの過ごし方、活動、スタッフとの関係づくりなどに活かされている。
- ・ 個別活動応援プログラムも、個々の子どもの意見を反映するしくみとして機能している。

#### ② 保護者・スタッフなどの意見反映

- ・ スタッフミーティングが週 1 回あるほか、フリースクール開所を週 4 日とし週 1 日を「事務の日」としてスタッフが十分に意見交換等する時間を確保している。
- ・ 月 1 回の理事会には、スタッフから活動報告を行うとともに意見を反映するしくみになっている。
- ・ 保護者会は年 6 回あり、運営に関することは理事会が保護者会の意見を反映することになっている。
- ・ 「親の会」を定期的で開催しており、子どものようすをスタッフへ伝える機能を持っている。

#### ③ 地域などとの連携

- ・ フリースクール全国ネットワークを通じたフリースクールどうしの連携、千葉県フリースクール等ネットワークを通じた県域での連携、千葉県議会フリースクール等教育機会確保議員連盟との連携、千葉県教育委員会、習志野市市民活動推進課、社会福祉協議会など連携を図っている。
- ・ 市民活動祭に参加し、地域から若い人たちの参加が頼りにされている。
- ・ ボランティアの採用も地域連携に効果的になっている。

### 総合結果

地域や社会的な注目は高く、フリースクールへの入会希望も増えてきている状況に対し

て、理念の明確化、理念や特長を伝える工夫や発信を意識的に行っている。また、地域や関係諸機関との連携も積極的につくり、千葉県においては中心的な存在にもなっている。

入会する子どもの増加や多様性にも柔軟に対応し、活動や学びの質の向上につなげている。また、地域資源・地域人材も積極的に活かして体験や学びが豊かになっているが、日常的に関わるスタッフの人員不足は課題となっており、地域・諸機関との連携によって社会的な課題として打開を模索している。

## 2-3-4. 箕面こどもの森学園 評価結果案

### 1 理念・特長

#### (1) 団体・スクールの理念・特長は明確になっているか

- ・ 箕面こどもの森学園は、子ども一人ひとりの個性を尊重し、民主的に生きる市民を育てることを目的としたオルタナティブスクールであり、子どもの興味・関心を学習の中心にすえ、子ども自身の生活から学習を組み立てるフレネ教育やイエナプラン教育をベースに、ESD（持続可能な開発のための教育）を行っている。
- ・ こうした理念・特長は、学園としてはっきり謳っていると共に、学園のパンフレットやホームページ、さまざまな集会等でたえず発表され、明確になっていると感じる。

#### (2) 理念・特長は、団体・スクールでどのように共有しているか

- ・ 子どもも大人も学びの共同体、と位置づけ、共に学び合うメンバーとの意識のもと、毎週1回のスタッフミーティングを開催し、運営・学習内容、問題の解決などの時、理念・特長もふまえて行っている。また、月1回運営委員会が開かれ、事業計画や運営について話し合っている。保護者に対しても、1ヶ月に1回の懇談会をもち、保護者との共有の機会としている。

### 2 活動・取組

#### (1) 理念・特長に応じた活動や取り組みがなされたか

- ・ 学園の理念を実現するため、生活のルールや行事などは、子ども達とスタッフで話し合っ  
て決め、ほとんどの行事は、子どもたちが中心になって企画から運営まで行っており、  
自主性・主体性・協働性が育まれている。また、3学年合同のマルチエイジクラスで学  
ぶ、子ども自身が学習計画を立てる、グループでの対話の重視、自己決定などの方法を  
用いると共に、基礎学習、テーマ学習、プロジェクト、選択プログラムの4つの方式を  
効果的に組み合わせ、理念・特長に応じた活動がなされていると感じる。ESD 関係で  
は、「ESD の実践と国際交流」の冊子を出版、ユネスコスクールでのシェアが行われた。

#### (2) 子どもに関わる活動の内容や方法に関し、その活動や取り組みをよりよいものにす

るため、最近において（この数年間で）どのようなことを目指して、どのように変えてきたか

- ・ 活動の内容や方法について言語化することが大事と考え、3年ごとくらいに実践をまとめた冊子を発行し、配ったり、売ったりしている。自分たちにとっても、あとでのふり返りに役立っている。
- ・ 自己肯定感の低い子への取り組みを意識している。スタッフミーティング、さまざまな活動場面での関わり方のほか、子ども同士の対立の時の関わり方も検討している。
- ・ カリキュラムのブラッシュアップを行っている。
- ・ 現在の建物は60名収容できるが、これ以上は断っている。それをどうクリアするか取り組み、廃校利用、確保法を背景に無認可学校を認めてもらう方法などを検討している。

### 3 運営

以下の取組に関し、それぞれどのように機能しているか

#### ①子どもの意見反映

- ・ クラス集会、小学部集会、中学部集会、全校集会が定期的に行われ、意見を反映していく仕組みが定着している。日常的に、子どもとスタッフの信頼関係があり、雰囲気も意見が反映されやすくなっている。
- ・ A案に反対してB案を決めるのではなく、何が可能かを考えてC案を見つけるようにしている。

#### ②保護者・スタッフの意見反映

- ・ 月1回「おとなの会」が開催され、保護者と大人の懇談会が持たれている。週1回のスタッフミーティングでスタッフの意見、学期に1回「保護者懇談会」で保護者の意見を聞き、学園の運営に反映させている。
- ・ 保護者にボランティアとして来てもらうのも学園への理解を深める機会となり、参加度を高めている。

#### ③安全配慮

- ・ 災害時の避難訓練を行っている。
- ・ スポーツ安全保険に入っている。
- ・ 建物賠償保険加入済み。

#### ④地域などとの連携

- ・ 子どもの在籍学校へ、出席日数と学習内容の報告をしている。
- ・ さまざまな立場の視察、見学訪問を受け入れている。

- ・ 地域でフリーマーケットを行うことにより交流の機会をつくっている。

#### 総合結果

- ・ 理念・特長が明確で、学習内容・方法もその理念・特長をめざしつつ、子ども中心・子ども主体で展開している。子どもは楽しく学び、子ども個々が尊重され、可能性をよく伸ばしている。
- ・ 子ども・保護者・スタッフ三者の関係が信頼関係で結ばれ、安心した学園生活となっている。
- ・ 但し、課題として、建物の収容力、スタッフの待遇改善などハード面の改善や、学校外の学び場として受ける不利益の解消など社会的課題に直面している。

### 2-3-5. 文化学習共同ネットワーク・フリースクール コスモ 評価結果案

#### 1 理念・特長

##### (1) 団体・スクールの理念・特長は、明確になっているか

- ・ 社会的有用性を意識しつつ、不登校、ひきこもりの生徒のトータルサポートを行うという明確な活動方針のもとで団体・スクールが運営されている。
- ・ それらの方針は、例えば『協同ネット通信』等の各種発行物においても、具体的な活動の報告を通して示されている。

##### (2) 理念・特長は、団体・スクールでどのように共有しているか

- ・ 小規模のミーティングを毎日、スタッフ（兼任を含む）によるミーティングを週に 2 回以上、団体全体での研修を年 4 回開催し、理念や対応方針の共有を進めている。
- ・ 塾としてスタートした同団体・スクールの中核スタッフが現在のスタッフの中核として活躍しており、団体間の各機関での担当の意味づけに努めている。

#### 2 活動・取組

##### (1) 理念・特長に応じた活動や取組がなされたか

- ・ 不登校、ひきこもりの生徒を支援するという理念のもと、不登校に関する教育政策等も考慮しつつ、活動の射程を広げてきた経緯がある。また三鷹市や近隣自治体等の行政機関からの委託事業としても、目的的な活動として実施されている。
- ・ ネットワーク内の各機関からの活動報告やケース会議を頻回に実施し、教育実践への理解を深めるとともに、対応の方針の共有を図っている。相談部門の機能強化も進めている。

(2) 子どもに関わる活動の内容や方法に関し、その活動や取組をより良いものにするため、最近において(この数年間で)、どのようなことを目指して、どのように変えてきたか ・

- ・ この数年間での変化ということではないが、子どもによるミーティングでの自己決定をベースとしながら、体験活動の内容、計画等を決める活動を重視している。また体験を言語化・文章化する学習活動を重視しており、保護者や地域住民に対してプレゼンテーションする機会を用意するなどして、子どもの成長の機会を多様に準備している。
- ・ メンバー(子ども)とスタッフとは対等という考え方のもと、子どもがやりたい活動、やりたくない活動を表明できる機会を設定し、提案された活動をどのようにすれば実現できるのかをミーティングで話し合うようにしている。

(3) 上記(2)のように変えたことで、どのような効果があったか

- ・ 文章が思うように書けない子どもも中にはいるが、作文についての意識を変えながら、その子にしか感じられないことを紡ぎ出すことができるようになってきている。
- ・ 子どももミーティング等の機会を経験しながら、意思表示や自分のしたい活動等について主体的に取り組むことができるようになってきている。

(4) その活動や取組をさらに良いものにするため、今後どのようにするつもりか

- ・ これまでの実践の特徴を生かしながら、不登校、ひきこもりの子どもの学習活動の保障を継続していく予定である。
- ・ 特に青年期教育については、団体内にあるパン屋等の機関も活用しながら、労働と教育を一体としたシステムとして構築することを目指している。

### 3 運営

以下の取組に関し、それぞれどのように機能しているか

#### ①子どもの意見反映

- ・ メンバー(子ども)とスタッフとは対等という考え方のもと、子どもがやりたい活動、やりたくない活動を表明できる機会を設定し、提案された活動をどのようにすれば実現できるのかをミーティングで話し合うようにしている。
- ・ 自己決定をベースとして、活動内容、活動計画の立案や決定に深く参画する機会が設けられている。
- ・ 生徒会など子どもが団体・スクールの運営に関わる組織は今のところ設けられていない。

## ②保護者・スタッフなどの意見反映

- ・保護者による運営会を一時期休止していたが、3年前から再開させた。保護者が団体の運営にコミットする機会が積極的に活用されている。また「親の本気を見せる会」など、保護者の出番が適宜企画されている。
- ・高校生グループのコスモ OB の保護者が主催する親の会は月 1 回の定例会のほかに、スポーツ大会や韓国研修旅行なども企画されている。
- ・特に他に行き場のない子どものケースなどで、保護者がスタッフの指導方針に意見を言いくいにくい状況がかつてあったとされるが、それが好転してきている。

## ③地域などとの連携

- ・広く外部との連携・交流を進めている。例えば農業体験活動においては、お米サポーターとして、体験場所までの交通費のカンパしてくれる協力者を募るなどしている。それに伴い、子ども自身による報告会を実施し、子どもの言語化の学習につなげるとともに協力者へのアカウンタビリティも果たしている。
- ・同様に、地域の応援を必要とする活動については、子ども自身が企画書を作成・発行し、協力者を募る等の取り組みを進めている。
- ・親の会による企画は、同団体に子どもが通う人以外の地域住民にも開かれており、団体の内外を問わず、交流する機会が用意されている。

## 総合結果

不登校、ひきこもりの生徒を支援するという理念のもと、不登校に関する教育政策等も考慮しつつ、活動の射程を広げてきた経緯がある。また三鷹市や近隣自治体等の行政機関からの委託事業としても、目的的な活動として実施されている。ネットワーク内に多様な機関が運営されているが、各機関からの報告等の機会が頻繁に持たれることによって、対応の方針の共有を図っている。

保護者、地域との連携も活発で、保護者が運営に参加する機会とともに、保護者、OB の保護者等による自主的な企画も用意されている。行政からの委託事業としての活動も活発で、地域社会のニーズや教育政策も踏まえた取り組みが進められている。

## 2-3-6. 横浜シュタイナー学園 評価結果案

### 1 理念・特長

#### (1) 団体・スクールの理念・特長は、明確になっているか

- ・シュタイナー教育を実践する学園として、「未来の地球や人類の良き発展に喜んで尽くす



人を育てること」を目指し、「学園の子どもたちは、手足を動かし感覚を働かせて学園生活を送っています。その中で自分が本当にやりたいことを知っている自由な精神、逆風にあっても折れることのないしなやかな心、粘り強く目的を実現する強靱な意志が大きく育まれます」ということを掲げている。

そして、シュタイナー教育では、「芸術的な作業や実体験に多くの時間」を用いている。「芸術的な教授法を通して『世界は美しい』という喜びを受け取ることが重要」としている。

・こうしたシュタイナー教育の考え方や実践は、学園のパンフレットやホームページ、あるいは書籍によって示されている。

さらに、ユネスコスクールとしての活動報告にも詳細が記載されている。

## (2) 理念・特長は、団体・スクールでどのように共有しているか

・シュタイナー教育については、たとえば、毎週行われる教員会での読書会、エポック研修（教員どうしで授業を見合う）、長期休みの際の1日研修、全国のシュタイナー学校の教員が参加する研修などの各種の研修によって教員間で共有している。

保護者に対しても、保護者会において、シュタイナー教育の理解を深める機会を提供している。

## 2 活動・取組

### (1) 理念・特長に応じた活動や取組がなされたか

・シュタイナー教育の理念の実現のため、毎日の教育活動において、たとえば、エポック授業（ひとつの教科を集中的に学ぶ授業スタイル）、手仕事、オイリュトミー（言葉や音楽を身体の動きで表現する芸術）、二つの外国語といった実践を行っている。

また、学園祭、演劇を通じて、子どもたちの主体性を育てている。

・シュタイナー教育に関する地域での理解を広げるために、地域交流活動を積極的に進めており、地域のイベントや清掃作業などに参加している。

### (2) 子どもに関わる活動の内容や方法に関し、その活動や取組をより良いものにするため、最近において(この数年間で)、どのようなことを目指して、どのように変えてきたか ・

・取り立てて改善ということではないが、子どもたちにどう伝わるかを考えながら、日々の授業に取り組んでいる。

・サポート要員として、9年生の担任を終えた教員は、1年間は担任を持つことはせず、ほかの担任のサポートを行うこととした。

たとえば、子どもの状況（授業中落ち着かないときなど）に応じて、取り出し指導を行うことがある。

・地域交流活動として、マルシェ（フリーマーケットやカフェのイベント）を校舎で行った。

(3) 上記(2)のように変えたことで、どのような効果があったか

- ・サポート要員が対応することでクラスの子どもたちが落ち着いて授業を受けることができる。
- ・地域活動に参加しているときに、地域の人から声をかけられるようになった。
- ・マルシェには30人ほどの訪問があった。

(4) その活動や取組をさらに良いものにするため、今後どのようにするつもりか

- ・授業については、これまでの実践を引き続いて実施することとしている。
- ・学童保育を学園の事業として実施することを検討している。

### 3 運営

以下の取組に関し、それぞれどのように機能しているか

#### ①子どもの意見反映

- ・低中学年では、授業などにおける対話的なコミュニケーションによって子どもたちの意見を汲み上げている。
- ・高学年では、学園祭や劇上演などにおいて子どもが主体性をもって関わる活動を行っている。
- ・生徒会など子どもが学園の運営に関わる組織は設けられていない。

#### ②保護者・スタッフなどの意見反映

・教育面の協議意思決定機関としての教員会と、運営面での協議意思決定機関としての運営会議・総会・運営委員会がある。

保護者はすべてNPO会員として、運営会議に参加し協議や決議に参加することができる。

教員会にはすべての教員が参加しており、また、教員もNPO会員である。

また、係活動（掃除係などの教育面でのサポート）、活動グループ（広報、生徒募集等の運営面など幅広い活動）を保護者が担っている。

#### ③地域などとの連携

・シユタイナー教育に関する地域での理解を広げるために、地域交流活動を積極的に進めており、地域の祭りや清掃作業などに参加している。（再掲）

### 総合結果

シユタイナー教育の理念は明確であり、その理念にそって各種の教員研修が行われ、理

念の共有や実践交流などが行われている。

また、その理念を保護者にも伝えるとともに、学園の運営に保護者も参加する仕組みが整えられている。

授業については日常的な工夫や教員会による研修が実施されている。この点、授業あるいは子どもに関わる活動における主体的な改善について、保護者や関係者にもわかりやすいかたちで取り組み、そのプロセスや成果を発信することが望まれる。

地域活動にも取り組んでおり、徐々に成果が表れている。

## 2-3-7. 箱崎自由学者えすぺらんさ 評価結果案

### 1 理念・特長

#### (1) 団体・スクールの理念・特長は、明確になっているか

- ・不登校の中学生、高等学校生、高等学校中退者等を中心に、学校や社会への適応をめざしたフリースクール事業、教育相談事業等を行うという理念や特長が明確に示されている。また、生徒の在籍校や関係する団体との連絡協議が、顔の見える関係として密に行われている。
- ・団体・スクールの理念や活動内容・方針等は同事業所のウェブサイトやパンフレット等を通して公開されている。

#### (2) 理念・特長は、団体・スクールでどのように共有しているか

- ・例えばスタッフとの共有については、職員会議や職員スキルアップセミナーなどを通して、その理念等の共有を進めている。
- ・保護者や関係者との理念等の共有については、保護者会や懇親会などを開催するなどして、緊密な連携を図っている。

### 2 活動・取組

#### (1) 理念・特長に応じた活動や取組がなされたか

- ・フリースクールを利用する児童生徒のニーズに合わせて、マンツーマンでの学習指導・支援や、それらのマンツーマン授業を実現するためのスタッフや場所の確保がなされている。
- ・演劇の手法を取り入れたワークショップや自然体験キャンプ、外国籍の人々との活動など、多様な学習内容が用意され、生徒が自分の意見を述べられたり、社会性を向上させることなどが図られている。

(2) 子どもに関わる活動の内容や方法に関し、その活動や取組をより良いものにするため、最近において（この数年間で）、どのようなことを目指して、どのように変えてきたか

- ・小学生、中学生で学習は困難と考えられる生徒を対象としたフリースペースを開設し、児童生徒が認められる場所の確保が進められている。
- ・子どもの活動の内容や方法について個別性を担保するため、マンツーマン授業を可能にする常勤講師、非常勤カウンセラー、ボランティアスタッフ等を確保している。

(3) 上記(2)のように変えたことで、どのような効果があったか

- ・学習への取り組み状況がよくなってきている。学習能力が高いとはいえない場合でも、丁寧かつ個々の生徒の学習状況に合わせた指導を積み重ねることで成果があらわれている。
- ・学力が向上し、中学校とフリースクールの双方での学びを通して、希望の高等学校へ進学したケースなども見られる。

(4) その活動や取組をさらに良いものにするため、今後どのようにするつもりか

- ・今後の改善、方策については予定されていないとのことであるが、自己評価シート等からは、これまでの関係機関からの支援を得て実施されている事業であることを踏まえて、関係機関との意見交換や記録等による情報交換を通じた協議が行われているとことがうかがえる。

### 3 運営

以下の取組に関し、それぞれどのように機能しているか

#### ①子どもの意見反映

- ・年間行事の作成や、月例のクッキング活動でのメニュー選定等で子どもの意向や意思が反映されている。
- ・生徒企画デイと称する、子どもの企画運営による活動の機会が用意されている。

#### ②保護者・スタッフなどの意見反映

- ・保護者とスタッフが緊密な連携と取ることができるよう、保護者会や懇親会などのミーティングが頻回に企画されている。
- ・スタッフの意見反映の機会として、朝礼等を活用した意見交換が用意されている。ス

スタッフからの意見をもとに小学生対象のフリースペースの運営を開始するなど、出された意見の具体化の実績もあげてきている。

### ③地域などとの連携

- ・子どもの在籍校とは出席、活動報告等を行ったり、学習の進捗状況について情報収集を行うなどしている。
- ・在籍校の担任や管理職等、教員の訪問も進められている。
- ・ふくおかフリースクールフレンドシップ協議会の運営も中心的に担っており、合同の相談会や関連団体の情報誌を発行するなどの取り組みを行うことで、地域社会の認知を図っている。

### 総合結果

不登校生徒、高等学校中退者の学習や学校適応、社会適応の支援を基本とした、個別性の高い学習活動を実践、推進している。団体・スクール内部では、スタッフや保護者との連携を重視した取り組みが行われており、そのための場所やスタッフ等の確保も進められている。それらの取り組みから、利用者、卒業者の進路希望の実現等の具体的な成果が表れている。

外部との連携等も積極的に進められており、生徒の在籍学校との情報連絡、在籍学校の学習状況の確認(情報収集)、定期試験の別室(同団体内での)受験などの支援的対応も進められている。また、地域のフリースクール等の関連団体とのネットワーキングにも積極的に、ふくおかフリースクールフレンドシップ協議会の運営にも参与し、合同相談会や関連団体の情報誌の発行など、同団体に限らず、地域圏内のフリースクール等の利用を希望する生徒、保護者等への理解の促進、地域社会の認知を高めるための取り組みが行われている。

## 2-4. 第三者評価等に関する中間支援組織の機能と役割に関する調査

わが国において、フリースクール等の設置や運営、実践面での質の向上等を支援したり、NPO法人等の運営を支援したりする中間支援組織が十分な数ではないことは先行研究等でも知られてきているが、自己評価機能の向上や第三者評価等の実施、継続等に関して、中間支援組織にどのような機能が備わっており、いかなる役割が期待されるか、また中間支援組織としての評価に対する認識等を確認するために、全国3ヶ所の中間支援施設の代表者に対してヒアリング調査を実施した。

以下、調査結果の概要を示す。

### 2-4-1. 中間支援組織に期待される取組について

フリースクール等の学校以外の学習の場の重要性が認められる中で、その量的不足、都市部偏在、質の担保・向上等、課題は少なくない。2017年度研究においては、フリースクール等が外部組織・団体にどのような支援を求めているか（支援の重要性すなわちニーズ）、そしてその支援が実際にどれほど受けられているか（支援の実績）との関係を明らかにした。重要性（ニーズ）に対して実績が上回る支援内容はなく、支援の不足は大きな課題であった。加えて中間支援組織の機能を持つ14団体（フリースクール等とは限らない）に対するヒアリングを行い、特に以下の4点の課題と方策が指摘したところである。

- ・「情報発信・提供」の不足、「参加・体験・交流」の不足→情報提供の内容・項目を踏まえた活動内容の設定・充実が必要
- ・「他機関とどのように連携すればよいか」の情報提供の不足 → 公民連携等の取組の事例やきっかけづくりが必要
- ・「補助金・助成金・寄付金等についての情報提供」や「実際の資金提供」の不足 → 財団等との連携・協働を視野に入れつつF S等の基盤強化を促進する取り組みが必要
- ・「F S等の地位・社会的認知の向上についての情報提供」の不足 → 充実が必要

### 2-4-2. 中間支援組織に対するヒアリング内容

上述の課題や方策を踏まえて、フリースクール等の中間支援組織のうち全国センター的な役割を持つ団体1つと、地方における団体2つを選定してヒアリング調査を実施した。

<ヒアリング対象>

- ① NPO法人フリースクール全国ネットワーク
- ② NPO法人北海道フリースクール等ネットワーク
- ③ ふくおかフレンドシップ協議会

<ヒアリングの方法>

3団体の代表的な立場の者に一堂に会していただき、相互による質疑や意見交換を交えたグループ形式

<ヒアリング項目>

- (ア) 情報収集・提供に関する取組
- (イ) 学校・行政等公民連携や政策動向等に関する取組
- (ウ) 財政支援に関する取組
- (エ) 評価の導入やあり方について

ヒアリング内容については項目（ア）～（ウ）は各団体ごとに記載し、項目（エ）は 3 団 体をまとめて記述する。

①NPO法人フリースクール全国ネットワーク

- (ア) 情報収集・提供に関する取組
  - ・ 加盟団体の名称・所在地・連絡先・URLをホームページで公開し外部情報発信している
  - ・ 加盟団体間のメーリングリストをつくり、相互情報交換を行っている
  - ・ 加盟団体を対象に毎年「フリースクール等基本調査」を実施し、フリースクール等の状況と動向の把握、政策提案等のための基礎データとしている
  - ・ 毎年、JDEC日本フリースクール大会、多様な学び実践研究フォーラム、スタッフ養成研修を開催し、交流、研修、政策・施策推進、社会発信を行っている
- (イ) 学校・行政等公民連携や政策動向等に関する取組
  - ・ 各地の公民連携情報を収集しメーリングリスト等で発信している
  - ・ 文部科学省担当部局や超党派フリースクール等議員連盟との窓口機能とFS等の意見要望の取りまとめ機能等を担っている
  - ・ 政策・施策の提案、促進、周知、先進事例の学び合いを行っている
- (ウ) 財政支援に関する取組
  - ・ 助成金情報をメーリングリスト等で発信している
  - ・ 国・民間助成による全国規模の事業を、地域の加盟団体と地域で実施している
  - ・ 公民連携による行政委託・協働・助成事業の実践事例紹介し地域での取り組みを促進している
  - ・ 教育機会確保法制定や施策推進においてFS等への財政支援、FS生・家庭への経済支援を要請している
  - ・ 休眠預金活用について情報収集やNPO等関係者団体と連携している

②NPO法人北海道フリースクール等ネットワーク

- (ア) 情報収集・提供に関する取組
  - ・ 加盟団体の名称・所在地・連絡先・活動内容等を記載した『子どもの自立を支援するフリースクール等のガイドブック』を作成し、公開配布している

る

- ・ 札幌市作成の『さっぽろ相談機関への道しるべ - 子ども・若者支援ハンドブック』にネットワークの情報を提供している
- ・ 『不登校とフリースクールQ&A ひとりひとりの子どもの学びと育ちをさされに豊かなものにするために』を作成し、公開配布している

(イ) 学校・行政等公民連携や政策動向等に関する取組

- ・ フリースクール全国ネットワークと連携し情報を収集したり、JDEC日本フリースクール大会等に派遣して最新情報を取得している
- ・ さっぽろ子ども・若者支援地域協議会（札幌市子ども未来局主幹）の構成員となり、地域行政と連携している
- ・ 定期的に札幌市、道教委と連絡協議を行っている
- ・ 札幌市「フリースクール等民間施設事業補助金」制度の運用を通じた行政連携を行っている

(ウ) 財政支援に関する取組

- ・ 札幌市所在の団体については、札幌市「フリースクール等民間施設事業補助金」により補助金が出ている
- ・ ネットワーク自体の財政規模・人員が小さく十分な活動が難しい状況である

③ふくおかフリースクールフレンドシップ協議会

(ア) 情報収集・提供に関する取組

- ・ 加盟団体の名称・所在地・連絡先・活動内容・対象・費用を記載した『子どもたちの多様な学びを支える居場所情報誌』を作成し、公開配布している
- ・ 加盟団体間それぞれでの連絡や相互訪問を促進している
- ・ 不登校相談のフォーラムを開催している

(イ) 学校・行政等公民連携や政策動向等に関する取組

- ・ 福岡県フリースクール等助成を受けている団体 5 団体が運営委員となって窓口を行っている
- ・ 多様な学び実践研究フォーラム開催地となり公民連携・出席扱いなどへの理解を推進しようとしている

(ウ) 財政支援に関する取組

- ・ 福岡県フリースクール等助成の紹介をしている

3 団体とも加盟団体の情報収集と加盟団体間相互の情報交換を行っており、それらを活用した外部・社会への情報発信を行っている。「情報誌」の作成やホームページによる公開が



(ア)～(ウ)の土台となっており、全国レベル、地域レベルで同様の取り組みが行われ継続されていくことが重要であると言える。

(エ) 評価の導入やあり方について次のような内容が示唆された。

- ・ NPOと評価は切り離せないものである
- ・ 市民に公開して見せていくことがNPOの使命である
- ・ 評価は「情報発信」と同義と捉えるとよい
- ・ 財源確保や社会的認知・承認・信用のためでもあるが、団体のミッションの達成度を測っていくことはなくてはならないことである
- ・ フリースクール等では積極的に取り組んできたテーマではなかったが、これからは価値を高めていくためにも必要である。その場合、自ら評価の視点を入れていく必要がある
- ・ 関係者による自己評価が基本だ
- ・ 利用者や子どもによる評価をどう入れていくかは課題である
- ・ 評価という言葉には踊らされてしまう面もある。必要性はあるがフィットする方法がわからない
- ・ 評価の目と質を高めていくことが重要である
- ・ 活動面での評価ばかりでなく、子どもの権利条約の周知共有がなされているかなど重要な価値の共有状況を確認する必要がある
- ・ 活動の質の担保のために重要である
- ・ 中間支援組織に評価のための機能や機会をつくることがよい
- ・ 相互交流自体が相互評価になる。団体どうしばかりでなく、団体スタッフどうしの交流が評価の一つとして有効である
- ・ 学識者等の専門家による評価ではなくフリースクール等の関係者による評価が重要である
- ・ フリースクール等で不足する場合は地域の子ども団体と相互に評価しあうのも手である
- ・ 評価を担う専門性や専門家が少なく、養成する必要がある
- ・ 中間支援組織には、評価によりコンサルティング支援していくことも重要である
- ・ 中間支援組織がオンブズマン機能を持つことも重要である

評価については積極的な理解が進んできていると確認できた。評価の方法や手法、評価を行っていく仕組みの開発、評価に携わる人材の養成などが課題として認識されている。

### 3. フリースクール等の民間団体、適応指導教室への自己評価、相互評価・第三者評価等についての質問紙調査

#### 3-1. フリースクール等への自己評価、第三者評価等に関する調査

フリースクール等における自己評価や相互評価・第三者評価に関する取り組み状況や意識等についての傾向、動向を探るため、全国の 365 ヶ所のフリースクール等へアンケート調査を行った。

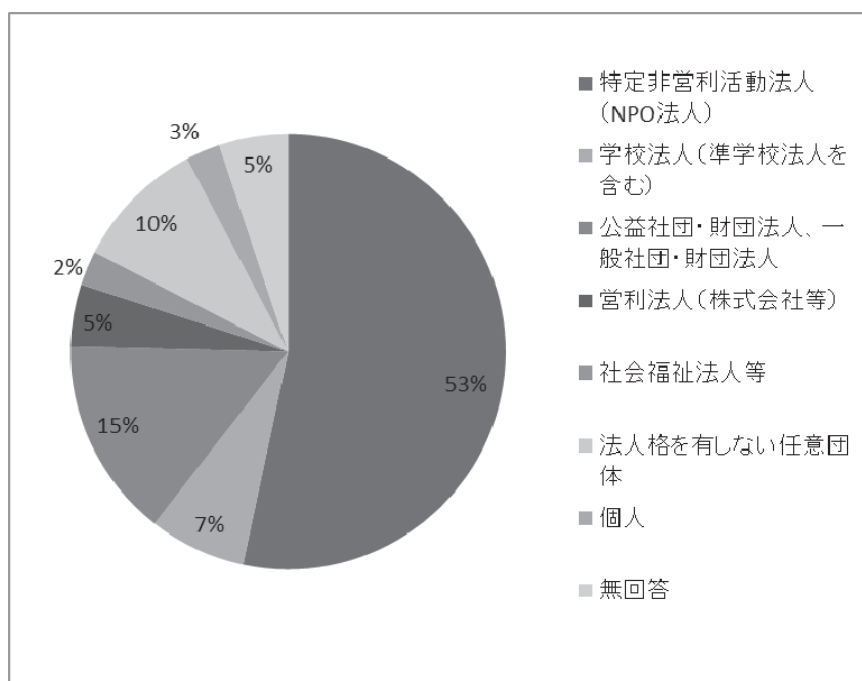
・調査時期：2018年12月～2019年1月

・調査方法：学びリンク社刊『小中高・不登校生の居場所探し 2017-2018年版（全国フリースクールガイド）』（ISBN: 978-4908555084）に掲載の全団体（367団体）に調査票を郵送し、フリースクールではないため、調査の回答を辞退したい旨のご連絡をいただいた 2 団体を調査対象から除外して母集団とした。111 団体より 195 件の回答を得た（団体ベースの回収率 30.4%）。

#### 3-2. 回答団体、回答者の属性等

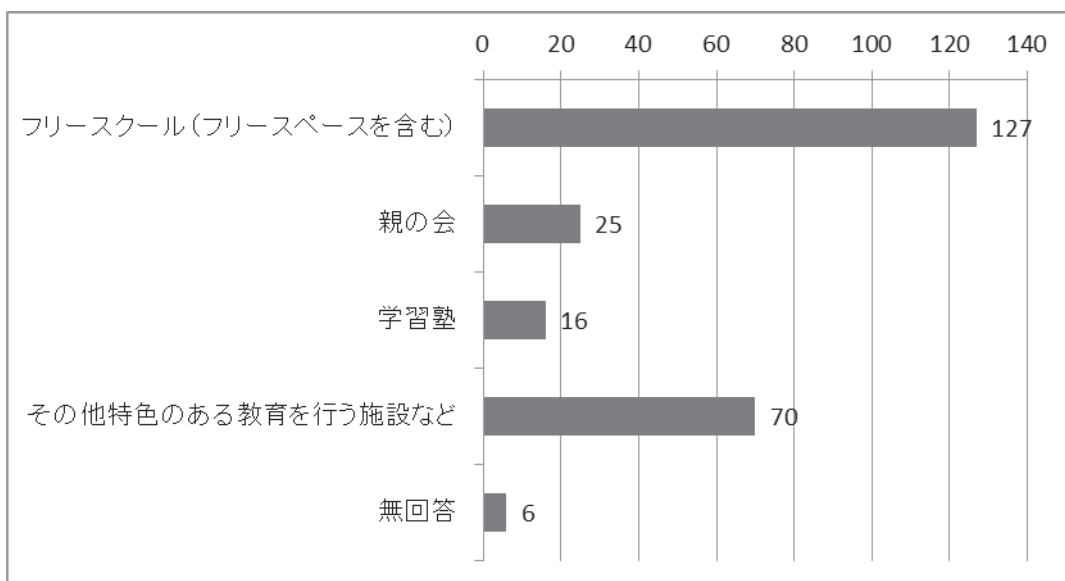
まず、調査票を記入した回答者、協力者についての属性等を以下に示す。

表 10 フリースクール等の運営形態（N=111）



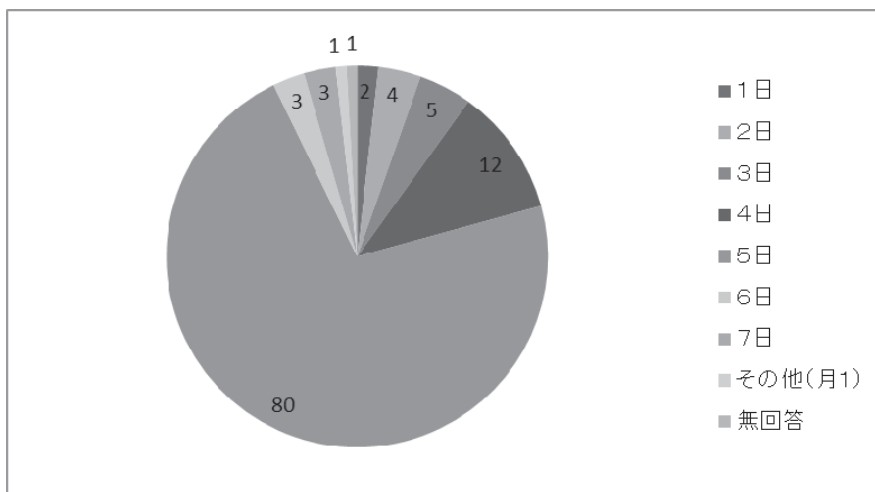
調査票の回答を得た団体の中では半数以上が NPO 法人による運営を行っていた。今回の調査で、運営形態と評価の取り組みとの直接の関連は見いだせなかったものの、今後 NPO 法人の外部評価の指標等も参考にすることができるものと考えられる。

表 11 運営形態 (N=195、ただし複数回答あり、単位件)



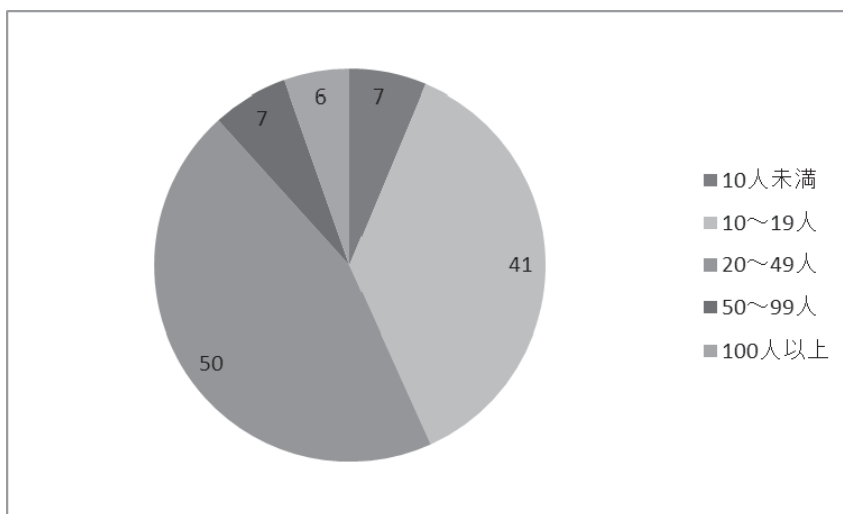
運営形態については、フリースクール、フリースペースとしての運営形態を採っている団体が多く見られた。同一団体の中でも複数の運営形態を回答している調査票が複数見られたため、この項目については団体ベースではなく個票ベースで集計を行った。複数の運営形態を採用している団体もあり、運営面でも多様化、複雑化が進んでいることが示唆された。

表 12 週の開室日数 (N=111)



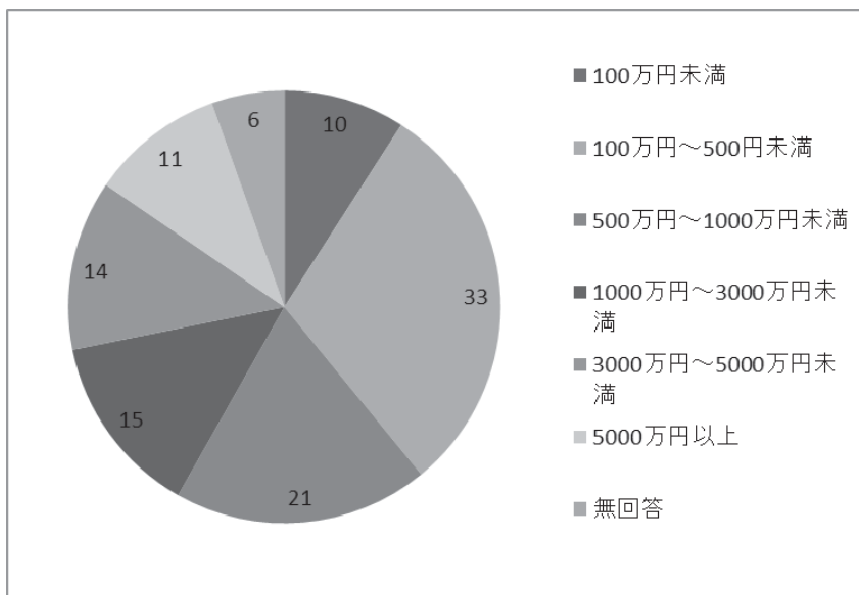
週の開室日数については、週 5 日の開室と回答したフリースクール等が多く見られた。その他、利用者のニーズやスタッフ等の勤務体制等にあわせた開室日数を確保していることが確認された。

表 13 団体・機関に在籍する子どもの数 (N=111, 単位：件)



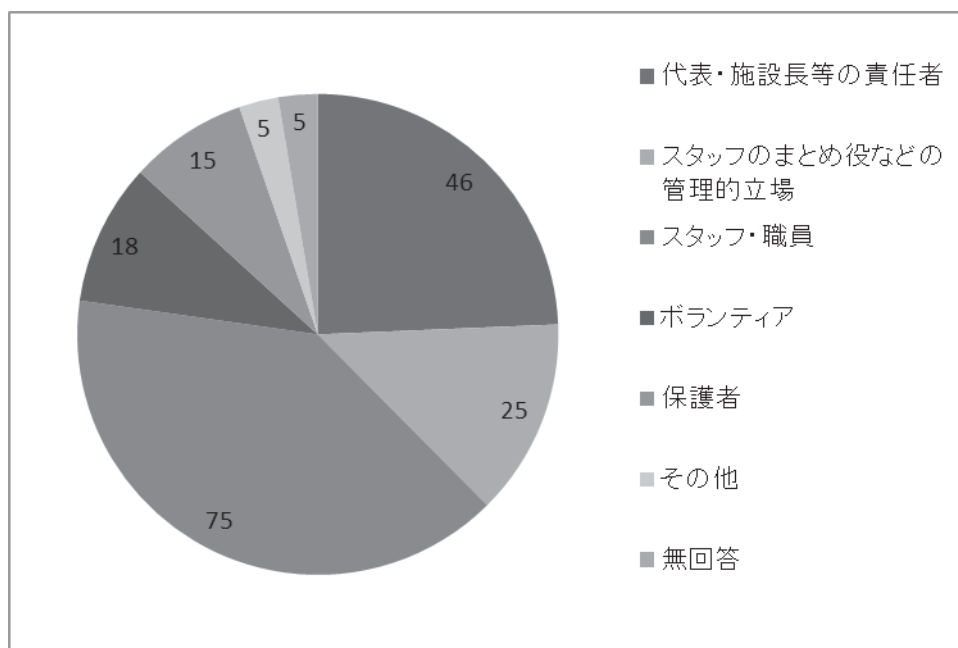
在籍する子どもの数はフリースクール等により多様であったが、多くは10人～49人の回答に含まれていた。

表 14 団体・施設の活動費 (N=100, 単位、件)



団体施設の活動費も活動規模等に応じて多様であることが確認された。後述する評価に対する取り組み状況等との関連は見られなかった。

表 15 調査票回答記入者の属性 (N=189、単位：名)



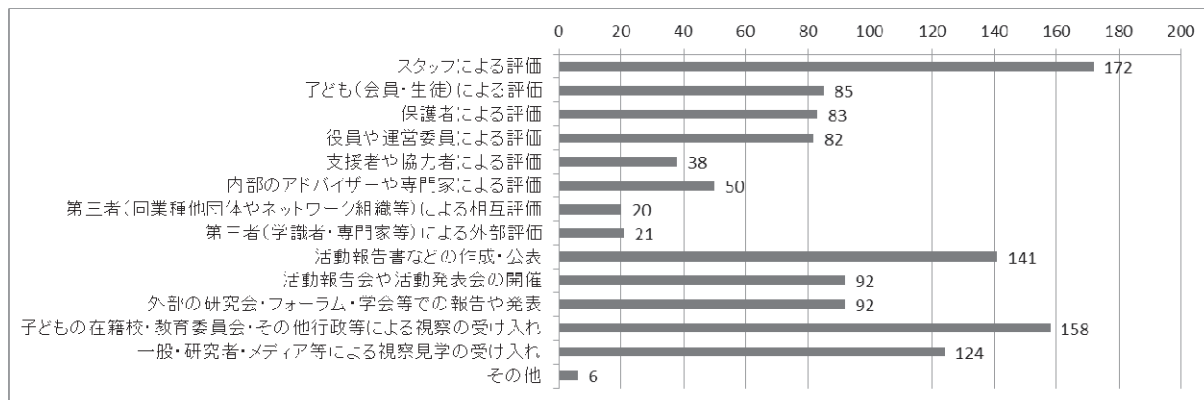
調査票回答者の属性をたずねたところ、代表者や管理的立場の関係者以外のスタッフ、保護者からも回答を得られていることを確認できた。

### 3-3. フリースクール等における自己評価・第三者評価等の取り組み等について

前項で示した回答者への調査の結果、フリースクール等での評価に関する取り組みとして、以下のような結果が得られた。

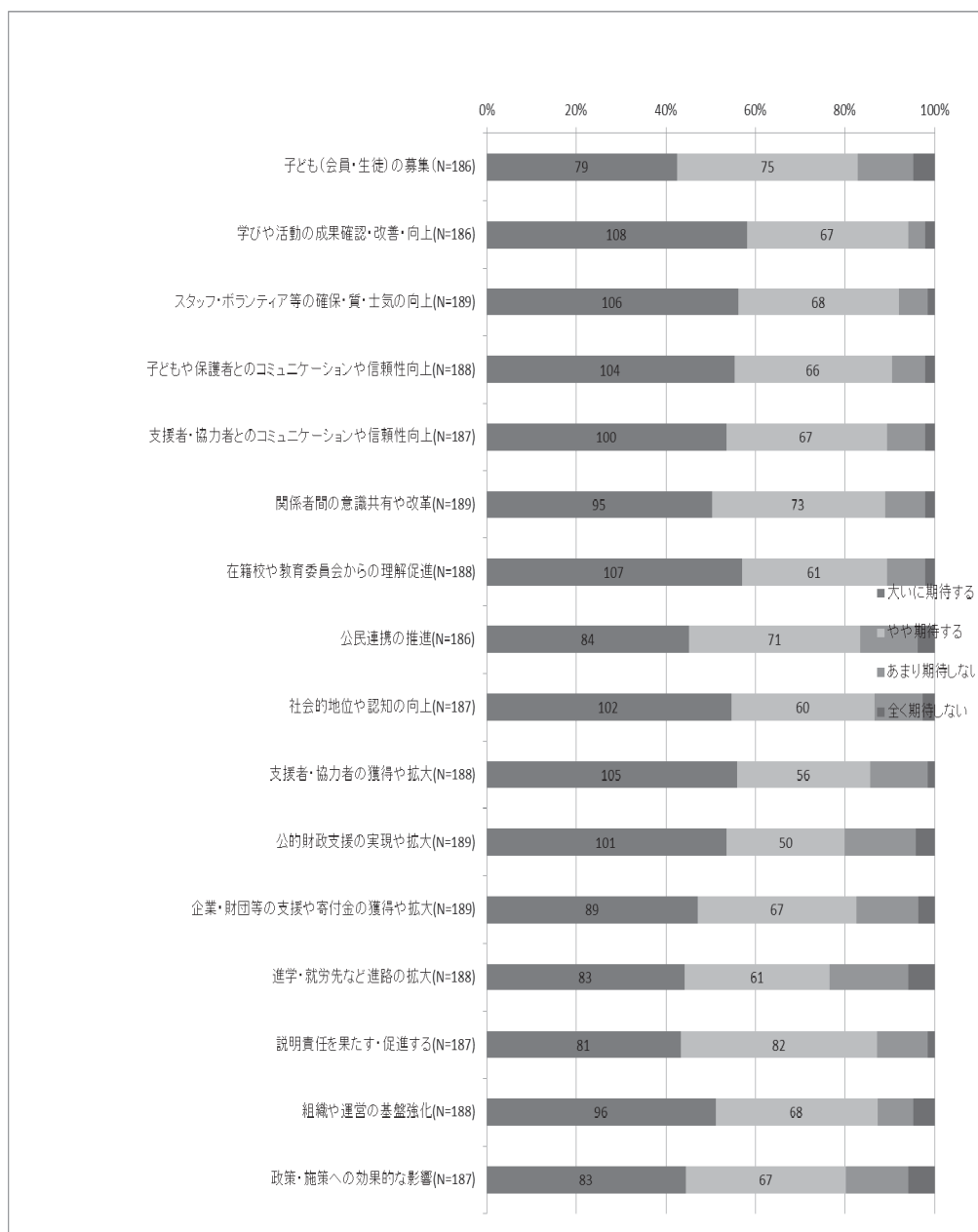
表 16 (再掲) 活動の実施や発展のために行っていること

(N=187、複数回答あり、単位：件)



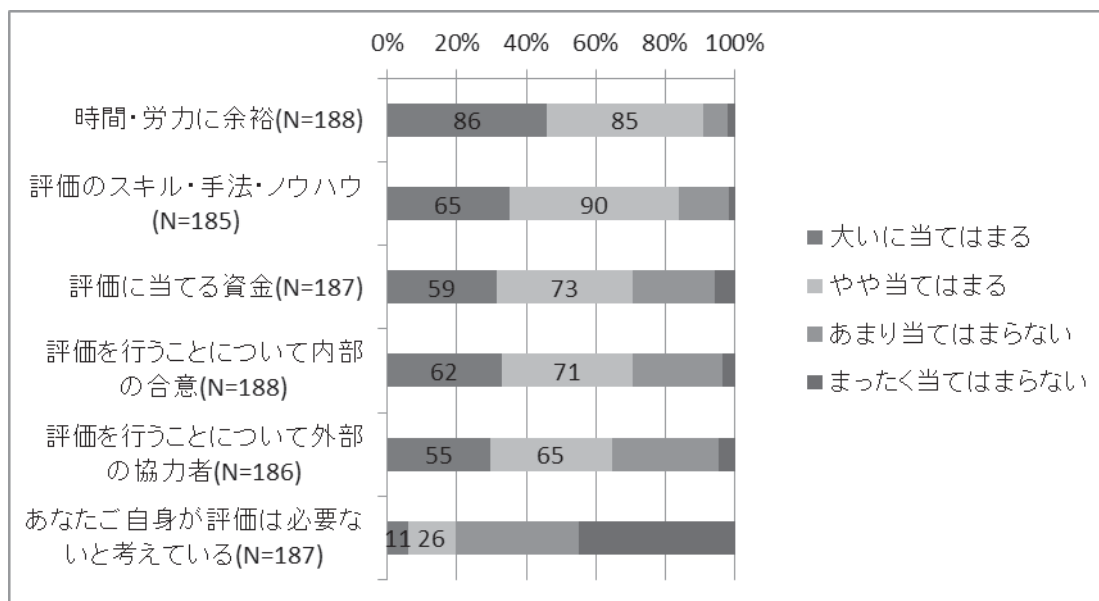
活動の実施や発展のために行っていることを複数回答でたずねたところ、スタッフによる評価、活動報告書の作成や活動報告会の開催、児童の在籍学校や教育委員会等の行政機関からの視察受け入れ等が多く行われていることが確認された。スタッフによる評価は自己評価の一環としてとらえることが可能であり、活動報告書の公開や外部視察の受け入れ等は、外部評価につながる取り組みとして理解することが可能である。

表 17 評価を実施することで期待されるメリットや効果



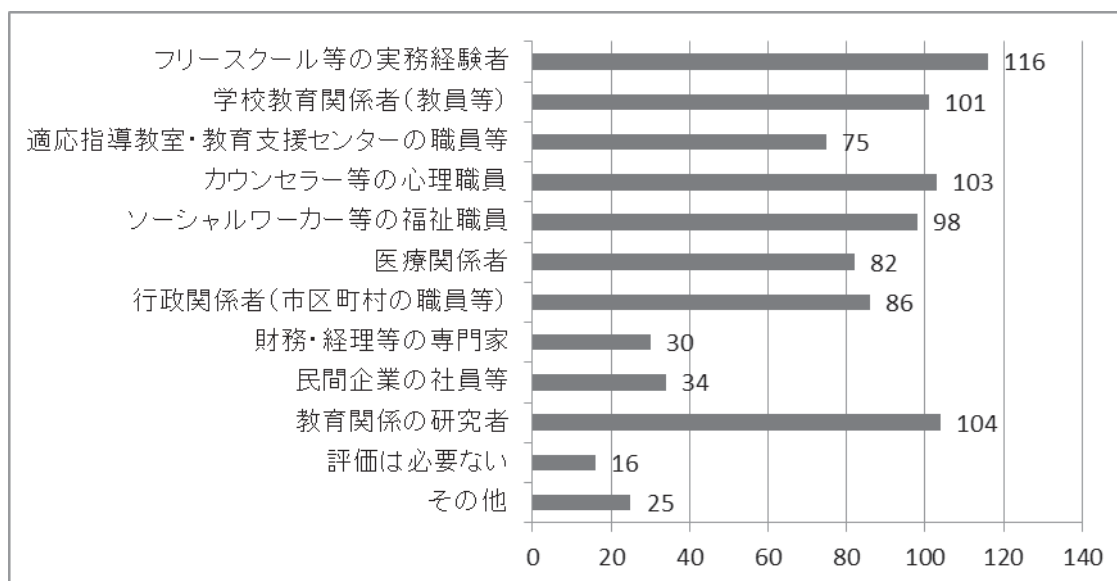
自己評価や第三者評価等を実施することによって、どのような効果等が期待できるかを、各項目についてたずねたところ、表 17 のような結果となった。特に期待される効果やメリットとして、教育実践の質やスタッフ等の資質の向上、子どもの在籍学校や教育委員会の理解促進、社会的地位や認知の向上、支援者・協力者の獲得や拡大といった内容が挙げられた。平成 29 年度の当協議会で実施した調査では、自己評価はこれから利用を検討する児童生徒や保護者への自己開示としての側面が強いと考えられたが、今回の調査結果では、自己評価や第三者評価等が実践の向上や社会的認知の向上につながると考える回答が多く見られたのが特徴といえる。

表 18 (再掲) .評価の実施を促進する条件 (単位：件)



自己評価や第三者評価等を促進するための条件についてたずねたところ、表 18 のような結果が得られた。時間や労力に余裕があること、評価のスキル、手法等の向上が図られることなどが重要であることが確認された。通常の教育実践業務に加えて、評価等の取り組みを進める上での課題が示されたといえる。

表 19 第三者評価等を実施する場合に、どのような評価者が望ましいか (N=195、複数回答、単位：件)

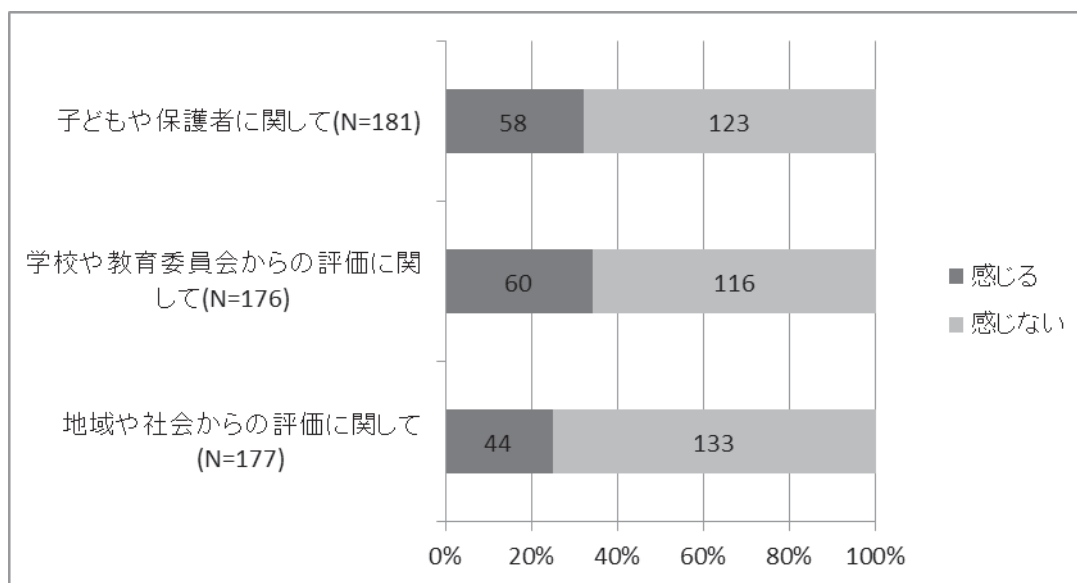


第三者評価を実施する場合の評価者として、どのような人が望ましいかをたずねたところ



ろ、表 19 のような結果を得られた。フリースクール等の実務経験者のほか、教員等の学校経験者、カウンセラー等の心理職員、ソーシャルワーカー等の福祉職員、教育関係の研究者等について、評価者として望ましいとする回答が多かった。総じて、教育、心理、福祉の専門家が第三者評価の実施者として期待されていることが確認された。

表 20 教育機会確保法以降、ポジティブな変化を感じるか (N=195、単位：件)



教育機会確保法以降、フリースクール等での取り組みについて変化を感じるかをたずねたところ、表 20 のような結果が得られた。

子どもや保護者に関しての例としては、以下のようなものが挙げられた（複数の回答が寄せられた項目から抜粋する。以下同様）。

- ・特に小・中学生のフリースクールへの説明会参加者が増えた。
- ・保護者は法で多様な教育をみとめられたという安心感が感じられ、より活発になったと思う。子どもはその親の影響をうけている。
- ・学校へ行かないことに対する罪悪感が減ったように感じる。
- ・不登校に対する保護者の理解が深まった。
- ・資料請求の数が増加している。また、問い合わせや、初回面談の際、「教育機会確保法」のことを、話題に触れる人が増えた
- ・学校以外の学びの場の存在、また重要性もより寛容な姿勢で認識していただいている人が増えた。
- ・新しい（独自の）学びのカリキュラムなどに興味を示す人が増えた。

学校や教育委員会からの評価については、以下のような例が複数挙げられた。

- ・一部の市の教育委員会の主催する「フリースクール等団体との懇談会」に出席を求められた。(当該市から本校の生徒が通学しているから)
- ・在籍校の校長や教育委員会の職員からの問い合わせや視察があった。
- ・教育関係者(教員・センター職員・SC)紹介の入学が増えた。
- ・各市町村からの連携に関する問い合わせや、セミナーなどが増えた。
- ・視察に来校される方が増えたり、学校訪問に行くと認知している学校が増えた。
- ・スクールカウンセラーの方からの紹介、問い合わせが増えた。
- ・学校から紹介が来るようになった。民間と行政の連絡が取りやすくなった。
- ・連携による問い合わせや、関りが増えた。
- ・校長先生やSCの教室視察や勉強会への参加があった。
- ・市教育委員会が実施しているフリースクールの意見交換会への参加要請を頂いた。
- ・教育委員会とは従前から定期的に連携し、協力関係が築けており、今後もそのような関係性も維持できると感じる。

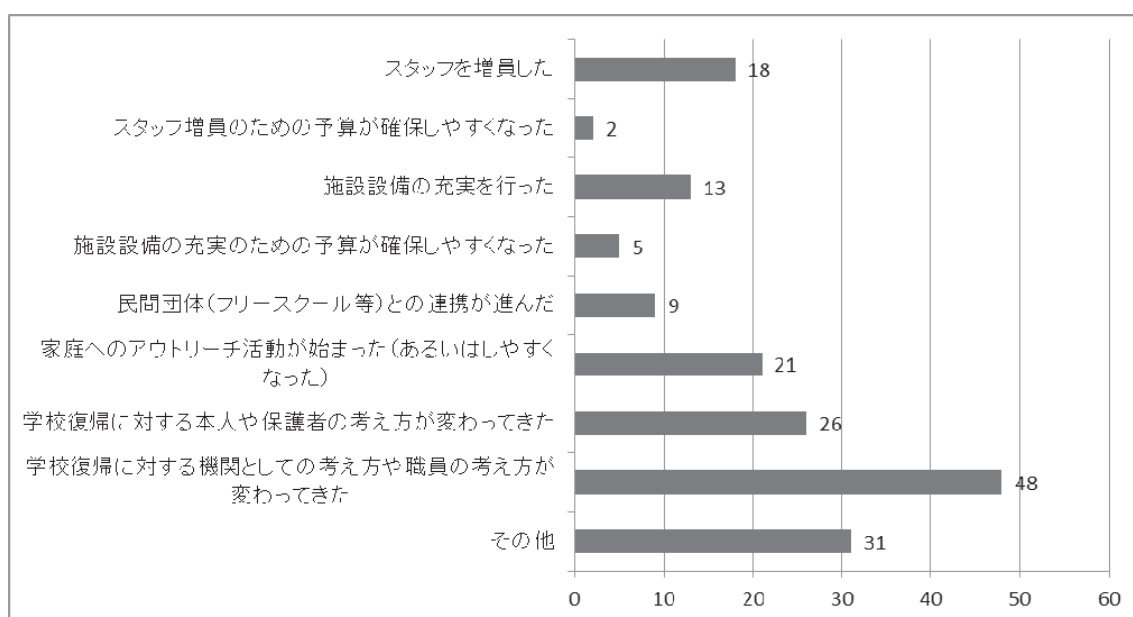
地域や社会からの評価については、以下のような例が挙げられている。

- ・識者がフリースクール、NPOのスタッフなどある程度限定された範囲ではあるが、自分たちの活動に法的うらづけを持ち、前向きになっている方がふえたかもしれない。
- ・新聞 etc.メディアからの問い合わせが増えた。
- ・「フリースクールの重要性」について、「例外的に認められている」という風潮からより積極的な意味で「社会にとって必要で重要な役割を担っているもの」という認識で評価されることが多くなった様に感じている。

### 3-4. 適応指導教室・教育支援センターにおける自己評価・第三者評価等の取り組みについて

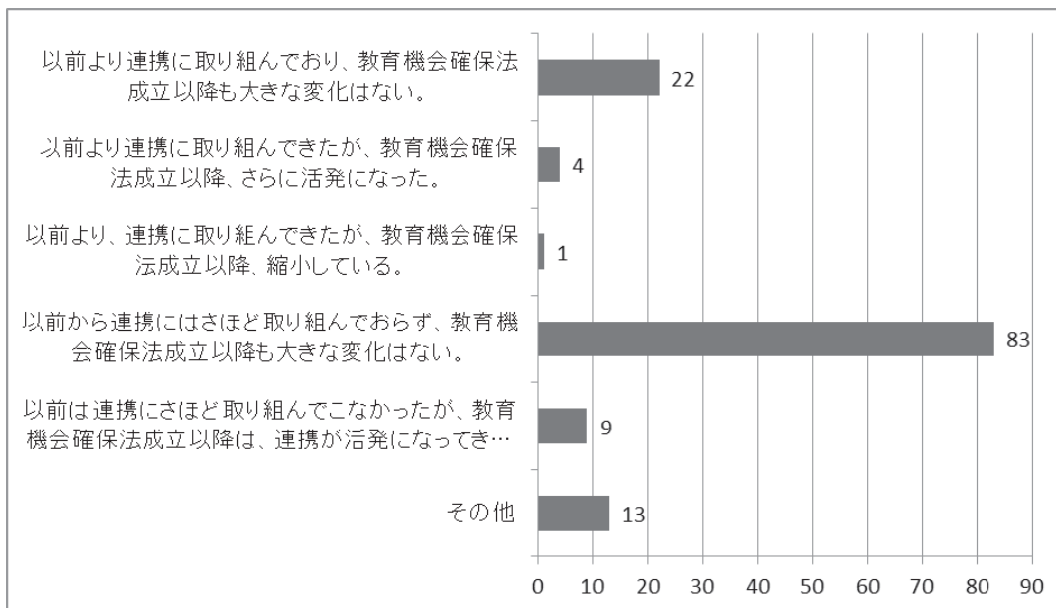
フリースクール等の各団体が外部機関と連携を行う際に、本事業の根幹である不登校児童生徒への支援という点から適応指導教室で、自己評価や外部評価や関連する取り組みについて、質問紙調査を行った。全国適応指導教室連絡協議会のご協力を得て、全国 220 の適応指導教室・教育支援センターに質問紙を郵送し、135 件の回答を得た（回収率 61.4%）。

表 21 教育機会確保法の成立以降、活動や取組で変化したこと（単位：件、N=135,複数回答）



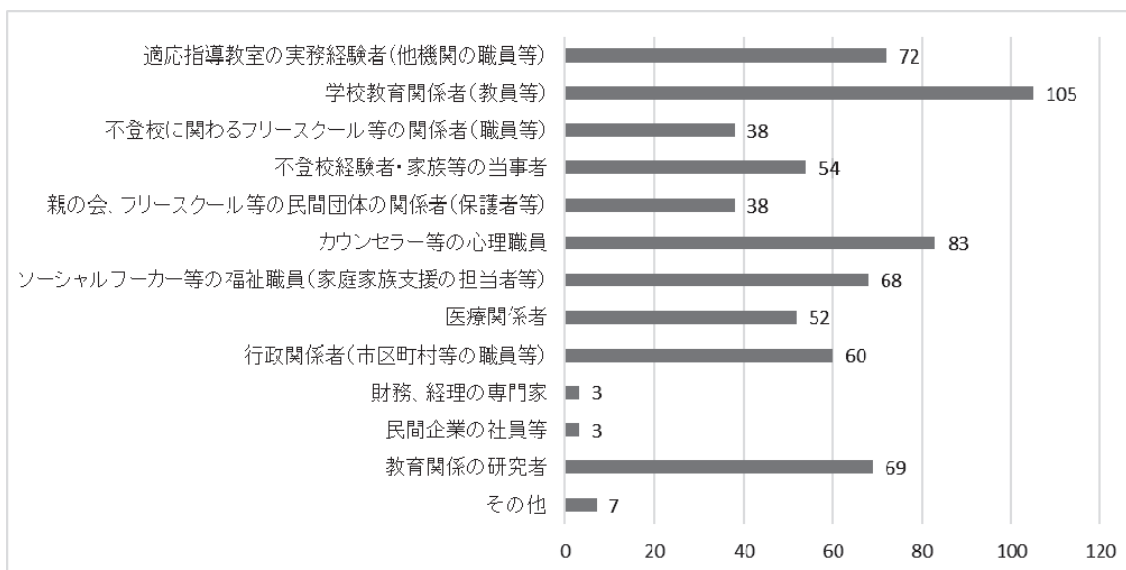
教育機会確保法の成立以降の、適応指導教室等における活動や取組で変化したことについてたずねたところ、比較的多くの回答が寄せられた項目として、「学校復帰に対する機関としての考え方や職員の考え方が変わってきた」ことが挙げられた。

表 22 フリースクール等との連携について (N=135)



フリースクール等との連携について、その取り組みの状況と教育機会確保法による変化の実感をたずねたところ、表 22 のような結果が得られた。今後の適応指導教室等とフリースクール等との一層の連携が期待される。ただし、連携に取り組んでいないことについては、自由記述等により、近隣にフリースクール等が開設されていない、との補足も多く見られた。フリースクール等の地域偏在の課題等とあわせた解釈が求められる。

表 23 (再掲) 第三者評価を実施するとしたら、どのような評価実施者が望ましいか (N=135, 複数回答)



仮に貴機関で第三者評価を実施するとした場合に、その評価実施にどのような人に加わ

ってもらおうのがよいと考えるかをたずねたところ、表 23 のような結果が得られた。教員等の学校関係者、適応指導教室等の実務経験者、教育研究者について多くの回答が得られた。

そして、それぞれの適応指導教室等において、自己評価や第三者評価等を通して、相互に実践を公開するなどして、その実践の質を高め合うような取り組みがなされているか、またその取り組みの例等を自由記述の形式で回答してもらった。その結果、多数の回答が得られたが、重複を避け、可能な限り網羅することを目指して、以下のように整理した。なお、原意を損なわない範囲で、文章を改変してある。

- ・教育委員会や市機関での役割等についての確認や情報交換
- ・県内の教育支援センターや適応指導教室との研修
- ・年度末に、学校、適応教室在籍の児童・生徒及び保護者にアンケートを実施している。
- ・自己評価を年度末に行っている。また教育委員会の外部評価の一環で、本所も評価を受けている。全国適応指導教室連絡協議会や近隣市町村との協議に参加し、情報交換を行っている。
- ・教育相談研修会を毎月開催し、臨床心理士から子どもたちとの関わり方や運営面について助言を受けている。
- ・市内の不登校性が通所しているフリースクール等全てに情報交換会開催の案内を出し、情報交換会を実施した。お互いの事業を報告し合い、各取り組みを参考にすることができた。
- ・教育支援センターとして、学校及び市民の教育ニーズに専門性と先進性を持ち且つ柔軟に対応できるより、外部の視点を反映する協議会を定期的に開催している。
- ・市教委と相談の状況、学校との連携の状況、支援の状況（学校復帰等）から、運営に関する質的・量的な評価を行っている。また、県や教育事務所が主催する協議会等に参加し、他の市町村との情報交換を行っている。
- ・自己評価は活動がマンネリ化形骸化しないよう、毎年スタッフ全員が一堂に会して活動を評価しあっている。
- ・年 4 回スーパーバイザーによるケース検討や当機関の体制の見直し等を行っている。毎月「通室状況報告書」を在籍校に送付している。
- ・毎年年度末委、実施してきた行事や取り組みについて振り返り、次年度の活動に改善を加えている。
- ・保護者との面談時に、適応指導教室への要望などを聞いている。
- ・年度末の反省（運営状況、生徒の改善状況等）を行い、教育委員会内で共有している。
- ・県内の市町教育支援センター訪問を年 1 回、教育支援センター通信（たより）のやりとりを月 1 回実施。
- ・子ども若者支援地域協議会の中で、親の会・フリースクール、他の相談機関との情報交

換・事例検討等を行っている。

- ・私立学校も参加して、不登校児童生徒の支援等を行う連絡会を定期的で開催している。
- ・教育センター企画運営委員を委嘱し、年 2 回の会議により運営についての意見をもらっている。
- ・学校復帰をめざしているので、復帰に対しての支援のあり方や復帰回数等を検証し、学校との連携強化に努めている。
- ・公的機関として、都道府県教育庁の主催する情報交流の場や、教育委員会総体における事務事業の点検、評価などを行っている。
- ・県の適応指導教室の研究会に入り、定期的な研修会で情報交換や課題解決のための相談を行っている。
- ・連携を求めるフリースクールと実践についての共有を行っている。
- ・自己評価を行っている。教室の取組具体策について計画し、実施後反省点と児童生徒の変容の有無を職員内で確認している。
- ・自己評価については指導員間及び指導主事からの助言等により常に取り組んでいる。また当教室の特色である管内学校との密接な関係づくりを生かして情報交換は随時行っているため、PDCA サイクルについては概ね実践できているものとする。
- ・外部の視点からの意見や助言を受けるため、学識経験者、市立学校の校長、市の PTA 連合会の会長、子どもや家庭の支援に関わる行政職員等で構成する運営会議を実施している。
- ・近隣の適応指導教室の協議会に参加し、一般企業のカウンセラーの方とも共に学びあう場ももてた。それを通して、社会的自立をめざすという認識も深まった点もある。近隣の大学を中心に、指導員のスキルアップを含め、実践の質を高めあう取り組みもされているので、そこに参加（毎回）している。
- ・特に行っていないが検討中である。
- ・「学校復帰のための子どもの基礎力達成率」及び「学校復帰率」の 2 つの数値指標をもとに「事務事業総点検シート」を作成し、点検・評価を毎年行っている。
- ・外部人材を活用した評価、行政との業務に関する評価について、それぞれ定期的に委員会を実施している。
- ・子どもによる評価を取り入れている。

#### 4. 協力団体からのフィードバック

今回自己評価、第三者評価の試行に協力いただいた団体、自己評価・第三者評価等の取り組みについての質問紙調査にご協力いただいた団体等からのフィードバックを、評価結果（案）のやり取りや、報告会等のプロセスで得ることができた。その概要について、以下に示す。多様な立場、考えからのフィードバックが寄せられたので、網羅性を重視しつつ要約・整理した。なお、原意を損なわない範囲で文章等は改変してある。

- ・書きやすい、回答しやすい評価シートであった。
- ・子どもにとっては回答しにくい評価シートであった。
- ・子どもの成長について大人が評価シートに書くことが適切かが分からない。学びの主体が子どもだという理念に基づけば、子どもの成長を子ども自身が書けるような評価シートにしてほしい。
- ・子どもが自らの成長をどのように評価しているのか、その点を書きやすくする評価シートが必要ではないか。
- ・団体のフェイスシートに当たる部分は保護者にとっては書きにくい。しかし、評価項目、評価内容を、保護者にとってどのように思われるかといった尋ね方に変更することで、書きやすくなるのではないか。
- ・複数のスタッフがそれぞれ自己評価シートを記入した場合でも、同様の表現になるのではないか。
- ・自己評価に自己点検としての意味合いが含まれるのであれば、統一の評価基準は必要と思われる。
- ・団体内での自己評価シートのすり合わせは、時間の制約や自己評価の認識の違いもあり、難しい。
- ・自分たちの取り組みを改めてまとめてみるという、自己点検としての意味は大きい。
- ・自分たちの団体の特徴を書く場合に、よいことしか書かない傾向が出るのではないか。困っていること、マイナス面も書けるような自己評価シートであるとよい。
- ・自己評価シートをオーソライズした後、どのように使うか、誰に見てもらうかが課題である。例えば、他のスクール等の自己評価シートをみて、あなた方のスクールはここが問題です、あるいはここはどうなっているのか、と尋ねるのは難しい。自分たちがここは困っているが、他のスクール等ではどのようになっているか、という尋ね方になるのではないか。
- ・自己評価シートをもとに、どのような組織になっていくのかを検討することが重要ではないか。
- ・スクールの代表が、スタッフ、保護者、外部理事の自己評価シートを見たが、同じ組織の内部でもニュアンスの異なる評価が見られ、興味深かった。

- ・自己点検としては実施するべきと考える。
- ・NPO 法人等、法人格を取得している団体・機関では、類似の取り組みを既に行っている。法人格を持たない団体にとってどのような意味があるのかを検討することが重要ではないか。
- ・自治体（都道府県レベル）で多様な学びの機会の確保について条例化が進められている。自らが取り組んでいることが認められ、自分たちが考えているフリースクールはこのようなものであると示すことも重要である。
- ・パソコンを使用した第三者評価は、守秘義務のある情報のセキュリティの問題等を考えれば、レンタルパソコンであることが望ましい。
- ・施設の様子を紹介することを考えたら、ノート型パソコン以外にタブレット端末なども検討するとよいのではないか。
- ・社会的認知を促す意味でも、評価の取り組みは重要である。
- ・自己評価、第三者評価がビジョン、ミッションの言語化に有効であった。
- ・自己評価、第三者評価の内容は、何らかのミーティングで必ずしなければならない内容を含んでいた。
- ・自分たちの組織を振り返る点が有効であった。
- ・フリースクール同士の相互評価の機会がもっとあるとよい。
- ・インターネットを活用した相互評価は、普段なかなか直接訪問することのできない施設を見られるという点でよい機会であった。
- ・活動が周りの人いかに「見える」化できるかが重要であると考えます。
- ・対行政、対企業、対保護者、対子どもといった具合に、目的を明確にして周囲との関わり方を検討することが重要である。
- ・多様な子どもたちを、一つのフリースクールですべて対応するわけではないので、それぞれのフリースクール等の売りを明確にできるような評価項目が望ましい。
- ・評価機能を持った中間支援組織が必要である。またそのような組織の構築にどのような要素が要るかを検討してほしい。
- ・自己評価といっても、日々の実践や業務の多忙さにより、自己評価やその内容等について十分議論する余裕はない。それぞれのフリースクール等が特色を出しつつ、どのように質を高めていくかが重要である。
- ・自己評価や第三者評価を、今回は調査研究の一環として試行の形で実施したが、自分たちで費用負担等をする場合にどのようにするかはまだ見通せない。今回の試行のようなインターネットを活用した評価は、課題もあるもののよい方法ではないか。
- ・市民の信頼は必要なので、決まった評価基準があることが重要であると考えます。
- ・絶対数が少ない中で、相互に評価できるフリースクール等をどのように確保するかが難題である。
- ・学校とは異なる形で子どもを支えているので、評価項目も学校とは異なる形が望ましい。



- ・県内で組織しているフリースクール等のネットワークでこの自己評価シートを具体的に導入したい。
- ・評価の内容・レベルが高いのではないか。子どもにとって安全な場所であるかを見極められることが最も重要で、最低限見極められる評価基準を設定すべきではないか。
- ・フリースクール等について十分理解していない人にも分かってもらうことが重要である。

## 卷末資料

資料1 自己評価シート（改訂版）

資料2 自己評価シート（記入例）

資料3 フリースクール等（学校以外の学習の場）の評価の取組に関するアンケート調査

資料4 適応指導教室・教育支援センター等の評価の取り組みに関する調査



## (資料1) フリースクール等(学校以外の学習の場)の自己評価シート

黄色い欄をご記入ください。チェックボックスは該当するものに、チェックをしてください。

緑色欄は追加がある場合にご記入ください。

### 1. 団体の概要(フェイスシート)

ふりがな			
名称			
所在地	〒	住所	
電話番号		FAX番号	
メールアドレス			
ホームページアドレス	www.	開設年	西暦 年
ふりがな			
設置者・団体			
設置者・団体の性格			
<input type="checkbox"/>	法人格を有しない任意団体	<input type="checkbox"/>	社会福祉法人
<input type="checkbox"/>	NPO法人	<input type="checkbox"/>	宗教法人
<input type="checkbox"/>	一般・公益社団法人	<input type="checkbox"/>	医療法人
<input type="checkbox"/>	一般・公益財団法人	<input type="checkbox"/>	営利法人(株式会社・有限会社等)
<input type="checkbox"/>	学校法人	<input type="checkbox"/>	個人
<input type="checkbox"/>	準学校法人	<input type="checkbox"/>	行政・公的機関
<input type="checkbox"/>	その他( )		

### 2. 活動等の状況

#### ① 受入の対象

受入対象年齢(学齢)	下限	歳	上限	歳	※上限、下限が決まっていない場合は、「なし」と記入
在籍できる上限年齢	上限	歳			
備考( )					

#### ② 受入の条件(ある場合に記載)

--

#### ③ 運営形態(複数回答可)

<input type="checkbox"/>	通所型	<input type="checkbox"/>	宿泊型	<input type="checkbox"/>	訪問型	<input type="checkbox"/>	その他( )
--------------------------	-----	--------------------------	-----	--------------------------	-----	--------------------------	--------

#### ④ 子どもの学習や活動上の開所日数や時間

開所日数														
週		日												
曜日	<input type="checkbox"/>	月	<input type="checkbox"/>	火	<input type="checkbox"/>	水	<input type="checkbox"/>	木	<input type="checkbox"/>	金	<input type="checkbox"/>	土	<input type="checkbox"/>	日
備考( )														
長期の休み	<input type="checkbox"/>	夏休み	<input type="checkbox"/>	年末年始	<input type="checkbox"/>	春休み								
	<input type="checkbox"/>	その他( )												
⑤ 1日の開所時間														
開所		時		分	~	閉所		時		分				
備考( )														

## ⑥ 子どもの人数（2018年〇月〇日現在）

子どもの数 (2018年〇月〇日現在 の)		人数	特徴（あれば）	
	就学前	人		
	小学生	人		
	中学生	人		
	学 齢 期 超	15～17歳	人	
		18～19歳	人	
		20歳以上	人	
合計		0人		
2017年度の年間入会（入学）者数		人		
2017年度の年間退会（卒業）者数		人		

## ⑦ スタッフの概況

常 勤	有給	人
	無給	人
非常勤	有給	人
	無給	人
ボランティア	有償（実費の支弁など）	人
	無償	人

## ⑧ ホームページ等で公開している情報

<input type="checkbox"/> 理念や特長	<input type="checkbox"/> 学習や活動のようす
<input type="checkbox"/> 入会案内・入会条件	<input type="checkbox"/> 入会金・会費（授業料）・その他費用等
<input type="checkbox"/> 代表・責任者名、役員	<input type="checkbox"/> 団体・スクールの財務状況
<input type="checkbox"/> 在籍している子どもの概況（人数・年齢等）	<input type="checkbox"/> 問い合わせ先や方法
<input type="checkbox"/> スタッフの概況（人数・体制等）	

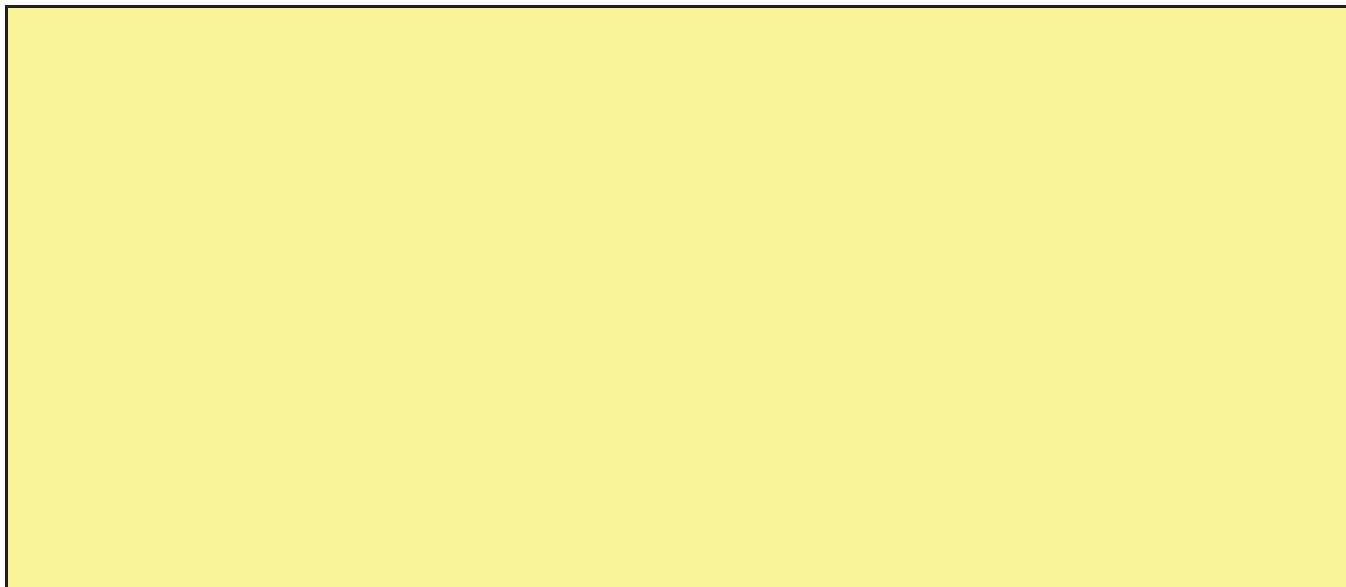
## ⑨ 活動内容（複数回答式）

<input type="checkbox"/> 個別の対応や学習	<input type="checkbox"/> 学習成果、演奏や作品などの発表会
<input type="checkbox"/> 授業形式（講義形式）による学習	<input type="checkbox"/> 居場所提供
<input type="checkbox"/> 社会体験（見学、職場体験など）	<input type="checkbox"/> 相談・カウンセリング
<input type="checkbox"/> 自然体験（自然観察、農業体験など）	<input type="checkbox"/> S S T（ソーシャル・スキル・トレーニング）
<input type="checkbox"/> 調理体験（昼食づくりなど）	<input type="checkbox"/> 受験勉強
<input type="checkbox"/> 芸術活動（音楽、美術、工芸など）	<input type="checkbox"/> 就労訓練
<input type="checkbox"/> スポーツ活動	<input type="checkbox"/> 保護者会、親の会
<input type="checkbox"/> 宿泊体験	<input type="checkbox"/> その他特色ある活動
<input type="checkbox"/> 子どもたちによるミーティング	

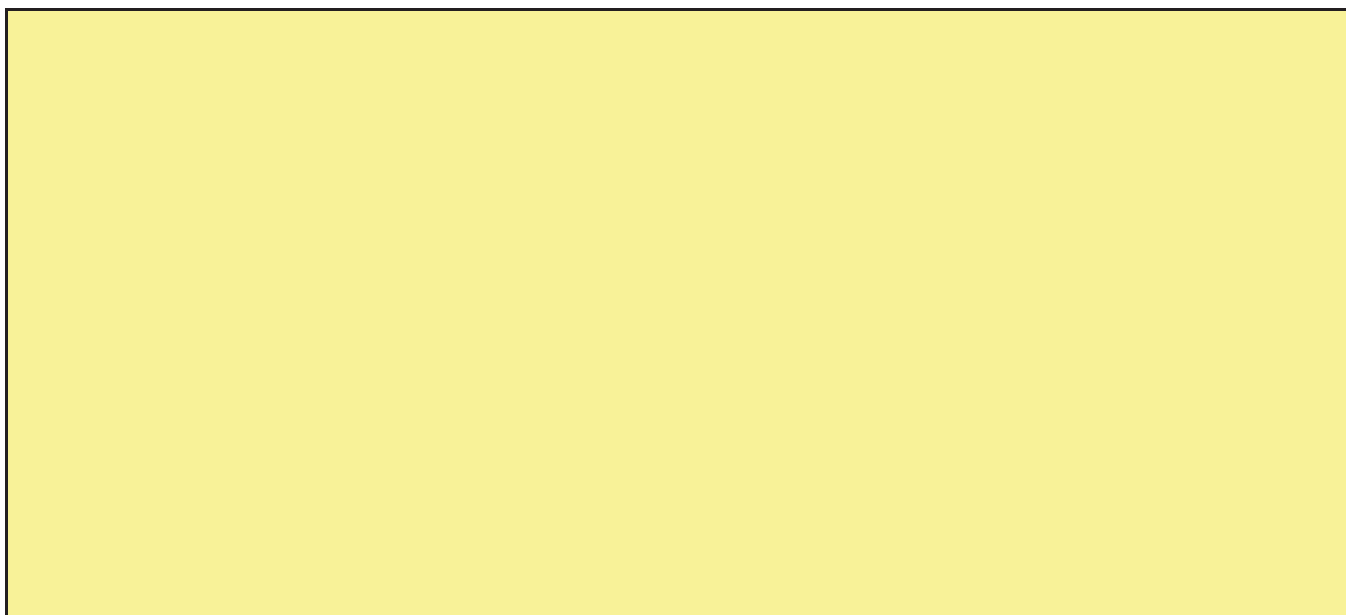
⑩ 安全面で実施・配慮していることについて  
（防災、衛生、情報保護、事故対応、保険、リスクマネジメントなど）

--

3. 私たちの団体・スクールの理念、学び・活動の特長



4. おおむねこの3年間で、私たちが重点的に取り組んできた方針とその方針の背景にあった子どもの状況やニーズ、団体・スクールの状況等



5. おおむねこの3年間で、学習や活動において、成果のあった特長的な取組事例（重点的な取組方針に沿った事例を記述。加えて、それ以外の特長的な事例があれば記述可。あわせて1～3事例まで）

- ・基礎的な学力の習得 ・体験的な学びや活動 ・個性や特徴、個別性に応じた学びや活動
- ・子どもの協同的な学び・活動 などの観点で記載

事例（1）	
①取組の概要	
②子どもの習得・経験・成長のようす	
③スタッフの関わり方	
④さらに充実・発展させるため改善点や方策など	
⑤付記事項	

追加事例（2）	
①取組の概要	

<b>②子どもの習得・経験・成長のようす</b>
<b>③スタッフの関わり方</b>
<b>④さらに充実・発展させるため改善点や方策など</b>
<b>⑤付記事項</b>

<b>追加事例（3）</b>	
<b>①取組の概要</b>	
<b>②子どもの習得・経験・成長のようす</b>	



③スタッフの関わり方

④さらに充実・発展させるため改善点や方策など

⑤付記事項

## 6. 子どもの進路について

退会（卒業）の子どもの進路選択の特徴、進路先の具体例、OB・OGの活躍や特記すべき事例など

## 7. 子どもの学び・活動の向上、団体・組織の向上のために、私たちが取り組んでいること（研修・評価など）

8. 私たちの団体・スクールの組織・運営について（・どのようなしくみがあるか ・反映した成果の実例  
・今の課題は何か などの観点で記載）

①子どもの意見を反映するしくみ、子どもが参加・参画するしくみ、その取組と成果について

②スタッフの意見を反映するしくみ、スタッフが参加・参画するしくみ、その取組と成果について

③保護者・その他の関係者の意見を反映するしくみ、彼らが参加・参画するしくみ、その取組と成果について

9. 学校・行政・地域・団体・NPO・企業等との連携について

①【学校・行政】どのような連携を行っているか、その成果、連携の課題や改善の方策などを記載

②【地域・団体・NPO・企業等】どのような連携を行っているか、その成果、連携の課題や改善の方策などを記載

10. 団体・スクールの理念を実現し、特長を活かし、学び・活動をより発展させるために、課題となっていることと改善のための今後の方針について

## (別紙1) フリースクール等 (学校以外の学習の場) の自己評価シート (記入例)

ふりがな	ふりーすくーるとうきょうしゅーれおうじ		
名称	フリースクール東京シュール王子		
所在地	〒 114-0021 東京都北区岸町1-9-19		
電話番号	03-5993-3135	FAX番号	03-3559-3137
メールアドレス	info@shure.or.jp oji@shure.or.jp		
ホームページアドレス	http://www.shure.or.jp	開設年	西暦 1985 年

## 運営主体

<input type="radio"/> 1 法人格を有しない任意団体	<input type="radio"/> 7 社会福祉法人
<input type="radio"/> 2 NPO法人	<input type="radio"/> 8 宗教法人
<input type="radio"/> 3 一般・公益社団法人	<input type="radio"/> 9 医療法人
<input type="radio"/> 4 一般・公益財団法人	<input type="radio"/> 10 営利法人 (株式会社・有限会社等)
<input type="radio"/> 5 学校法人	<input type="radio"/> 11 個人
<input type="radio"/> 6 準学校法人	<input type="radio"/> 12 行政・公的機関
<input type="radio"/> 13 その他 ( )	

受入対象年齢 (学齢) 下限  歳  
 上限  歳

在籍できる年齢 上限  歳

## フリースクール等の性格 (もっとも近いものを1つだけ選択)

<input type="radio"/> 1 フリースクール	<input type="radio"/> 6 塾・予備校
<input type="radio"/> 2 フリースペース	<input type="radio"/> 7 サポート校
<input type="radio"/> 3 居場所	<input type="radio"/> 8 福祉施設
<input type="radio"/> 4 オルタナティブスクール	<input type="radio"/> 9 就労支援施設
<input type="radio"/> 5 デモクラティックスクール	<input type="radio"/> 10 その他 ( )

## 運営形態

<input type="radio"/> 1 通所型	<input type="radio"/> 2 宿泊型	<input type="radio"/> 3 訪問型	<input type="radio"/> 4 その他 ( )
-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	---------------------------------

## 子どもの学習や活動上の開所日数や時間

開所日数										
週	<input type="text" value="5"/>	日								
曜日	<input type="radio"/> 月	<input type="radio"/> 火	<input type="radio"/> 水	<input type="radio"/> 木	<input type="radio"/> 金	<input type="radio"/> 土	<input type="radio"/> 日			
備考 ( )										
長期の休み	<input type="radio"/> 夏休み	<input type="radio"/> 年末年始	<input type="radio"/> 春休み							
	その他 ( )									
1日の開所時間										
開所	10	時	00	分	~	閉所	17	時	30	分
備考 ( )	初等部は16時まで									

## 子どもの人数 (2017年10月1日現在)

子どもの数 (2017年10月1日現在の)	人数	特徴 (あれば)
就学前	0人	
小学生	12人	不登校の児童
中学生	19人	不登校の生徒
高校生等	37人	提携する通信制高校、その他の通信制や定時制高校
大学生等	0人	
高校に在籍しない16~18歳	6人	
高校・大学等に在籍しない19歳以上	15人	一部は提携する高校の卒業生
<b>合計</b>	<b>89人</b>	
2016年度の年間入会(入学)者数	28人	
2016年度の年間退会(卒業)者数	24人	

## スタッフの概況

雇用関係あり	常勤	有給	7人
		無給	0人
	非常勤	有給	7人
		無給	0人
雇用関係なし	実費のみ支弁のボランティア		5人
	無償ボランティア		0人

## ホームページで公開している情報

<input type="checkbox"/> 1 理念や特長	<input type="checkbox"/> 6 学習や活動のようす
<input type="checkbox"/> 2 入会案内・入会条件	<input type="checkbox"/> 7 入会金・会費(授業料)・その他費用等
<input type="checkbox"/> 3 代表・責任者名	<input type="checkbox"/> 8 団体・スクールの財務状況
<input type="checkbox"/> 4 在籍している子どもの概況(人数・年齢等)	<input type="checkbox"/> 9 問い合わせ先や方法
<input type="checkbox"/> 5 スタッフの概況(人数・体制等)	

## 活動内容 (複数回答式)

<input type="checkbox"/> 1 個別の学習	<input type="checkbox"/> 7 スポーツ体験
<input type="checkbox"/> 2 授業形式(講義形式)による学習	<input type="checkbox"/> 8 宿泊体験
<input type="checkbox"/> 3 社会体験(見学、職場体験など)	<input type="checkbox"/> 9 子どもたちによるミーティング
<input type="checkbox"/> 4 自然体験(自然観察、農業体験など)	<input type="checkbox"/> 10 学習成果、演奏や作品などの発表会
<input type="checkbox"/> 5 調理体験(昼食づくりなど)	<input type="checkbox"/> 11 相談・カウンセリング
<input type="checkbox"/> 6 芸術活動(音楽、美術、工芸など)	<input type="checkbox"/> 12 家庭への訪問
<input type="checkbox"/> 13 その他特色ある活動(実行委員会をつくってのイベント、合宿、プロジェクト、海外体験など)	

## 私たちの団体・スクールの理念・特長

東京シューレは5つの理念を大切にしています。

- ①安心できる居場所であること
- ②やりたいことが応援される場所であること
- ③自分が決めること（自由）
- ④子どもどうしでつくりあうこと
- ⑤一人ひとりを尊重すること

子どもが安心していられる居場所、自分が自分であることを大切にします。安心から自信が生まれてきます。

子どもがやりたいことを応援します。どうしたら実現できるかを一緒に考え、それに向けたサポートを行います。

子どもが考え、決めることを尊重します。自己決定、それが自由です。そしてそれに伴う責任も学ぶことができます。

子どもが中心で進めています。学習・体験・活動のこと、生活のこと、ミーティングや実行委員会など、自分たちで相談して決めていきます。

それぞれの人の違いを大切にします。いろんな個性、感性、ペース、趣味、能力・・・一人ひとりの存在自体がすばらしく、生きているあなたを尊重することを大切にします。

## 団体・スクールの特長的な学び・活動の実践事例や実績

(取組の概要、子どもの成長、スタッフの関わり、保護者、地域との関わり等の観点を踏まえて)

フリースクールでの学びには、不登校への理解がとても重要と考えています。東京シューレは不登校の親の会の活動から生まれ、保護者どうしの学び合いや支え合いがベースとなって、子どもが安心して過ごし活動できる場をつくり運営を支えています。スタッフも親の会の活動から多くを学び、子ども中心の学びを共に創りともに支えるパートナーです。

子どもの経験や日常、興味関心や遊びから学びを創っていきます。例えば、不登校は大部分の子どもにとってとても辛く苦しい経験ですが、そこから自己理解・自己肯定感、社会の認識や理解、権利や正義、人や社会との相互理解やコミュニケーション、人間社会や環境の多様性の重要性などを学んでいきます。

フリースクールでの生活・学習・活動は週1回のミーティングによって提案・議論・決定され、異年齢の子どもどうしもスタッフとも対等な立場で参加し話し合います。意見表明、自他尊重、民主主義、問題対処と解決、物事の実現を学んでいきます。

## 私たちが重点的に取り組んできたこととその取り組みの背景にあった子どもの状況やニーズ、団体・スクールの状況等

(大切にしていること、留意して取り組んできたこと等) (おおむね、この3年間)

### ①個性を尊重し個別性を大事にした活動

不登校経験、発達障がい等の特性、家庭環境など多様な状況や困難を経験した子どもも少なくなく、一人ひとりの個性を尊重し、子どもを場に合わせるのではなく、できる限り、子どもを中心に個別性に応じて、場が子どもに合わせて変わるよう取り組んできた。

### ②個々のやりたいことから発しミーティング等を通して協同して創る体験的な学び

5年前に通信制高校と連携して高卒資格が取得できる「高校コース」を開設した。資格取得に偏重したり、そのために精一杯になる子どもも出ていたため、フリースクールらしい子ども中心の子どもが創る体験的な学びに取り組んできた。

### ③NPO・企業・地域等の社会資源を活用した学び

限られた教育財源のなかで少しでも充実した学びを実現するために、NPOと連携した科学実験講座、企業の社会貢献と連携したプログラミング講座やコミュニケーションロボット共同開発、保護者や協力者が受け入れる仕事体験などを行ってきた。

おおむねこの3年間で、学習や活動において、成果のあった特長的な取組について（1～3事例まで）

- ・基礎的な学力の習得 ・体験的な学びや活動 ・個性や特徴、個別性に合った学びや活動
- ・子どもの協同的な学び・活動 などの観点で記載

事例（1）	初等部プログラム（時間割）における「個別タイム」の取組
<b>①取組の概要</b>	
<p>初等部は中等部や高等部と比べ人数が少なく、年齢の幅、趣味や楽しみ、過ごしたいスタイル、他者とのコミュニケーションの取り方などの違いや志向性も大きい。個々の特性や志向性に個別対応しつつ、フリースクールならではのミーティングや共同での活動体験などを生成するために、スタッフと子どもが1対1で1時間を過ごす「個別タイム」を週に1回を基本に設定し、プログラム表において、それぞれの「個別タイム」が分かり合えるように表記して実施した。</p>	
<b>②子どもの習得・経験・成長のようす</b>	
<p>好きなゲームの話がたくさんできフリースクールになじむようになった子、やりたかった英会話の時間を持った子、授業形式ではない個別での算数など基礎学習の時間が確保できた子、モノづくり・科学実験が好きで授業の延長で個別に時間を持って深めた子などがおり、安心して継続した学びの時間が確保できるようになった。また、限られたスペースでワイワイと落ち着きのない時間も多かったが、他の子の個別タイムを意識して静かにしたり、協力して一緒に取り組んで見るなど、個別性から協同性に発展し、ミーティングを経てサークルになったりイベントになったりするなどした。</p>	
<b>③スタッフの関わり方やコミット</b>	
<p>個々の子どもの、その時の気持ちや状態を尊重しつつ継続していくこと、個々の関心や志向に向き合いつつ他の子どもの関心との重なりや距離感に配慮して、子どもどうしをつなげたり、友だちづくりを応援したり、初等部としての活動づくりに発展させていくことができた。</p>	
<b>④さらに充実・発展させるため改善点や方策など</b>	
<p>教育機会確保法の成立や国・教育委員会等の不登校・フリースクール支援の方向から、初等部保護者の説明会参加、入会希望が急増している。常勤スタッフ、サポートスタッフ、ボランティアなどできるだけ多くきめ細やかに時間を確保していくための体制づくりが必要。学生ボランティアやインターンの受け入れは重要。</p>	
<b>⑤付記事項</b>	
<p>初等部に限らずフリースクールでは子ども個々の通い方・通うペースはさまざまだが、人目が気になるなどで家から出にくい状況の子どももいる。家庭で過ごすことをベースに「個別タイム」を設定し、訪問やネット等によるサポートができるとよいと考えている。</p>	

子どもの進路について

①昨年度退会（卒業）の子ども進路選択の特徴、進路先の具体例など

福祉系専門学校・大学進学などが増えている。不登校経験からスクールソーシャルワーカーになったOB・OGがおり関心の高い進路分野となっている。

②OB・OGの活躍や特記すべき事例など

9月1日に子どもの自殺が多いことを大手新聞で報道した記者は卒業生であった。また、フリースクールでスタッフに支えられた経験から難民を支える活動を続け国連難民高等弁務官事務所職員になっている女性もいる。東京シュール30周年を機に取材編集して作成した『OB・OG100人インタビュー』をWEBで公開している。

## 団体・スクールの組織・運営について

・どのようなしくみがあるか ・反映した成果の実例 ・今の課題は何か などの観点で記載

### ①子どもの意見を反映するしくみ、子どもが参加・参画するしくみについて

○毎週月曜日15:00～16:00定例でミーティングの時間がある。初等部、中等部、高等部がいっしょに行う全体ミーティングと部別ミーティングがある。

○ミーティングは、フリースクールでの生活・学び・活動をつくり決定していく最高決定の場で、年齢の大きい子が小さい子をうまく配慮して意見を出しやすくしたり、スタッフも子どもと対等な関係であると認知し合いつつも子ども中心で議論が進むように配慮している。

○プログラム（時間割）に入る授業・活動は、子どもが要望や意見を出し合い、ミーティングで決めたものとなっている。

○ミーティング自体の参加も自己決定であるため、ミーティングの意義の理解や他者を受け入れる気持ちの余裕が必要であるが、参加者がたいへん少なくなる時期も出ている。ミーティングにおいてミーティングの在り方を議題に挙げて話したり、議事進行の準備や工夫をするなどが行われている。

### ②保護者・スタッフ・その他の関係者の意見を反映するしくみ、彼らが参加・参画するしくみについて

○理事会構成を半分が保護者などの立場、半分は現場のスタッフとしており、保護者の立場のなかでは2名が王子現役保護者、3名が王子卒業生保護者の立場であり、理事会は8月を除き年11回通常会が行われている。

○保護者会も年11回行われ、子どものこと、運営のことなどを話しあい進めている。スタッフは保護者の議論や経験から学び子ども理解や活動に反映させている。

○毎週水曜日9:30～12:00を全スペース全部門の常勤スタッフミーティング、毎週月曜日9:30～10:00、水曜日12:00～13:00、第2木曜日17:30～18:30（体験見学中の子ども等のケース検討）を王子スタッフミーティングとし、活動づくり、子どものことの共有、スペースや団体運営なども含めて検討議論している。決定についても多くを現場スタッフに委ねている。

○また理事会とスタッフから選任された給与待遇改善委員会が組織されており、自らの待遇改善にも取り組んで反映してきている。

### 安全面で実施・配慮していること

災害時マニュアルの策定と周知、年2回の避難訓練の実施、チュートリアル（個別面談）実施時に子どもの状況を把握する、初等部は通勤ラッシュに当たらないよう16:00活動終了とする等。



## 地域・学校・行政との連携について

どのような連携を行っているか、その成果、連携の課題や改善の方策などを記載

- 小中学生の会員の在籍校に「報告書」（通所日数と活動のようす）を送付（希望しない子どもや家庭は行わない）
- 夏休みに「担任見学会」を開催し、スタッフとの情報交換を行っている。
- 実習用通学定期の活用についても積極的にガイダンスしている。
- 平成28年度東京都教育委員会委託事業「教育支援センター（適応指導教室）サポート講座事業」を受託
- 行政視察や研修の受け入れ等も極力受けている。
- 平成30年度北区政策提案協働事業に応募し採択が決定した。
- 地元町会には町会備品を貸していただくなど応援いただき、日常的にも子どもの見守りをしてくださっている。
- 青少年地区委員会や保護司会の研修で不登校やフリースクールの話をしたり、北区NPOボランティアふらざ、社会福祉協議会、区議会議員各会派等との関わり大事にしている。

## 団体・スクールの理念を実現するためや特長を活かすために、発展させたいことや改善したいこと及びその方策について

- 初等部の構成比率が増えていく予測である。個別タイムによる個別性尊重と協同的な学びをさらに充実・発展させたい。しかし、スペースが手狭になったり、スタッフ体制の不足がある。ボランティアや非常勤スタッフを増やすことで改善を図っているが、2018年度に新スペースを開設する予定のほか、インターンシップによるフリースクールスタッフ養成プログラムおよびフリースクール創業支援プログラムを助成財団と共同開発し開始する計画である。これらによって場とスタッフ体制の改善を図る。同時に、東京シューレで学び各地でフリースクールに携るスタッフを養成したりフリースクールが増えていくことに寄与していこうと考えている。
- APDEC2017（アジア太平洋フリースクール大会）を機に国際交流の機会が増え、高等部を中心に海外へ旅をする計画がある。実行委員会方式で子ども中心で実現していく予定である。
- 「不登校の子どもの権利宣言」や子どもの権利条約からの学びから、自らの不登校経験と照らして権利を学ぶ機会をさらに充実させたい。かつて活動していたOB・OGたちが参画する機会をつくり継承的な学びとしていきたい。
- 高等部は人数も多い。より多様な進路や可能性に出会う機会を増やしたい。NPOや地域・企業、OB・OGなど、学びの社会資源を活用していく。

### 資料3 フリースクール等（学校以外の学習の場）の評価の取組に関するアンケート調査

#### ◆調査協力をお願い◆

このたび、私どもの研究協議会（下記）では、文部科学省「平成30年度いじめ対策・不登校支援等推進事業（学校以外の場における教育機会の確保等に関する調査研究）」による受託研究事業、「民間団体の自主的な取組の促進に関する調査研究」として、フリースクール等の学校以外の教育の場における自己評価や相互評価、第三者評価の方法や内容について検討しております。昨年度も私どもの研究協議会（代表：東京学芸大学教授・加瀬進）から自己評価シート（試案）についてのご意見を頂戴したところでございます。

今回ご協力をお願いする調査は、標記の通り、各団体様の自己評価や相互評価、第三者評価の取組についておたずねするものです。ご存知の通り、これらの評価はフリースクール等の代表者、管理者のみならず、スタッフ、保護者等、さまざまな立場からの実施が重要とされております。そのため、今回は各団体様に10部ずつ調査票を送らせていただき、出来るだけさまざまなお立場の方からのお考えをお聞かせいただければ幸いに存じます。

年末年始のお忙しいところ大変恐縮でございますが、ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

#### ◆記入上の注意◆

- ・このアンケートは、学校以外の団体・施設における学びや活動の評価についてお答えいただくものです。団体・団体で学ぶ子どもへの評価についてお答えいただくものではありません。
- ・各団体様に10部ずつ送付させていただきますが、各団体様での取りまとめをする必要はなく、返信用封筒（同封）にて個別にご返送いただけますよう、お願い申し上げます。
- ・記述式のところは、楷書で明確にご記入ください。
- ・選択肢のところは、該当する番号に○をつけてください。
- ・平成30年12月1日現在の状況をご記入ください。
- ・お忙しいところ誠に恐縮ですが、記入済の調査票は同封の返信用封筒（切手不要）にて、**平成31年1月31日（木）まで**にご投函ください。

#### 【調査実施主体】

文部科学省「平成30年度いじめ対策・不登校支援等推進事業（学校以外の場における教育機会の確保等に関する調査研究）」「民間団体の自主的な取組の促進に関する調査研究」フリースクール等研究調査班（代表：東京学芸大学准教授 村山 拓）

#### 【アンケート調査に関する問合せ先】

東京学芸大学総合教育科学系准教授 村山 拓 (takumvn@u-gakugei.ac.jp)

東京学芸大学総合教育科学系事務係 受託研究担当 沢田幸恵 (soukei@u-gakugei.ac.jp)

#### I. 団体・施設の基本情報について

問1 貴団体・施設の基本情報を記入してください。（お分かりにならない情報は空欄のままで結構です。）

団体・施設の名称 (記入任意)		
所在地	都道 府県	区市 町村
設立時期	西暦( )年	

運営主体	1. 特定非営利活動法人（NPO法人） 2. 学校法人（準学校法人を含む） 3. 公益社団・財団法人、一般社団・財団法人 4. 営利法人（株式会社等）	5. 1～4以外の法人（社会福祉法人等） 6. 法人格を有しない任意団体 7. 個人
団体・施設の類型	1. フリースクール（フリースペースを含む） 2. 親の会	3. 学習塾 4. その他特色のある教育を行う施設など
週の開室日数	週（ ）日	
団体・施設の在籍する子どもの数	1. 10人未満 2. 10～20人未満 3. 20～50人未満	4. 50～100人未満 5. 100人以上
団体・施設の活動費	1. 100万円未満 2. 100万円～500万円未満 3. 500万円～1000万円未満	5. 1000万円～3000万円未満 6. 3000万円～5000万円 7. 5000万円以上
このアンケートにご記入いただいている方について	団体・施設におけるあなたの主たるお立場（1つだけに○）	
	1 代表・施設長等の責任者 2 スタッフのまとめ役などの管理的立場 3 スタッフ・職員	4 ボランティア 5 保護者 6 その他（ ）
	あなたは団体・施設に関わって何年目ですか。（ ）年目	

## II. 貴団体・施設の評価に関することについて

問2 貴団体・施設では、活動の実施や発展のために、次のことを行っていますか。該当する番号全てに○をつけてください。

1. スタッフによる評価（ミーティング、振り返り、アンケート、その他、手法は問いません） 2. 子ども（会員・生徒）による評価 3. 保護者による評価 4. 役員や運営委員による評価 5. 支援者や協力者による評価 6. 内部のアドバイザーや専門家による評価 7. 第三者（同業種他団体やネットワーク組織等）による相互評価 8. 第三者（学識者・専門家等）による外部評価 9. 活動報告書などの作成・公表 10. 活動報告会や活動発表会の開催 11. 外部の研究会・フォーラム・学会等での報告や発表 12. 子どもの在籍校・教育委員会・その他行政等による視察見学の受け入れ 13. 一般・研究者・メディア等による視察見学の受け入れ 14. その他評価に関すること（具体的に ）
---

問3 貴団体・施設において、自己評価、相互評価や第三者評価を実施する場合、どのようなメリットや効果を期待しますか。各項目ごと該当する番号1つに○をつけてください。

	1 大いに期待する	2 やや期待する	3 あまり期待しない	4 全く期待しない
1. 子ども（会員・生徒）の募集	1	2	3	4
2. 学びや活動の成果確認・改善・向上	1	2	3	4
3. スタッフ・ボランティア等の確保・質・士気の向上	1	2	3	4
4. 子どもや保護者とのコミュニケーションや信頼性向上	1	2	3	4
5. 支援者・協力者とのコミュニケーションや信頼性向上	1	2	3	4
6. 関係者間の意識共有や改革	1	2	3	4
7. 在籍校や教育委員会からの理解促進	1	2	3	4
8. 公民連携の推進	1	2	3	4
9. 社会的地位や認知の向上	1	2	3	4
10. 支援者・協力者の獲得や拡大	1	2	3	4
11. 公的財政支援の実現や拡大	1	2	3	4
12. 企業・財団等の支援や寄付金の獲得や拡大	1	2	3	4
13. 進学・就労先など進路の拡大	1	2	3	4
14. 説明責任を果たす・促進する	1	2	3	4
15. 組織や運営の基盤強化	1	2	3	4
16. 政策・施策への効果的な影響	1	2	3	4

問4 貴団体や施設において、自己評価や相互評価、第三者評価を実施する場合、どんなことがあると実施しやすいですか。各項目ごと該当する番号1つに○をつけてください。

	1 まる 大いに当てはまる	2 る やや当てはまる	3 ま あまり当てはまらない	4 ら 全く当てはまらない
1. 時間・労力に余裕	1	2	3	4
2. 評価のスキル・手法・ノウハウ	1	2	3	4
3. 評価に当てる資金	1	2	3	4
4. 評価を行うことについて内部の合意	1	2	3	4
5. 評価を行うことについて外部の協力者	1	2	3	4
6. あなたご自身が評価は必要ないと考えている	1	2	3	4

問5 貴団体で仮に第三者評価を実施するとしたら、その評価実施にどのような方に加わってもらうのがよいとお考えですか。当てはまるもの全てに○を付けてください。

1. フリースクール等の実務経験者	2. 学校教育関係者（教員等）
3. 適応指導教室・教育支援センターの職員等	4. カウンセラー等の心理職員
5. ソーシャルワーカー等の福祉職員	6. 医療関係者（もしあれば 科）
7. 行政関係者（市区町村の職員等）	8. 財務・経理等の専門家
9. 民間企業の社員等	10. 教育関係の研究者
11. あなたご自身が評価は必要ないと考えている	12. その他（以下にお書きください。）
12に○を付した場合の具体例をお書きください。	

問6 「教育機会確保法」成立・施行後の貴団体の活動で変化したことはありますか。該当する番号いずれかに○をつけてください。「1. 変化を感じる」に○をつけた場合は、変化について具体的にご記入ください。

子どもや保護者に関して	1. 変化を感じる	2. 変化は感じない
具体的に		
学校や教育委員会からの評価に関して	1. 変化を感じる	2. 変化は感じない
具体的に		
地域や社会からの評価に関して	1. 変化を感じる	2. 変化は感じない
具体的に		

ご協力ありがとうございました。

資料4 適応指導教室・教育支援センター等の評価の取り組みに関する調査  
(「民間団体の自主的な取組の促進に関する調査研究」の一環としての調査)

【設問1】

教育機会確保法の成立以降、貴機関の活動や取り組みで変化したことがありますか。当てはまるものすべてに○を付けて下さい。

1. スタッフを増員した。
2. スタッフ増員のための予算が確保しやすくなった。
3. 施設設備の充実を行った。
4. 施設設備の充実のための予算が確保しやすくなった。
5. 民間団体(フリースクール等)との連携が進んだ
6. 家庭へのアウトリーチ活動が始まった(あるいはしやすくなった)。
7. 学校復帰に対する本人や保護者の考え方が変わってきた。
8. 学校復帰に対する機関としての考え方や職員の考え方が変わってきた。
9. その他(以下にご記入いただければ幸いです)

【設問2】

フリースクール等との連携についておたずねします。貴機関での取り組みに当てはまるものにつけて下さい。

1. 以前より連携に取り組んでおり、教育機会確保法成立以降も大きな変化はない。
2. 以前より連携に取り組んできたが、教育機会確保法成立以降、さらに活発になった。
3. 以前より連携に取り組んできたが、教育機会確保法成立以降、縮小している。
4. 以前から連携にはさほど取り組んでおらず、教育機会確保法成立以降も大きな変化はない。
5. 以前は連携にさほど取り組んでこなかったが、教育機会確保法成立以降は、連携が活発になってきている。
6. その他(以下にご記入いただければ幸いです)

【設問3】

私どもの調査研究では、フリースクール等の教育実践の質保証のための自己評価、フリースクール同士の相互評価、外部による第三者評価の試行に取り組んでおります。貴機関におかれまして、自己評価、相互評価、第三者評価や、機関をこえて教育実践を見合って実践の質を高めよう取り組み、情報交換等、自己評価や相互評価に類する取り組みを行っておられる場合は、その内容についてご紹介下さい。

【設問4】

仮に貴機関で第三者評価を実施するとしたら、その評価実施にどのような方に加わってもらうのがよいとお考えですか。当てはまるものすべてに○を付けて下さい。

1. 適応指導教室の実務経験者(他機関の職員等)
  2. 学校教育関係者(教員等)
  3. 不登校に関わるフリースクール等の関係者(職員等)
  4. 不登校経験者・家族等の当事者
  5. 親の会、フリースクール等の民間団体の関係者(保護者等)
  6. カウンセラー等の心理職員
  7. ソーシャルワーカー等の福祉職員(家庭家族支援の担当者等)
  8. 医療関係者
  9. 行政関係者(市区町村等の職員等)
  10. 財務、経理等の専門家
  11. 民間企業の社員等
  12. 教育関係の研究者
  13. その他(お書きいただければ幸いです)

ご協力ありがとうございました。なお、いただいたご回答につきまして、もしこちらからの問い合わせ等をお受けいただける場合は、以下にお名前、ご連絡先等をご記入いただければ幸いです(必須ではございません)。

機関名: \_\_\_\_\_ ご担当者名: \_\_\_\_\_  
連絡先(電話、電子メール等) \_\_\_\_\_

平成 30 年度文部科学省  
「いじめ対策・不登校支援事業等推進事業」の一環として、  
「学校以外の場における教育機会の確保等に関する調査研究」  
（「民間団体の自主的な取組の促進に関する調査研究」）  
調査研究報告書

平成 31 年 3 月 27 日発行

発行者：東京学芸大学 〒184-8501 東京都小金井市貫井北町 4-1-1  
代表者：村山 拓（東京学芸大学総合教育科学系）





